
Cromu ~クロム~

無恵菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r o m u くろム

【Nコード】

N 1 8 7 2 K

【作者名】

無恵菜

【あらすじ】

生命の息吹が響きあう世界、「テュルキュミア」。

そこには二つの種族が住んでいました。

そんな世界にある日突然、新たな種族が生まれました。

その種族の名は・・・。

プロローグ―昔々のお話―

生命の息吹が響きあう世界、「テュルクミア」。
この世界に住んでいる二つの種族、「ヒト」と「アルフィ」。

ヒトは、アルフィを恐れていた。

姿かたちは似ているのに、空気中にあふれている自然の力、「ステイア」を術式に変換し、「素術^{そじゆつ}」として使用することの出来るアルフィを。

ヒトは考えた、アルフィと同等の力を手にする方法を。

ヒトは試した、考えだされた方法を。
何度も、何度も、何度も繰り返した。

だが、全て失敗に終わってしまった・・・。

ヒトたちは、やる気を失いあきらめてしまった。

しかし、あきらめていないヒトがいた。

そのヒトの名は、カルヴィド。

カルヴィドは、ヒトの体内にステイアを取り入れる装置、「ステイアセイヴ」の開発に成功した。

ステイアセイヴを装備したヒトは、身体能力が驚くほどまで上昇した。

ヒトは手にしたのだ、アルフィと同等の力を。

しかし、一つの不安が頭をよぎった。

――彼らが自分たちにも牙をむくのではないか？

カルヴィドは、「大丈夫ですよ。」とだけ言って、手につけていたブレスレッドを空に向かって掲げた。

すると、突如ブレスレッドが光りだした。

その光に共鳴するかの用に、スティアセイヴも光りだした。

「我が前にひざまずけ。」

そうカルヴィドが言うと、スティアセイヴを装備したヒトは、彼の前にひざまずいた。

「彼らは装置を装備している限り、ブレスレッドをつけているものには絶対に逆らいませんよ。」

カルヴィドの一言に、ヒトたちは声を上げて喜んだ。もう、アルフィたちに恐れることはないのだから。

カルヴィドは名付けた。

ヒトを救った、スティアセイヴをつけた彼らに。

この世界、テュルクミアに伝わる「赤眼をした救世主」と言う意味の言葉、「クロム」と……。

プロローグ／昔々のお話／（後書き）

この小説を読んただきありがとうございます！！
作者自体、まだまだ未熟で作品の更新も決まった日に出来ませんが、
見守っていただけたら光栄です。

第1話　赤眼の少女

「……………ふう。」

……………パタンッ。

少年は読んでいた本をゆっくりと閉じた。

「やっぱりすごいなあ……………カルヴィドさんは。」

少年は、本を強く抱きしめた。

本は厚く、少し色あせている。

よく見ると、ページの端がところどころ折れ曲がっているので、何度も読み直している事がわかる。

「フォルカッッ、そろそろ下りて来なさい！朝ごはんが片付かないでしょうっ！！」

扉越しに、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「は〜い、母さん！」

フォルカと呼ばれた少年は、本を元あつた本棚にきちんとしてしまいドアノブに手をかける。

しかし、フォルカの動きは止まり、自分の机に駆け寄った。
そして一言、

「必ず追いつくからね……………兄さん。」

母の一言だった。

スープを口に運んでいたスプーンが止まる。

そして、そのままスプーンをテーブルに置いて、

「……、うん。」

と、短く答えた。

「本当にすごいわよね、フィニカは……。自分だけの力で大都おおとのクロムの研究チームに入っちゃうんだもの。」

大都……というのはこの世界、テュルクミアの中で一番大きく、発展した都市の事。

フォルカの兄・フィニカはそのトップクラスの研究チームのメンバーに、半年前になったのだ。

「うんっ、早く僕も兄さんみたいに大都に行ってクロムの研究チームに入りたいんだ!!」

フォルカにとって、フィニカの存在は憧れであり、目標だった……。

- 兄のようにになりたい - - -

その気持ちでフォルカの支えであった。

「フォルカならなれるわよ、なんたってフィニカの弟ですもの。」

「ありがとう……、母さん。」

わからないことがあつたら教えてくれたし、答えがあつていたら一緒に喜んでくれた。

そんな兄いなくなつたのだから、違和感を感じるのも仕方がないと自分に言い聞かせていた。

……、今日までは。

母の何気ない一言が、抑えていた気持ちを爆発させたのだ。

母や村の人の前では笑っていられた。

しかし、一人になってしまふこの時間が……この優しい風が……フォルカの感情を押し出してしまうたのだ。

「……、兄さん……会いたいよ……。」

目に熱い何かがこみ上げて……、こぼれた。

自分でも気づいた、これは……。

「な……みだ……。」

こぼれたものの正体がわかったとき、一気にこぼれ出した。

長いようで短い半年という時間が、いつの間にかフォルカの中に寂しさを生んでしまっていた。

「兄……さん……、に……さん……。」

あにの事を口に出し続けるが、どんどんはつきり言えなくなっていく……。

フォルカは自分の感情に押しつぶされそうになった。

.....その時つ。

背中の方から風を感じた。

(・・・、あれ?)

フォルカはその風に違和感を感じた。

先ほど髪を撫でた風はフォルカの前から後に吹いていた。

しかし、今吹いている風は後から感じる。

その上、言葉では言い表せない何かを感じる。

(なんだろう・・・。)

フォルカは後ろを確かめようとする。

すると・・・、

.....びゅんっ!!!!

何かが自分の横をかなりの速度で通りすぎた。

「!?!」

フォルカはすぐに前に向き直った。

フォルカの目に映ったのは・・・。

緑色の短い髪の毛・・・、黒いノースリーブで丈の短いワンピース・
・・・。

そして・・・

「赤眼の救世主^{ケロム}・・・。」

赤い眼をした女の子だった・・・。

第1話「赤眼の少女」(後書き)

第一話を読んでいただきありがとうございます。

終わりの方は、考えるのにとっても苦労しました・・・。

キャラの外見イメージが伝われば、嬉しいです。

次の話はいつ更新するかは未定ですが、読んでいただければ嬉しい限りです。

第2話　目に映ったモノ

「赤眼の救世主^{クロム}……。」

フォルカは目を疑った。

クロムとは、ブレスレッドをつけたもののそばにいる。
ブレスレッドをつけられるものといったら、クロムの研究者と一部の
貴族くらいのもの。

フォルカの住むところには貴族どころか研究者もいないので、クロ
ムがいること自体不自然なのだ。

「どうしてここに……？」

その時……、

「ふせてえええ〜！！！！！」

と大きな声が聞こえた。

「ええっ!?!」

フォルカはとっさに身をかがめた。

……シュンッ……!

何かが背中を通り過ぎたように感じた。
チラッと後を見た。

先ほどまで背もたれ代わりにしていた大木……、その大木がこちらに倒れてきた。

「ッ！！！」

フォルカは逃げようとした。
しかし、足が震えて動けない。

（兄さんっ！！）

「クラス、お願い！！」

「……了解っ！」

その時、目の前のクロムが猛スピードでこちらに向かってきた。
そして、フォルカの体を容易く持ち上げてその場を離れた。

……ドシイッン！！！！

間一髪で、フォルカは大木を避けることが出来た。

このクロムのおかげで……。

「あっ……、ありが……」

お礼を言いかけたとき、緑髪のクロムはフォルカをその場に置き、
何かに対してかまえた。

「えっ、何か・・・いるの？」

「・・・・・・・・・・。」

彼女は答えない。

ただ一点を見てるだけ・・・。

「そこの君・・・。」

後から声が聞こえる。

クロムの彼女が反応しないと云うことは、彼女のブレスレッドをつけているのだろう。

フォルカはゆっくりと振り向いた。

目に映ったのは・・・

後ろが短く横が胸くらいまである黒髪、半袖と短パンの動きやすそうな服装をした女の子だった。

「怪我はない？」

「うっ・・・・・・・・うん。」

「なら良かった！」

その子はフォルカに向けてにっこりと笑った。
そして手を差し出して、

「私、エリアル・ライシエス。エリアルって呼んでね！」

「僕はフォルカ、フォルカ・テイル。」

フォルカは彼女・エリアルの手を握った。
・・・、ふと気づく。

「ブレスレッドは・・・？」

「えっ!？」

エリアルは手を振りほども、フォルカから眼をそらした。

「・・・、エリアル？」

先ほどまでまぶしい笑顔をしていたエアリアルの顔が・・・、曇った。
そして、クロムの彼女に、

「・・・、敵は？」

と聞いた。
彼女は、

「・・・、まだいる。」

と短く答えた。

・・・その時っ!!

草むらから何かが高速で飛び出した。

「・・・ッ!!!!」

彼女は瞬時に回避、そして、

「炎素スティア集束……。」

両手に炎を発生、そして地を蹴り高速で相手に接近して……

「炎打えんだ!!」

炎をまとった拳を連続して繰り出した。

「……、フンツ。」

相手は瞬時に水素スティアを展開。

「水打すいだ!!」

水をまとった拳を連続して繰り出し、相殺。

相殺したと同時に、すばやく足を回転させ蹴りを入れた。

「……くうっ!!」

彼女に一撃が入り吹き飛ばされた……相手が悪すぎる。

彼女の攻撃が、まったく通用してない。

「さあ……、きてもらうぞ……。」

相手が彼女の手を掴む。

彼女は気を失っているのか全く抵抗しない。

「クラスウウ~~~~!!!!!!」

エリアルは叫び、クラスと呼ばれた彼女のほうに走り出した。

「クラスを離せエエエ!!!!!!」

エリアルは腰についていたものを手に持った。

すると、そのものの先に刃のようなものが形成された。

「……、人間風情が。」

相手はエリアルの武器を叩き落した。

「クロムに勝てるんでも？」

そしてエリアルの腹部に一発、蹴りを入れた。

「アアツ!!!!!!」

エリアルの体はいとも簡単に吹き飛ばされた。

「そこでじっとしているんだな。」

「くうっ、クラ・・ス。」

エリアルはクラスに向かって手を伸ばした。

「……、届くわけがないのに。」

（このままじゃあ……、だけど。）

フォルカが敵うはずない、二人をものの数分で倒してしまった奴に・
・。。

「フォルカ・・・、お・願ひ・・・。」

エリアルがフォルカを呼んだ。

「エリアル・・・？」

「・・・クラスを・・・、たす・けてっ！！。」

それは、エリアルの心からの叫びだった。

「・・・・・・・・。。。」

フォルカは悩んだ。

・・・エリアル

の願ひをきくべきなのか？・・・

エリアルのほうを見る。

痛みもあるのか、涙が流れている。

(怖いけど・・・、怖いけど!!!(

フォルカは下唇をかみ締め、体の震えをこらえたとて、

「やめろおおおお!!!!!!」

フォルカは走った。

ただただ……、エアルの思いを無駄にしないためにも。

「……、まだいたのか。」

相手はこちらを向く。

一撃食らうのは、……覚悟していた。

しかし……、

(……、あれ？痛くない。)

相手のほうを見る。

相手は目を見開いてこちらを見ていた。

「……、フィニカ様……？」

「えっ!？」

彼女は言った、確かに言った。

兄・フィニカの名を……。

「何で兄さんの名前を!？」

「兄……、そうかお前が……。」

彼女はクラスの手を離した。

そして後を向いて、

「早く連れて行け……。」

と言った。

「えっ、なんで……？」

「……………」

彼女は答えない。

そして、ゆっくりその場を去ろうとした。

「待って、どうしてあなたは……兄さんの名を？」

「お前に語ることは何もない……。」

彼女はそういって、坂道を下っていった。

フォルカは後を追ったが、彼女の姿はもうなかった。

「…………、そうだったエリアル……！」

フォルカはエリアルの怪我のことを思い出し、急いで彼女のところへ向かった。

第2話〜目に映ったモノ〜（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。

少し、伝わりにくかったかもしれませんがね・・・。

次の話もがんばって書くので、よろしく願います！

第3話〜変わるもの〜

・・・昨日はいろいろなことがありすぎた。

クロムと出会ったり、女の子に声をかけられたり・・・、

兄さんを知っている人に襲われたり・・・。

フォルカは横を見る。

エリアルが寝ていた。

そしてその隣では・・・

「・・・、エリアル・・・。」

エアリアルの名前を呼ぶクロム・クラスがいる。

「怪我もしてるし、起こさない方がいいよ・・・え〜っと・・・。」

「・・・？」

フォルカが何か言いかけたのをやめたので、クラスはきよとんとした。

「・・・どうかしましたか、フォルカ？」

「・・・ごめん、名前が出てこなかっただけ・・・。」

フォルカは、顔を赤らめていった。

「あつ、うん・・・よろしくねクラス。」

「こちらこそよろしくお願ひします、フォルカ。」

クラス・・・、それが彼女の名前。

・・・、んっ？

「あの、クラスはどうして僕の名前を？」

「・・・、エアリアルに名乗っていたでしょう？」

「あつ・・・。」

昨日エアリアルに自己紹介したとき、警戒していたとはいえクラスは僕の名前を聞いていたのだ。

そういえば、エアリアルにも『クラスを助けて』って言われたし・・・名前知ってるじゃないか・・・僕。

その時、クラスは立ち上がり、

「・・・、少し外を歩いてきます。」

と行った。

「あつ、僕もいくよ。エアリアルを起こしちゃいけないからね。」

「・・・、わかりました。」

そういうと、クラスは扉を開けて部屋を出た。

そんな彼女にフォルカは、個人指定されたのだ。

「ちよつ、クラス！！なにいつてるんだよお！！」

「？、何って・・・フォルカと話がしたいと・・・。」

「~~~~~（照）！！」

フォルカは顔から湯気が出そうな気がした。

彼女に恥じらいはないのだろうか・・・。

「・・・それでは皆様、私たちは行く場所があるので・・・。」

クラスはそういつとフォルカをお姫様抱っこして歩き出した。

いろんな意味で、・・・目線が痛かった。

.....

フォルカはクラスに（お姫様抱っこされ）村はずれの丘につれて来られた。

着いたと同時に、クラスはフォルカを下ろした。

（おつ、女の子にあんなことされるなんて・・・。）

フォルカは、よくわからない敗北感を感じた。

「・・・、フォルカ？」

「あつ・・・なに、クラス？」

クラスがいる方をむく。

彼女はまっすぐこちらを見ていた。

「・・・、ありがとう。」

「えっ・・・！？」

突然言われた感謝の言葉に、フォルカは戸惑った。

「・・・昨日エリアルから聞きました、私を守ってくれたんですね。」

クラスの一言で思い出す。

女性を・・・兄のことを知っていたあの女性を・・・。

「・・・、クラス・・・。」

フォルカはクラスの名を呼んだ。

「何でしょうか？」

「聞きたいことがあるんだ・・・、答えてくれる？」

「・・・、はい。」

胸にしまっていたこと・・・それが晴らせそつな気がした。
あの女性のことを・・・。

「君を狙った女性のこと・・・、知ってる？」

「・・・。彼女は『？4790084』というクロムです。彼女のマスターと思われる人物からは『ドール・リオネット』という名前で呼ばれています。」

ドール・・・、兄・フィニカの事を知っているクロムの名前・・・。
「・・・、どうしてエリアルと一緒にいるの？」

「私はクロムとして欠陥があり、廃棄処分されそうになりました。そんなとき、エリアルのお父様が助けてくださいました。そしてエリアルのお父様に言われたのです・・・『お前は今日からクロムではなく人として生きる』と・・・。そのときに『クラス』という名をもらいました。そしてエリアルのおそばにいてくれといわれたので、一緒にいます。」

フォルカは信じられなかった。

クラスはクロムの中でも・・・、失敗作なのだ。

「廃棄処分するはずのクラスを・・・、どうして連れ戻そうとするの？」

「・・・私にも・・・、わかりません。」

そういうと、クラスは自分の胸元に手を置いた。

「私には・・・、スティアセイヴとマスター用のブレスレッドがないのです。」

「それって・・・!?!？」

「クロムでは……、ないですよね。……でも私は真正正銘のクロムなのです。」

そう言つてクラスは前髪を軽く上げ、クロムの象徴である赤眼を見せた。

「それは……、わかっているよ。」

フォルカはクラスに前髪を下ろすように言った。

クラスは、言われたとおりに前髪を下ろすとフォルカの方に歩き出した。

「……そろそろ帰りましょう、エリアルが心配です。」

フォルカとすれ違ったときに、

「どんなにクロムらしくなくても……、クラスはクラスだよ。」

とフォルカは言った。

クラスは足を止めた。

「私は……私……？」

「うんっ、それにさ……エリアルのお父さんにクロムじゃなくて人になれっていわれたんでしょう？なら、なっちゃんえばいいんだよ。」

フォルカは手を差し出した。

昨日のエリアルのように……。

「なれるでしょうか……、変わるでしょうか……」
「……」

クラスは、差し出された手に戸惑う。

「なれるよ……、クラスなら……。」

「……、フォルカやエリアルのように……？」

クラスは、フォルカの目の前にたった。

身長は、ほんの少しだけクラスのほうが大きかった。

「なれるよ……、きっと。」

その一言をきっかけに、少しの間……静寂な時間が流れる。
そして……、

「……、変わりたい。」

クラスが口を開いた。

「……、『ゼロアーク』。」

「……？」

続いてフォルカの口から、一つの単語が出てきた。
クラスは、聞いたことのない単語に首をかしげる。

「テュルキュミアの古い言葉で、『変わるもの』って意味の言葉だよ。」

「……、『変わるもの』?」

「うん、今のクラスにぴったりでしょ? 変わるにはまず名前からだと思うから…… 今日からきみの名前は『クラス・ゼロアーク』だよ。」

フォルカはそついうと手を引っ込めようとした。
その時、

手にぬくもりを感じた。

「……?」

手に目をやる。

……、クラスが手を握っていた。

「クラス?」

「……、名前をありがとう。」

クラスは、そのままフォルカの手を握り…… エリアルとフォルカの母の待っている家へ向かって歩き出した。

第3話〜変わるもの〜（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回は長いセリフもあってので、読みづらかったらすいません。

第4話〜決意〜

「ただいま〜。」

フォルカは家のドアを開け、クラスと一緒に中に入った。そこには、晩御飯を作っている母がいた。

「ずいぶん遅かったじゃない、何かあったの？」

「クラスとの話が長引いただけだよ。」

母は、フォルカの後ろにいる緑髪の少女を見た。クラスはこちらに一礼していた。

「……どうしたの？」

「……、遅くなってしまい申し訳ありません。」

どうやら彼女はこちらに謝っているらしい。

「いいのよ別に、フォルカに新しいお友達が出来たんですもの。」

「友達……ですか？」

クラスは首をかしげた。

「ええ、……違った？」

その時、フォルカは視線を感じた。

感じたほうを見てみると、・・・クラスがこちらを見ていた。

「・・・クラス？」

「・・・私はあなたの友達ですか、フォルカ？」

「えっ。」

彼女の口から出たのは、予想外の言葉だった。

「友達とは、『長い時間とともに過ごすことによって初めてなれるもの』だと私の脳には記録されています。私とフォルカは出会ってまだ一日ほどしかたっていないません・・・それでも友達になることは出来るのですか？友達とは・・・何なのですか？教えてくださいフォルカ。」

「・・・。。。」

クラスの中に渦巻いていた疑問。

簡単なようで、とても難しい質問。

この質問の答えは、無数に存在する。

しかし・・・その中にクラスを納得させる答えがあるとは限らない。

しかもフォルカは、答えを一つも持ち合わせていないのだ。

フォルカの村には子供が10人もいなかった。

その中でもフォルカは体力がないので、いつも周りに置いていかれ

ていた。

なので、いつもみんなが遊んでいる隣で読書をしていた。

兄・フィニカは、どちらかという運動のほう得意だった。なのに勉強も子供の中で一番出来ていた。

・・・憧れた。

何でも出来るフィニカに・・・。

「・・・力、・・・フォルカ。」

「・・・？」

前を見るとクラスがいた。

(そうだ、彼女に聞かれたんだっけ・・・。友達になれるのか・・・。そもそも友達とは何かを。)

・・・逃げ出したくなった。

彼女と過去の自分が重なって見えたから・・・。
その時、

「クラスツ!!どこ行ってたのよあ、心配したのよ!!!!」

エアリアル馬鹿でかい声が聞こえてきた。

「・・・エアリアル、もう起きてもいいのですか？」

「うんっ、むしろ暴れたいくらい!」

エリアルがガッツポーズをした。

「そうですか・・・でも無理だけはしないでくださいね・・・。」

「わかってるって!」

「・・・今回で47回目ですよ、そう言って無理をしたのは・・・。」

「うっ・・・。」

正直エリアルに助けられた。

クラスの気がエリアルに向いてくれたから・・・。

その時、母の声が聞こえた。

「みんなぐ、ごはんよお〜!」

「はあ〜い!」

フォルカは真っ先に母のいる部屋へ向かった。

今は少しでも、クラスから離れたかったから・・・。

.....

「おやすみなさあ〜い、行こっクラス。」

「はい・・・ではお二人とも、おやすみなさい。」

そういつて二人は部屋をでていった。

「ふふっ、エリアルちゃんったらあれだけ寝てたのにまた寝るのね。」

「本当っ。」

フォルカは母と一緒にクスリと笑った。

「じゃあ・・・僕も寝るよ、おやすみ。」

「・・・フォルカ。」

突然母がフォルカを呼び止めた。

先ほどとは違う、低めの声で・・・。

「・・・何？」

「・・・クラスちゃんから逃げちゃだめよ。」

「!?!」

母の一言にびっくりした。

どうしてそのことを・・・。

「さっきの会話・・・聞こえてたの・・・ごめんなさいね、私があんなこと言っちゃったから・・・。」

「・・・母さんのせいじゃないよ。」

「でもねフォルカ・・・クラスちゃんはおなたに聞いたの、自分は友達なのかを・・・友達とは何かを・・・だからあなたが答えるの、あなたなりに。」

「・・・。。。」

(そんなこと言われても・・・、わかんないよ。)

フォルカはおそらく・・・初めて母のことを憎んだ。

「・・・母さんは知ってるでしょ？僕に友達がないこと・・・僕に答えられるわけないんだよ・・・。」

・・・パシンツッ!

乾いた音が響き、フォルカの頬に痛みが走った。

「なっ・・・。」

「友達が出来ないのはあなたが自分から踏みよってないからでしょっ!」

「違っっ!」

「違わない、あなたはただ拒絶されることを恐れていたのよ・・・踏みよる前からね・・・フォルカ、答えられないことなんてないのよ。決め付けないで・・・逃げないで・・・。」

母が優しく抱きしめてきた。
声が震えていた。

「母……さん？」

「わからないなら……探せばいいのよ。世界は広いのよ？あなたとクラスちゃんの納得できる答えはきっと見つかるわ。」

「……母さん、それって……。」

すっと体が離れる。

母は、フォルカの肩に手を乗せ……

「クラスちゃんとエリアルちゃんについていきなさい。きっと答えが見つかるわ。」

「でも……僕、体力ないし……。」

「体力なんて自然と付くわよ、大丈夫……あなたなら。」

「……、兄さんの弟だから？」

フォルカは母の眼を見る。

母は、ゆっくりと首を横に振った。

「違うわ……、フォルカだからよ。」

「僕……だから？」

「確かにあなたにはフィニカのようになってほしいと思ったことはあるわ……。だけど、同じ人なんていないの……。いくら兄弟でもフォルカとフィニカは違うのよ。」

フォルカの目から涙がこぼれた。

理由はわからなかったけれど、止まらないのだ。

「もう一度言うわよフォルカ……。クラスちゃんから逃げちゃだめよ。」

涙を手で拭い、母のほつをまっすぐ見る。
そして、

「うんっ……。いってきます。」

と答えた。

「いってらっしゃい、フォルカ。」

母は、息子の決意を受け止めた。

第4話〜決意〜（後書き）

小説を読んでいただきありがとうございました。
長いセリフがたくさんありましたので、読みずらかったらすいません。

第5話 旅立ちの決意

「・・・フォルカ、今なんて言った？」

「エリアル、クラス、僕も一緒に行かせてくれないかな？」

はぁ・・・とため息が部屋中に響いた。

「あんた自分の言ったことの意味わかってんの!？」

「・・・うん。」

フォルカはまっすぐエアリアルのほうを見た。

怒っていたエアリアル表情が・・・変わった。

怒ってはいない・・・だからといって笑ってもいない、ただ視線がとても冷たかった。

「・・・見たでしょ、私とクラスは何か狙われているの。」

「見たよ、見た上で着いて行きたいんだ。」

「安全は保障できないわよ。」

「・・・知ってる。」

フォルカの眼がエリアルから離れた。

よくはわからないけれど・・・見続けるのがつらかった。

クラスのほうを見る。
無表情でこちらを見ていた。

母のほうを見る。
母は首を横に振った。

(逃げちゃだめ・・・だよ、母さん。)

両手にぐっと力をこめて、再びエリアルルのほうを向いた。

変わらず・・・とても冷たい視線でこちらを見ていた。

「・・・お願いだよエリアル、僕は世界を知りたいんだ。・・・答えを探したいんだ！」

エリアルは少し怯んだ。

先ほどまでのフォルカは・・・もうそこにはいなかったからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙が続いた。

エリアルが後ろを向いた。
そして、

「・・・フォルカ、着いてきて。」

と聞いた。

「・・・わかった。」

フォルカはエアリアルという言葉に従った。

.....

二人は外に出た。

クラスも一緒に出てきて、母は家の窓越しにこつちを見ていた。

「・・・着いて来たよエアリアル、ここで何を？」

フォルカがそういったとき、エアリアルがこちらを向いた。

「・・・エアリアル？」

その時、

.....どじっ!!

「ッ!!!!」

フォルカの体が地面に付いた。

一瞬何が起こったのかわからなかった。

すると頬が急に痛みに襲われた。

やっと理解できた、・・・自分はエアリアルに殴られたのだと。

「っ、エアリアル!？」

「こないでクラスっ。」

動きそうになったクラスを、エリアルは一喝した。
クラスは思わず動きを止めた。

クラスの動きが止まったのを確認すると、フォルカのほうを見た。

「どうフォルカ・・・痛い？」

フォルカは何も言わず、コクリとうなずいた。

「私が旅で味わった痛みは・・・こんなものじゃないのよ？それでも私たちについてきたいの？」

今のエアリアル表情はさっきのような冷たさはなかった。

むしろ・・・温かった。

こちらのことを心配してくれる・・・母のような温かさだった。

「・・・・・・・・。」

少し言葉が詰まった。

エアリアルが言ったとおり、この旅は危険と隣り合わせだろう。
だけど・・・危険だからこそ自分の納得できる答えが見つかるかもしれない・・・そんな気がした。

「それに・・・私たちとじゃなくて他の人と行けばいいじゃない。
・・・自分で危険なほうを選ばなくてもいいじゃない。」

確かにその通りだ。
だけど・・・だけど・・・!!

「僕は・・・僕はエリアルたちとがいいんだ。二人となら・・・弱い自分を換えられる気がする、自分の納得いく答えが見つかる気がするんだ。」

「・・・。。。」

エリアルは黙って手を差し出してきた。
フォルカはその手を強く握った。

「・・・立てる？」

「・・・うん。」

エアリアルは協力を得てフォルカは立ち上がった。

「・・・ねえ、フォルカ。」

「何っ、エリアル？」

フォルカはエアリアルの手を離して、首を軽く傾けた。

「私を殴って。」

「えええっ!!」

「だって・・・私が一方的に殴っちゃったじゃんかあ。いまさら
だけどなんか罪悪感が残るっていうかあ・・・その・・・。」

エリアルは、両手の人差し指をくるくる回しながら恥ずかしそうにいった。

「ああ〜もうっ！とにかく、フォルカが私を一発殴ればいいのよ！
！はやくしなさい！！」

「……逆ギレ……。」

「クラスはだまってなさああ〜〜い！！」

思わずフォルカは笑ってしまった。

やっと自分の知っているエリアルという女の子に戻ったような気がしたから……。

「……わかったよエリアル、一発殴ればいいんだね。」

フォルカは右手で拳を作って見せた。

「……思いつきりしなさいよ。」

「もちろんっ。」

エリアルは眼を瞑って、待機している。
フォルカも拳に力をこめる。

「……いくよ。」

……どっ！……

「……………っ！！！！」

今度はエリアルルの体が地面に付いた。

「だっ大丈夫、エリアル？」

「……………ったああああ！！！！」

エリアルは体を起こし、頬を押さえた。

「……………フォール〜カア……………」

「わあっ、ごめんなさいっごめんなさいい……………！！！！」

「謝ってる暇があったらさっさと準備しなさいっ！！！！」

「……………えっ？」

「早くっ、私は今イライラしてるのっ！！！！」

「……………自業自得……………」

「だまらっしやいつっ！！！！！！」

二人は（どちらかというどとエリアルが一方的に）ギャーギャーとけんかしている。

フォルカは早足で家に戻った。

これ以上エリアルを怒らせないようにしないと。

「置いていかれたらいやだものねっ。」

こんなにわくわくしながら家に戻るのは初めてだった。

家に入ったとき、母が立っていた。

そして、

「いってらっしゃい。」

と聞いた。

「……いってきます。」

フォルカは満面の笑みを浮かべて部屋に向かった。

第5話「旅立ちの決意」(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

更新が少し遅くなりました、すいません。

また遅れるかも知れませんが、読んでいただけたらうれしいです。

第6話〜強さ〜

「……………」

家を出てどれくらいたっただろう……。

「フォルカ〜大丈夫？」

エリアルの声が聞こえる、だけど……。
……疲れのせいか返事を返す気にもなれない。

「……………休みますか？」

クラスが顔を覗き込んできた。

「だっ、大丈夫だよ……。」

フォルカはとびっきりの笑顔で答えた……つもりだった。

「そんな死にかけのウサギみたいな顔で言われても……ねえクラス。」

「……………全くです。」

エリアルは呆れて首を振り、クラスは同情の眼差しを向けていた。

「まさかここまで体力が無いなんて……予想外だわ。」

「……………言い返す言葉もありません……。」

肩を上下させながら、フォルカは答えた。

「ああ〜っもう!!これじゃあ技どころか素器そきの扱い方さえ教えられないじゃない〜!!!!」

「・・・落ち着いて下さいエリアル。」

クラスがエリアルをなだめている。

しかし、気になる単語がでてきた。

「ねえエリアル、素器そきって・・・なに？」

「えっ!?あんな知らないの?」

「あっ、・・・うん。」

「そこから説明しなきゃいけないの〜・・・めんどくさ〜。」

エアリアルのヤル気が、完全に途切れたのがわかった。

「〜〜〜、クラス・・・あとお願い。」

「わかりました、ではフォルカ・・・説明させていただきます。・・・よろしいですか?」

「うんっ、お願い。」

クラスは深呼吸して、ゆっくりと口を開いた。

「フォルカは・・・スティアを知っていますか？」

「うん、この世界の空気中にある自然のエネルギーだね。」

その通りですと、クラスは首を縦に振った。

「簡単に言いますと・・・素器とは、空気中のスティアに形を持たせる道具なのです。今はまだ武器としてしか使用されていませんが、いつかは日常生活に取り入れられるかもしれません。」

「・・・エリアルは僕に戦わせようとしているの？」

「はい・・・エリアルはそれを望んでいます。」

フォルカの表情が・・・曇った。

「無理だよ・・・クラスも知ってるだろ？僕の体力の無さを・・・。そんな僕に戦えなんて・・・。」

「フォルカ・・・。」

クラスの声が聞こえた。

声の方を見たら、クラスがこっちを見ていた。

「・・・クラス？」

「戦わなければ・・・やられますよ?。」

「!!!!」

思わない一言だった。

・・・戦わなければやられる・・・

全くもってその通りである。

「フォルカが戦いたくないのはわかります、ですが・・・私達の旅は危険と隣り合わせなんです。・・・出来ることなら守ってあげたいのですが、守り切れる保障はどこにもないんです。・・・だからエリアルは、貴方を死なせないためにも・・・。」

クラスのから告げられた、彼女の・・・エアリアルの本心。

・・・なんだか、嬉しい。

そうだ、僕は自分からついて行きたいと言ったんだ。

なのに、守られているばかりじゃあ・・・駄目なんだ。

強く・・・なりたい。

兄さんのように・・・なりたい。

「・・・クラス。」

フォルカはゆっくりと口を開く。

「なんですか？」

クラスは答えた。

「素器を持っているなら、貸してくれないか？」

フォルカは真つ直ぐクラスを見る。

「・・・僕に戦い方を教えてほしい。」

その眼に迷いはなかった。

「・・・わかりました。」

クラスは縦に首を振った。

第7話 闘いの唄 前編

朝、一人の青年が目を覚ます。

布団からでて慣れた手つきでシーツを直す。

寝間着から仕事用の服に着替え終わったその時、

「……こんこんっ

扉を叩く音が聞こえた。

「……誰だ？」

「私です、フィニカ様。」

ゆっくりと扉が開く、開いた扉の向こうには……

「……ドールか、おはよう。」

以前、フォルカ達と戦闘したクロム、『ドール』が立っていた。

「おはようございますフィニカ様、さっそくですが……私達に新たな任務が出されました。」

「内容は？」

「先日、私単体で捕獲する予定だったクロムを、今度はフィニカ様も同行して捕獲せよとのことですよ。」

「・・・わかった、さっそく仕度をする。」

フィニカはドールに背を向けて、仕度を始めた。

「あつ、フィニカ様・・・報告したいことが・・・。」

「なんだ？」

フィニカは仕度しながら答えた。

「実は・・・例のクロムと行動しているもののなかに、フィニカ様の弟と思われる少年が・・・。」

フィニカの手が止まった。

フォルカが・・・大切な弟が・・・クロムと行動している!?

「・・・嘘だろ。」

フィニカの頭の中に、フォルカとの思い出が蘇る。

よく笑い、よく泣き、よく怒る・・・そんな姿がとてもいとおしい・・・大切なただ一人の弟。

そんな弟が今、クロムと行動しているのなら・・・。

「自ら進んで庇ったので、人質ではないと思われませう。」

「・・・騙されている可能性は？」

「・・・十分あると思います。」

フィニカは立ち上がる。
そして、ドールに言った。

「ドール、任務追加だ・・・クロムを捕獲し、弟を・・・フォルカを救出する。」

「了解・・・。」

2人は歩きだした。

(フォルカ・・・必ず助けてやるからな。)

「はあっ!!!!」

フォルカは手にしている素器をおもいつきり振りかぶった。

「まだまだ、あと二十回!!!!」

エリアルも心を鬼にして(フォルカの体力にあわせてはいる)指導している。

「じゅ・・・きゅう・・・。」

「はい、ラスト!!」

フォルカは最後の力を振り絞り、ラストを終えた。

「・・・お疲れ様です、フォルカ。」

「・・・あり、がとう・・・クラス。」

フォルカはクラスが差し出してくれたタオルを受け取り、汗を拭いた。

「・・・ふう。」

「まあ、傘でちゃんバラする子供レベルにはなったかなあ。」

そんな会話を交わしながら訓練する、それが最近の3人の日課だ。

「よし、行くわよ2人共!!」

「うん。」

「はい・・・。」

3人が歩きだしたその時、

「・・・待て。」

聞いたことのある、氷のように冷たい声が聞こえた。

第8話 闘いの唄 中編

「あんたはっ！」

エリアルが驚く。

声の主は……

「ドール・リオネット……。」

クラス達を襲ったクロムだった。

「クラスは、渡さない……。」

エリアルが素器を構える。フォルカも、つい最近使えるようになった素器を構えた。

「……フォルカと言ったか、武器を下ろせ。お前を傷つけるわけにはいかない。」

「なっ、なんで……僕を？」

ドールの目的は、クラスの捕獲だったはず。

それなのに……なんで……。

「お前を……助かるためだ、フォルカ。」

ドールの後方から聞こえた……とても懐かしい声。……忘れる

わけがない、この声の主は……。

「兄……さん。」

「久しぶりだな、フォルカ。」

大好きで……憧れの兄、フィニカ・テイルがいた。

「どうして兄さんがここに？兄さんは大都にいるはずじゃあ……。」

「本日から、俺はそこにいるクロムの捕獲を命じられたんだ。」

兄さんが……クラスを捕獲しにきた？

そして僕を……。

「ちょっと、フォルカの兄かなんだか知らないけど……2人を連れて行かせないわよ!!！」

エリアルが叫ぶ。

フィニカはドールの方を向いて、

「あいつは？」

と聞いた。

「あのクロムを連れ去った博士の娘とのことです。」

「ライシエス博士の娘か……放っておくのは少々危険だな……。」

「フィニカは少しの間考え、ドールに命じた。」

「……ドール、あいつも保護だ。」

「……了解……。」

そういうと、ドールが視界から消えた。
探そうとエリアルの方を向いたとき、

「ああっ!!」

エリアルがドールに殴り飛ばされていた。

「……!! エリアル!!」

クラスがドールの方に走る。

「待つてクラス、僕も一緒に……。」

フォルカもクラスについて行こうとした。

「……しかし、

「……フォルカ。」

「……兄さん。」

槍型の素器を構えた兄が目の前に立っていた。

第9話 闘いの唄 後編

今日はいろいろなことがありすぎる。

素器を使う練習をしたり、クラスを捕まえようとしたクロムがまた現れたり。

・・・兄さんに会ったり。

だけど・・・全然嬉しくない。

どうしてだろう・・・ああ、そうか。

2人とも・・・素器を持っているからだ。

「・・・兄さん、そこを退いて。」

「俺を退かして、何をするつもりだ？」

フォルカの口が止まる。

今言おうとしている言葉は、きっと言うてはならない言葉。

フィニカが最も望んでいない、禁句。

どうする？言うか、言わないか・・・、僕は・・・

「クラスとエリアルを・・・助けに行く！」

2人を選んだ。

「フォルカ・・・可哀想に、あのクロムに騙されているんだな。」

フィニカはそういうと、ゆっくりと素器を構え・・・

「今助けてやるからな、だから・・・少しの間眠っていてくれ!!」

こちらにかなりの速度で接近してきた。

とっさに剣型の素器で、下段からの一撃を防ぐ。

「なっ・・・。」

フィニカは驚いた。

一撃で終わるとばかり思っていたから。

2人の特訓を受けていなかったら、きつとやられていただろう。

「僕は、騙されてなんかない!!」

フォルカは剣を振り上げた。

フィニカはとっさに後ろに下がり、再び槍を構える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

長い静寂・・・。

互いに刃を交えてしまった。

もう・・・後戻りはできない。

闘いの唄が、止まない限り・・・。

「うわああああ!!!!」

フォルカは、この唄を止めるため・・・兄に向かって走った。

フィニカも、弟に向かって走った。

「兄さああああん！！！！」

「フォルカアアアア！！！！！」

互いの素器が交わる。

キーン、響く音。

それは・・・旋律。

2人の叫ぶ声。

それは・・・メロディ。

この2人しか出せない、とても哀しい・・・兄弟同士の闘いの唄。

フォルカは剣を真横に振る。

それをフィニカは、体を限界まで反らせて回避。

そのまま地面に手をつけ、足をおもいつき蹴りあげる。

「っ！？」

足が、振りきつた手に当たり、反射的に剣が手から離れた。拾おうとした時、顔の近くに槍が出てきた。

「もう抵抗しないでくれ、お前とこれ以上戦いたくない。」

「・・・・・・・・。」

フォルカは手を引つ込めて・・・・・・・・うつむいたまま動かなくなった。
フィニカはホツとした。

「もう弟に刃を向けなくていいのだから・・・・・・・・」

「・・・・・・・・わかつてくれたんだな、フォルカ。」

素器をしまい、フォルカに手を差し出す。
つられてフォルカの手も出てきた。

取り戻せた、クロムから・・・・・・・・大切な弟が。
フィニカの顔が、優しく笑う。
フォルカもゆつくりと顔をあげる。

その顔は・・・・・・・・。

「うわああああ！！！！」

「なあっ！？」

差し出した手は拳に変わり、フィニカの頬を捕えた。

「ああああっ！！」

フィニカの体は、地面についた。

そのすきにフォルカは、剣を拾い、フィニカがしたように顔の近くに剣を出した。

「フォルカ・・・お前。」

「兄さん、貴方は僕の憧れだった。」

フォルカの口が開く。

声は・・・震えている。

「なんでもできる兄さんに憧れてた・・・なのに・・・なのに！」

フォルカはフィニカの服を掴んだ。

そして、目に涙を浮かべながら言った。

「貴方はクラスを捕まえようとした！！ドールを使ってエアリアルを傷つけた！！・・・どこに行ったんだよ、優しい兄さんはどこに行っただよ！！？」

フォルカは泣きながら、フィニカの胸元を殴った。

痛みはない、だけど・・・

「今の兄さんは・・・大っ嫌いだった！！」

胸が痛かった。

ーーーーカランッ

フォルカの持っていた剣が落ちた。
それに続くかのように、フォルカも倒れた。

「ご無事でしたが、フィニカ様？」

倒れた弟の後ろには、フィニカのクロム・ドールが立っていた。

「ああ……。」

フィニカはゆつくりと立ち上がる。
そして、そっとフォルカを持ち上げた。

「ドール、あとの2人を運んでくれ。」

「わかりました……。」
ドールは、いとも簡単にクラスとエリアルを持ち上げて、歩きだした。

フィニカも共に歩きだした。
チラッと弟の顔を見る。
涙腺が出来ていた。

「……今の兄さんは……大っ嫌いだ！……」

弟から初めて言われた言葉。

大都に帰っても、フォルカの一言がフィニカの頭から離れることはなかった。

第10話 ある日アルフィに

「んっ……。」

フォルカは目を開けた。

写った景色は、見たことのないコンクリートのような天井だった。

「ここは……いつたい……。」

辺りを見回すと、エリアルが倒れていた。

「!!、エリアルッ大丈夫!? エリアルッ!」

「……うう、フォルカ?」

エリアルが顔を上げた。

「フォルカ……ここは?」

エリアルも同じ意見らしい。

まず、ここがどこなのか把握しないと……。

「ここは大都のクロム研究施設だよ。」

「そうか……ならどうして僕達は……って。」

聞き覚えのない声があった。フォルカとエリアルは、声があった方を見

た。
そこには……

「女の子……。」

半袖ワンピースで赤茶色の髪の女の子が、こちらを見てニッコリと笑っていた。

――
クラスを連れて歩く2人。……いや、1人の人と一体のクロムである。

「……。」

「……フィニカ様、どこが悪いのですか？元気がなさそうですが……。」

「いや……大丈夫だ、気にするな。」

それは嘘……ドールには簡単にわかる嘘。

「そつですが、なら行きましょう。」

「……すまん、ドール。」

聞こえないくらい小さな声で、フィニカはお礼を言った。

「・・・いえ。」

ドールは短く答えた。

「君は・・・いつたい・・・？」

フォルカの問いかけに少女は、

「ユニイだよ、私はユニイ・エプロズイク。」

と答えた。

「あつ、僕はフォルカ・テイル。よろしくね、ユニイ。」

「うん、よろしくね、フォルカお兄ちゃん！」

ユニイの何気ない一言に、フォルカは胸を射ぬかれた。

お兄ちゃん・・・いつもは自分がフィニカに対して言っている言葉。それを今、自分に対して言われたのだ。

「おつ、お兄ちゃん？僕が・・・？」

「???だって私にとっては年上でしょ？だから・・・お兄ちゃん！」

慣れない感じがして、なんだかむず痒い感じがした。

「フォルカ、なに笑ってるのよ・・・気持ち悪い。」

「!!!ッ」

おもわず顔に手を当てた。・・・そんな顔してたんだ、僕。

「お姉ちゃんの名前は？」

「おねっ!!!？」

今度はエリアルが射ぬかれる番だった。

一人っ子だったから、姉と呼ばれたのが新鮮で・・・。

「・・・エリアルも人のこと、言えないじゃないか・・・。」

「だっ、だって・・・しょうがないじゃない！初めて言われたんだもの、お姉ちゃんって。」

エリアルの意見には賛成だった。

自分も初めて言われたことだったから・・・。

「あっ、でもなんでクロム研究施設に私達居るのよ？」

エリアルが話を戻す。

「2人はフォルカお兄ちゃんにそっくりな人と女の人に運ばれてきたんだよ。」

「・・・兄さんが・・・。」

頭の中にある一場面がよぎる。

兄に向けた刃、兄に言った暴言。

兄は・・・どう思っただろう、あんなことしたから嫌いになってしまっただろうか・・・。

「びつくりしたよ、エリアルお姉ちゃんを連れて来た人、2人を簡単に持ってたもの。」

「ドールね・・・あいつはクロムだから私とフォルカを持ち上げるのは簡単でしょうね。」

ううん、と言ってユニィは首を横に振った。

「女の人を持ち上げてたのは、エリアルお姉ちゃんと緑髪の女の人だったよ？フォルカお兄ちゃんは男の人がおんぶしてたし・・・。」

「「!!!!!!」」

2人は辺りを見回す。

クラスの姿は・・・どこにもない。

「そんな・・・。」

エリアルが、その場に座り込む。
フォルカもつられて座り込む。

・・・守れなかった。

そんな思いが、2人にのしかかる。

「・・・その人、助けたい？」

ユニイの声が聞こえる。

かなり落ち着いた声が・・・。

「できるの!？」

エリアルが、ユニイの元に駆け寄る。

「うん、2人がきてまだそんなに時間は経ってないし・・・だからまだ間に合うと思う。」

「でも・・・どうやってここから出るの？頑丈な扉だし・・・。」

大丈夫、とユニイは言つと手のひらを前に出した。
そして・・・

「・・・えいつ!!!」

突如、手のひらの上に小さな炎を発生させた。

「うわああ!!」

フォルカは驚いて、おもわず後退りした。

「ユニイ、あんたいたい……。」

ユニイは炎を消し、こちらを向いた。

「私……アルフィだもん、できて当然だよ。」

「アルフィだつて!?!」

アルフィ……外見はヒトと変わらないが、ステイアを術式に変換し『素術』として使用することのできる唯一の種族。

そして……そのアルフィに対抗する手段として生まれたのが『クロム』だった。

「ここから出るのは簡単なんだけど、素術を使うための術式変換は時間があるから……1人じゃ捕まっちゃう。」

ユニイは2人に両手を差し出した。

「だから……フォルカお兄ちゃん達の力を借りたいの……お願い。」

2人は顔を見合せ、頷く。そして2人はユニイの手を握り、

「こちらこそよろしくね、ユニイ。」

「頼りにしてるわよ!」

「うんっ!」

3人は笑顔で頷いた。

第11話 エスケープ

3人は顔を見合せていた。

「ところでさあ、ユニイ。」

「なに、エリアルお姉ちゃん？」

ユニイが首を傾げた。

「逃げるって簡単に言ったけどさ、私達が何処にいるかがわからないんじゃないの？」

「あつ、僕もそう思った。」

大丈夫、とユニイは言うつと、おもむろに紙とクレヨン（青色）を取り出した。

「……………」

突っ込んだら負け、2人はそう思い、あえて紙とクレヨンのことはスルーすることにした。

ユニイはすらすらと、多分この辺の地図だと思われる絵を描いた。

「え〜つと、まずここはクロム研究施設の……まあ私見たいな優秀なアルフィを捕まえて閉じ込めたりする所な訳。んで今私達が居るところが12ある牢屋の……真ん中から2つ右の、ここ。」

とユニイはクレヨンで殴り書きした四角の内、1つに丸を描いた。そしてヒト(?)を丸で囲んだ四角の中に書き出した。・・・それ、僕達ですか？

「へっ、へえ〜。」

「なるほどね〜。」

「それでえ脱出についてなんだけど・・・夜周りの人達が寝静まったら、私が素術を使って少しずつ炎で壁を溶かすからあ、2人にはそれがばれないように何とかして欲しいの。」

「えっ、ちよつと待ってユニイ。」

フォルカが一旦言葉を遮る。

そしてふと頭に浮かんだ疑問を口にした。

「ユニイ、君がアルフィならこんな壁くらい一気に壊せるんじゃないの？アルフィは『スティアを様々な術式に変換し、素術の威力を変えることができる』って聞いたことあるけど。」

「確かに私くらいアルフィならこんな壁、一発破壊だけど・・・おっきな音とスツゴい光が発生する事になるよ。・・・どうなるか分かるよね、フォルカお兄ちゃん。」

「あっ、すぐに見つかっちゃう・・・。」

フォルカはおもわず口を押さえた。

(その通りだ・・・見張りは居るだろうし、周りの牢屋に誰もいな

いわけないだろうし・・・現に前の牢屋にヒトいるし。」

「でもさ、穴が開いたとしても外に出られるとは限らないわよ？」

エリアルの鋭い質問が飛ぶ。

しかしユニイは困った様子ではなく、むしろ待つてましたと言わんばかりに答えた。

「じゃあ私からも質問するけど・・・今の天気、分かる？」

「天気？・・・あゝ微妙だけど・・・曇りかな。」

「うんっその通り、でもさ・・・なんで曇りつてわかったの、エリアルお姉ちゃん？」

「なんでつて・・・窓から見れば誰でもわか・・・ああっ！！」

「ふふん、ようやくわかった？そう、窓から見える空、吹き抜ける風・・・つまり壁の向こう側は外つて事！！」

ユニイは出来るだけ小言で言った。

左手を腰に当て、右手でピースを作った。

なんというか・・・あのポーズはユニイのためにあるって言うてもい位、違和感がなかった。

・・・まあいいか、似合ってるし。

その日の夜9時・・・作戦決行の刻かが来た。

「……よし、見張りは行ったわね……。これで1時間くらいは戻ってこないから、ちゃっちゃと穴開けるね。2人はいざというときにどうにかばれないようにしてね。」

「分かったよ。」

「まかせて。」

2人がそういうと、ユニイは出口になる予定の壁の方を向き、ステアの術式変換を始めた。

「……………」

2人に任された役割は、ユニイの炎素術えんそじゆつを周りにばれないようにすること。

聞いた感じでは簡単に聞こえるが、炎の術なのでいくら威力を抑えたとしても、それなりに光が出る。

そのため、予想以上に難易度は高い役割である。

少して、2人から導き出された方法は……

“ちょっとフォルカ、左側から光が少し漏れてるわよ。ちゃんと隠しなさいよ、ばれたらどうするつもり!?”

“注意してくれるのは助かるけど、エリアルも自分の役割をしてよ!”

“言われなくても分かってるわよ!”

『フォルカの上着を使ってユニイの周りを隠し、エリアルがそれを他の誰かに見つからないように見張り、フォルカの光漏れもチエツクする』という方法だった。

少しの間、静寂が続く。

その静寂をフォルカは破り、ユニイに聞いた。

”・・・ユニイ、まだ？”

”まだ、今半分溶けたくらい。”

”そつ、そつ・・・。”

フォルカは、誰から見てもわかるくらい残念そうな顔をした。

すると、フォルカの顔をみたエリアルがきついことを言ってきた。

”なにフォルカ、まさか・・・もう限界とか言うんじゃないでしょうね？”

”そつ、そんなことないよ！大丈夫だよ！”

フォルカは必死に誤魔化したか、正直なところ・・・辛かった。

中腰前屈みの状態で数十分、さらに炎素術の近くにいるせいか汗が止まらないし・・・。

そしてついさつき、手足がガクガクと震え始めた。

こんなときに、自分の体力の無さのため息が出そうになった。

”あと少しだから頑張つて、フォルカお兄ちゃん。”

ユニイが励ましの言葉をかけてくれた。

ユニイも、素術を精密に扱わなければいけないから大変なはずなのに……。

……

(うおりやあああ!!!!体力なんか関係なああい!!!!要はどれだけ限界に立ち向かえるかだろ!!?根性見せろ、僕の身体!!!)

ユニイは壁と、フォルカは自分自身の限界と闘い続けて数分後。3人の作戦の一部が実現した。

”穴が……開いた!” “ざつとこんなもんよ!”

ユニイが再び腰に手を当て、ピースを作った。

これでここから出れる、そうおもったとき、エアリアルの一言で喜びが一気に冷めた。

”あとはクラスを助けるだけね、フォルカ。”

”えっ……。”

自分がここから出ることばかり考えていた……。

クラスの存在を忘れてしまっくらい。

そつだ、クラスを助けないと・・・そうおもしろい、フォルカはユニイに言った。

” ねえユニイ。 “

” なに、フォルカお兄ちゃん？ “

” 実は、クラスって僕とエリアルの大切な人が捕まってるんだ。だから・・・助けるのを手伝ってくれないかい？ “

フォルカはユニイに手を差し出した。

ユニイの答えは・・・

” ……イヤだ。 “

2人の期待を裏切る答えだった。

” なっ、なんでだよユニイ！？ “

” なんでって・・・わからない？ “

ユニイは深く深呼吸をして、2人を指さして言った。

” じゃあ聞くけどさ・・・クラスって人は何処にいるかわかるの？ それに見つけたとして、逃げ道はわかるの？ 多分戦闘になるとおもっから勝てる、又は逃げ切れるような策はあるの？ “

” それは・・・考えてなかったけどさ、私達が力を合わせればきつと大丈夫・・・。 “

ユニイは”甘い“と言ってエアリアルの口元に人差し指を当てた。

”いい！！私の素術は発動するまでに時間がかかるんだよ！？それに2人は闘い慣れしてる？違うでしょ！？こんな3人で大人のアルフィを簡単に捕まえられるような人達と戦おうだなんて・・・馬鹿でもないよ！”

ユニイの言ってることは正しかった。

だからこそ・・・悔しかった。

こんなに自分が無力だなんて、思ってもみなかった。

静かな時間が続く・・・。

気分が沈んでいる2人に、ユニイが声をかけた。

”あのね、2人とも・・・別に助けるのを諦めろって言ってるんじゃないんだよ？ただ・・・もう少し冷静に物事を考えて、実力をつけて、確実にクラスつて人を助けられるようにしようって言いたかったの・・・ひどい言い方して、ごめんね。”

”ユニイ・・・。”

ユニイの考えは、子供とは思えないくらい冷静だった。

自分の意見をきちんと述べて、相手の意見も無駄しない・・・大人びた考えだった。

”だから今は・・・逃げよ？”

ユニイが、初めて会った時のように手を差し出してきた。

フォルカはその手を・・・握った。

ユニイの考えに賛同した。

”僕は・・・強くなりたい、だからユニイと一緒に行くよ。”

”フォルカお兄ちゃん・・・ありがとう。”

フォルカとユニイは共に歩む決意をした。

エリアルは、黙り込んでいる。

”エリアル？”

”クラス・・・大丈夫かな？なんかひどいこと、されてないかな・・・”

フォルカは落ち込むエリアルの肩を持って、自分の方を向かせた。

”エリアル・・・そんなことさせないためにも、僕達は強くならな
いと・・・。だから行こう、エリアル。”

”フォルカ・・・うん。”

エリアルもユニイの考えに賛同してくれた。

”さっ、急いで。もうすぐ見張りが帰ってきちゃう。”

ユニイが穴に入ろうとしていた。

2人は急いでユニイのあとを追うように入った。

穴を抜けた先には、星空が広がっていた。

”みんな無事出れたね、さあ2人とも、追っ手が来る前に大都から離れよ。”

ユニイは街道沿いに走りだした。

2人もユニイのあとを追うように走りだした。

第12話〈ミッドナイトフォレスト 前編〉

大都から脱出して、どれくらい経っただろうか。
少なくとも1〜2時間は歩き続けている気がする。

「……………なぜか森の中を。」

しかも夜中にだ……………」

「ユツ……………ユニイ、なんで森の中を逃げるの？無事外に出られたんだし、なにもここまで徹底しなくても……………」

「しなくちゃいけないの！いつ、私達が捕まってたところは、大都の中でも実績のあるクロム研究施設なんだよ？そんなところに捕まえられてた研究对象、しかも子供に逃げられたとなれば奴らのメンツが丸つぶれでしょ？だからきつと血眼になって私達を探してると思うし、街道付近は兵士たちがビッシリ配置されてるだろうし……………
・検問もやってるかも。」

「なるほど……………ところでさユニイ。」

なにっと言ってユニイがこちらに振り向いた。

「森に入って身を隠す作戦を使ったってことはさ、道……………わかるんだよね？」

「……………」

「……………ユニイ？」

ユニイの顔を覗き込んで見ると、目が右に泳ぎ、汗が尋常じゃないくらい出ていた。
まさか……。

「ユニイ、もしかして道……わかんないの？」

「……ゴオオオン！……」

「……テヘツ？」

「……ズガガガガ！……」

「テヘツ？……じゃないよ、どうするの！？僕達完全に道に迷ってるってことでしょう！？」

「……グシャアアア！……」

「そんなに言うことないじゃん！私だって逃げるのに必死だったんだから！」

「……ズドオオオン！……」

「逆ギレすることないじゃないか！……ちょっと、エリアルも黙ってないで何か言つてよ。」

「いくらでもしゃべってあげるわよ……あんたらがこれやつけるの手伝ってくれるならねえ！！」

「……えっ？」

2人は、恐る恐るエリアルルの声が聞こえた方を見た。
見えた光景は、素器を展開して巨大なミミズ(?)と戦闘している
エリアルルの姿だった。

「まったくあんたたち、道に迷ったくらいでケンカして!しかもこんなに近くで戦闘している私に全く気付く気配すらないなんて、信じられない!」

エリアルルは巨大ミミズ(?)のボディプレス(?)をよけながら、
数分前のことを叱ってきた。

・・・そういえば会話中にドゴンだのズガガだの聞こえた気がする。

「ごっつ、ごめんエリアルル・・・でも僕よりも存在感がない人がいる
なんて。ありがとうエリアルル、自信ついたよ!」

「うるせえ!好きで影が薄いんじゃないわ!!つつか早く助けろ
!」

エリアルルが一瞬、ものすごい顔でこちらを睨み付けてきた。
背筋に氷を擦り付けられたような寒気がした。

・・・女の子って怖いなあ・・・

「は〜い2人ともし、ちょっとそいつから離れてねえ〜!」

ユニィの声が聞こえる。

2人は急いで巨大ミミズ(?)から距離をとった。

「いつくよ、ユニイイイイ・ファイヤアアア〜!!」

ユニイは大声で技名(?)を叫び、右手をミミズ(?)のいる方に突き出した。

次の瞬間、ユニイの右手の前に魔法陣と思われる赤く輝く陣が出現。その魔法陣の中心部から、牢屋で使った素術とは比べ物にならない威力の炎が放たれた。

炎はミミズ(?)を、一瞬にしてのみこむ。

数秒後、元気に動いていたミミズ(?)は、こんがり焼けてピクリとも動かなくなった。

「・・・すごい。」

「やったわね、ユニイ!」

エリアルがユニイに近づき、ユニイの肩をポンツと軽く叩いた。しかし、ユニイはミミズ(?)の方をじっと見て返事をしない。

「?・・・ユニイ、どうしたの?」

反応は無し、しかし小声でボソボソと独り言のように何かを呟いている。

ユニイの様子が気になり、エリアルはユニイの独り言に耳を傾けた。

「・・・にお・・・しそ・・・。」

「・・・?」

よく聞き取れなかったのもう一度、よく耳をこらして聞いてみた。

「とつてもいい匂いがするなあ、美味しそう。」

「はあ!？」

思わず声が出てしまった。だってこの子、こんな気持ち悪いミミズ(？)が焼けたのを見て『いい匂い』だの『美味しそう』だの呟くなんて・・・女の子としてどうなのよ！

「エリアルお姉ちゃんもそう思わない？」

「思わないわよっ、見た目から不味そうでしょうが!！」

確かに匂いはいい、匂いだけなら少々値の張るお肉と互角くらいと言つてもいい。

だが・・・その匂いの発生源を見てしまうと、食欲が一気に削ぎとられる。

だって・・・ミミズ(？)だよ？

美味しそうに見える？

少なくとも私は見えない。それをこの子は・・・美味しそうと言つた、確かに言つた。

・・・そんなにお腹が空いてるの？

「ねえ、3人でこれ食べない？私、お腹空いて死にそう・・・。」

「!?!?!？」

声にならなかった。

これを・・・食うと・・・？

食べたいと思ってるのはあんただけよ、ユニィ・・・。

「匂いは・・・大丈夫そうだよね。」

フォルカの一言に、エアリアルが目を見開いた。
まさか・・・。

「もう限界・・・ユニィ、これ食べちゃおう。」

「うんっ、フォルカお兄ちゃん!!」

そう言うと、フォルカは素器を展開して、あるうことがミミズ(?)を一口サイズに切りはじめた。

ユニィはそれを落とさないように拾い、少し大きめの葉っぱに盛り付け始める。

(もう・・・嫌・・・。)

「エアリアル、食べないの？」

フォルカが、サイコロステーキの様なものを差し出してきた。

「・・・いらない。」

エアリアルは左手を前にそっと出し、断った。

・・・だって、ミミズ(?)だもん、それ・・・。

「とっても美味しいよ、エリアルお姉ちゃん。」

「いって……。」

なんで普通に食べれるのよ、この2人は……。

エリアルは、辺りを見回した。

何か他に食べられるものがないかと……。

「あつ……。」「

ふと木にリンゴと思われる木の実を、発見した。

「あれよりは、はるかにましね……。」「

2人の方を見て、ゆっくりとうなずく。

そして、木の実の方を向き、歩きだした。

一步一步踏み出し、木の実に手をのばす。

その時……

「っ!!！」

木がひとりでに動きだした。

エリアルはその時の反動でこけてしまった。

「ったあ、何が起こったのよ?」「

エリアルは顔を上げる。

そこには・・・。

「何よ・・・こいつ。」

木の形をされていて、根っこ部分が触手状になっている・・・化け物がいた。

第13話 ミッドナイトフォレスト 後編

「それは本当か!？」

1人の兵士が大声で言った。

周りの兵士とは鎧の造りが少々異なるので、多分この兵士たちのリーダー的存在だろう。

「はい、これだけ探して見つからないのですからあの森に入ったとしか考えられません。」

「クソツ・・・大切な被験体がよりもよってあの森に入るとは・・・。」

報告を受けた兵士は、フォルカ達が逃げ込んだ森の方をみて呟いた。

「化け物達の住みか・・・入って帰って来たものはいない死の森・・・『デミュニの森』に・・・。」

.....

「こんな奴、いていいわけ・・・？」

エリアルは立とうにも立てない状態だった。

。 - - - 空腹の為でない力・・・初めて見た化け物に対する恐怖・・・
これらが足に力を込めさせてくれないのだ。
すると木の化け物は触手と化した根を、エリアルルの左足に巻き付けて持ち上げた。

「キヤアアア!!!」

「エリアルルッ!!!」

フォルカはとつさに素器を取り出した。
足の震えは、素器を強く握ることで無理矢理止めた。そして、エリアルルと木の化け物のいる方へ走った。

「エリアルルを離せええ!!!」

フォルカは素器を振り上げ、おもいつきり触手を切り付けた。
しかし、木の化け物はエリアルルを離さない。

「きいてない!?!」

「フォルカッ右側に避けて!」

「!?!」

エリアルルの声が出たと同時に、フォルカはフォルカなりの回避行動（顔面からのスライディング）をとった。
すぐさま自分のいた場所を見ると、触手が一本地面に突き刺さっていた。

エリアルの声がなければ、僕はあそこで串刺しになっていただろう。
。。。

「エリアルッありがとう！助かったよ。」

「お礼言ってる暇があったら相手に集中しなさいっこのバカァ！！」

エアリアルは言葉を聞いて、辺りを見回す。

そこには、触手をこちらに向けようとしている化け物がいた。

「フォルカお兄ちゃん！！」

ユニイの声が聞こえた。

思わずユニイの方を見ようとしたが、こっち見ちゃダメとユニイに止められた。

「耳だけかたむけてよく聞いて、私が『ユニイ・ファイヤ』使って燃やすから、術式の変換が終わるまで時間稼ぎよろしくねえ〜！」

「わっ、わかった！」

そういつとユニイは術式を変換し始めた。

（早くエアリアルを助けて、素術を使えるようにしないと。。。）

フォルカは素器を正面に構え直し、

「やあーっ！ーっ！」

と強く言った。
すかさず木の化け物は、四本の触手をフォルカに向けて勢いよく伸ばした。

一本目、身体を突き刺そうとする触手を左に回避して、素器を振り下ろしなんとか切断。

二本目、フォルカの身体を絡めとろうと周りを囲んできた触手を斜めに弾き、これもなんとか切断。

三本目、真っ直ぐこちらの首元を狙った高さで伸びてきた。それに対しフォルカは身体を左に少し反らし、野球のバットを振るように素器をおもいつきり振った。

「あああああ！！！！！」

素器を振り終えたときには、触手は真っ二つになっていた。

そして四本目……………

「あれっ、こない？」

確かに見た時には四本あった、そのうち三本は勢いでだが自分が切った。

なら一本まだいるはずなのに……………。

……………その時。

「キヤアアア!!」

ユニイの悲鳴が聞こえた。

「ユニイ!？」

ユニイの方を見ると、先ほどいた場所にユニイの姿はなく、その場所から百メートルほど離れた場所に、ユニイが倒れていた。フォルカはユニイの元へ全力疾走した。そして、息切れしながらもユニイの体をそつと起こしてあげた。

「ユニイ、しつかりして!!」

「ん・・・痛あ・・・。」

腰辺りから少量だが血がでてい、先ほどの触手が自分ではなくユニイに伸ばしたらしい。

「どっしょっ・・・。」

「大・・・丈夫だよ、フォルカお兄・・・ちゃん。」
そういうが、ユニイの表情と声は辛そうだった。

「フォルカ!ユニイ!逃げてええ!!」

エアラルの声が聞こえた。

こちらに向けて再び触手を伸ばそうとしていた。

木の化け物が、

(僕だけ避けたらユニイが・・・。)

ユニイは傷を負って動けない。

エリアルは触手に捕らわれ動けない。
勢いよく振って何とか切れる触手を、ユニィを支えながら切るのは不可能だ。

(神様・・・いや、この際何でもいいから・・・。)
化け物は二人に向けて触手を勢いよく伸ばした。

「僕達を助けて!!」

「その声・・・確かに神が受け取ったぜ、ボウズ。」

「えっ?」

聞き覚えのない声が聞こえた。

・・・次の瞬間!!

化け物が、エリアルごと右にぶっ飛んだ。

「えっ!?!ちよっ!?!」

エリアルは、手足をじたばたさせて触手に抵抗した。理由は、化け物がぶっ飛んでいる方向には・・・ばかでかい(例えるなら大木五本くらい)岩があるからだ。

あんなのに当たったら軽傷ではすまない。

「ほどけなさいよ!！」

だが、ほどけない。

(ヤバツ・・・!?)

エリアルは、抵抗しながらも目をつぶった。

「エリアルツ!!」

岩に当たりそうなその時、

「あっ・・・。」

エリアルのは、触手に引つ張られるような感じがしなくなった。化け物の方に顔を向けると、化け物と自分を捕えていた触手は綺麗に離れ、化け物はすでに岩に激突して動かなくなっていた。すると、エリアルのは何かそつと抱き抱えた。

支えられている方を見ると、百八センチ位の身長で眼鏡で薄茶色の短髪、そして胸元にぶら下げている十字架をした男がいた。

「僧侶様・・・?」

エリアルは、長身の男にそう言った。

男はそれに笑顔でこう答えた。

「俺は・・・言うなら『神様』だ!！」

エリアルは表情が凍り付いた。

第14話〈神へおれ〉のお導き

「あのお・・・僧侶さん？」

フォルカがいつも以上に弱々しく、僧侶の男に聞く。

「んっ？何だボウズ、トイレならその辺の茂みで・・・」

「違います!!」

僧侶の男は「冗談だよ冗談」と言って軽く笑い飛ばした。

・・・絶対僕の反応を楽しんでる、この人・・・。

「僕が聞きたいのは、本当にこの道が出口につながっているのかです。何だか道がどんどん狭くなってますし、何か嫌な感じがしますし・・・。」

「ああつ、その事か。それについては大丈夫、全くもって問題無い。足元をよくく見てみる。」

「」「足元?」「」

三人が一斉に足元を見る。

そこにあったのは・・・魔物の手や足だった。

「うわあああ!!」

「おお！穰ちゃんにはわかるか、俺の神掛かったこのシヤレが！！」
嘘でしょ、ユニイ……。あれが……。面白いだなんて……。
笑いどころが微塵もないシヤレ。
それを聞いて、腹を抱えて笑う二人。
その姿に……

「ちょっといい加減にしてよねっ！こちとら森から出られなくてイライラしてるんだから！！」

エリアルがついに怒った。

「ええ、いいじゃんエリアルお姉ちゃん。僧侶様の獣道で外に出られるんだし……。」

「その獣道が、普通じゃないのが問題なんでしょうが！！」

エリアルが、両手にグッと力を入れて怒鳴った。
その時だった。

……ぐううう……

「……えっ？」

「ああ、もう、無駄な体力使わせないでよ……。」
エリアルはお腹を押さえて、少し恥ずかしそうに言った。

「そういえばエリアルだけ、一口サイズのミニズ(?) 焼きを食べ

てないんだっけ？」

「あんなもん、食べれるわけないでしょ……。」

フォルカの一言に、エリアルは嫌なものを思い出したと言っような苦い顔をした。

「なんだ、なんかピリピリしてると思ったら、腹へってたのか……じゃあ腹ごしらえも兼ねて休憩すっか。」

「まじっ！？いやったあぁぁぁ！！！」

エリアルが両手を上に突き上げ、喜んだ。

「でも……食べられるようなものあるの、僧侶様？」

ユニイの一言に、エアリアル動きが止まる。

「安心しな穰ちゃん、この森は俺の庭みたいなもんだ、食べ物はずぐ手に入るぞ！」

「さっすが！頼りになるわぁ、僧侶様最高！！」

先ほどの僧侶さんへの怒りは、何処に消えたのだろうか。

エアリアルは、そう思わせるくらい喜んだ。

そんなエアリアルをおいて、僧侶の男はてくてくと獣道に向かって歩いて行った。そして、獣道のすでに通った方にある魔物の手をヒョイツとつまみ上げた。

まさか……。

「ほらっ、栄養化の高い肉だぞ〜！食って元気出しな！」

「……………」

エリアルが止まる。

「んっ？どうした・・・ああ、嬉しさの余り声が出ないのか！礼はいらんぞっ、神は困っている奴を助けるものだからな！！！」

彼は親指を立て、ウインクをした。

エリアルが体が震えだす・・・まずい。

「……………」

「だ？」

僧侶の男は、様子の違うエリアルの方に耳を傾けた。

「誰が魔物を食ったっ、こんのポケ僧侶があ〜！！！！！」

「……！」

エリアルが突然の大声に、さすがの彼も目を見開き驚いた。

そりゃそうだ・・・エリアルにとって、「三角コーナーのものでよければ食べる？」と言われたようなものだ。

「なんだっ！？何が不満だ、言ってみろ！！！」

「全部が！！全てが！！なにもかもがぁぁぁ！！」
二人の会話が、徐々にエスカレートしてきた。
何だか僕、会話に入れなくなって来た。

「大丈夫だよリアルお姉ちゃん！この魔物、見た目はアレだけど、
焼いて食べたなら牛さんとかわりないよ・・・多分。」

「何っ、最後の『多分』って！？自分で確認しないで他人に勧める
なあー！！」

（まずいよ・・・リアルの怒りが、最高潮に達しちゃった。こん
なときにクラスがいれば・・・いや、僕がどうにかしなきゃ。）

フォルカは辺りを見回し、木のそばにあるキノコを見つけた。
色は・・・安全そうな茶色だ・・・。

（よしっ・・・。）

「リアルツ、あそこの木のそばにキノコがあ・・・。」

「キノコ!?!?」

リアルは、フォルカの指差した方を見て、目を輝かせ走り出そう
とした。

「はいっ、ちょっとストップな・・・。」

僧侶の男が、リアルの肩を掴み動きを止めた。

「何すんのよ、ボケ僧侶!!!」

「ボケはどっちだよ、はらへり穰ちゃん……。」

彼の口調は、先ほどまでの明るく軽いものではなかった。

とても落ち着きがあって、それでいて少し恐怖が芽生えるくらい暗めの声……。

「ボウズに聞いた話によると、木の実取ろうとして木の魔物に襲われたそうじゃないか……そんなことがあったってえのに、何も警戒せず木に近づこうって言うのか？あの方はまだ巻き取られただけですんだが……魔物はそんな奴らばっかじゃねえよ、もう少し考えて行動しろ……。」

「あつ……。。」

エリアルが黙り込み、うつむいた。

「そうだった……私馬鹿だよ、ついさっきまで魔物に捕まっていたのに……その事忘れてまた皆に迷惑かけるところだった……。」

エリアルの反省した態度を見て、僧侶の男は微笑んで、エリアルの頭にポンツと手を置き、ぐしゃぐしゃと荒々しく頭を撫でた。

「痛っ!!！」

「分かればよろしい！あと、俺も大人気なかったな、悪い……。」

「えっ、何が？全然大人気なくなんて……。」

「実は穰ちゃんが食おうとしてたキノコなあ、毒がある奴だったん

だよ・・・そんで穰ちゃん止める為に嫌なこと、引きずりだしちま
ったな・・・だから悪い。」

そういうと、顔の前に左手を出して、謝罪のポーズをとった。

(謝るのは・・・私の方なのに。)

「さてっ、そろそろ行くか・・・穰ちゃん、悪いがもう少し我慢な
・・・。」

彼の態度に、エリアルは思わず泣きたくなる。

自分を助けてくれたのも、出口へ案内してくれるのも彼なのに・・・
私は彼に反発してしまった。

だけど彼は・・・「悪い」と言っただけに謝ってきた。

「僧侶様・・・。」

「ん？何だ。」

知りたかった、彼の名前を・・・多分二人もそうだと思うから。

「私はエリアル・ライシエスって言います、貴方は・・・？」

「んっ？俺か、俺はな・・・。」

すると突然、視界に光が広がった。

目をこらして見てみると、そこには草原が広がっていた。

「外に・・・出られたんだあゝ!!！」

ユニイが、大声を出して走り回った。

「待てよ穰ちゃん、森抜けたからって魔物はあるんだからよお。」

ハクイ、というユニイの声が聞こえた。

「あつ、あの……。」

エリアルが、申し訳なさそうに僧侶の男にたずねる。こんなに弱々しい彼女を初めてかもしれない。

「ああ、俺の名前だったよな。」

僧侶の男は、自分に向かって親指を立ててこういった。

「神の名前は必要ないと言いたいが、俺の名前は『ウェルト・レクセル』だ。」

「ウェルト・レクセル……。」

それが、あの僧侶の名前……。

「私はユニイツて言うの、よろしくねえ!」

「おう、よろしく頼むぜ、ユニイ穰ちゃん。」

ウェルトは、笑顔でユニイに視線を合わせてハイタッチをした。

「あつ、僕はフォルカって……。」

「よろしくな、ボウズ。」

フォルカは、反論しようとしたが、ウエルトの笑顔の裏から滲み出ている威圧に負けた。

「そんなに落ち込むなって、お前が一人前になったら名前で読んでやらんこともない！」

「えっ……はいつ!!！」

フォルカはこの先、ウエルトに一人前にならなきゃと思った。

「んで、黒髪がエリアル嬢ちゃんだよな。」

「えっ、はい……。」

「敬語はやめろ、さっきみたいに元気なエリアル嬢ちゃんの方が、俺は好きだぜ！」

歯をむき出し、ウエルトが笑った。

「……うんっ、よろしくウエルト!!！」

エアリアル顔から、とびきりの笑顔がこぼれた。

第15話 騎士と僧侶 1

「……………んっ。」

薄暗い部屋の中、一人の少女が目を覚ます。

少女は、緑色のショートヘアと深紅の眼が印象的な『クロム』だった。

「……………エリアル？……………フォルカ？」

少女は辺りを見回す。

しかし、見えるのは部屋の壁と扉だけ。

「ここは……………クロムの研究施設……………」

クロムである少女は、この部屋に覚えがあった。

自分が『クロム』として生まれ変わった場所……………。

それでいて、自分が処分されかけた場所……………。

「どっしてここに……………」

そう口にした時、一つの場面が頭の中によみがえった。

その場面は、フォルカ達とともにフォルカの兄・フィニカとクロム・ドールと戦闘しているところだった。

「そうか……私はあの人達に……。」

「目が覚めたか、No・6502153。」

背後からの声に、少女はとっさに後ろを向く。

そこには、先ほど思い出したフィニカとドールが立っていた。

少女は戦闘態勢をとる。

「お前と闘うつもりはない、俺達は確かめたいことがあるだけだ……
・No・6502153。」

「私はクラス……クラス・ゼロアークです。」

クラスと名乗った少女は、二人を睨み付ける。

「……やはり他のクロムとは何かが違うようですね、フィニカ様。」

「ああ、クロムが自分の名前のことくらいで相手を睨み付けるなんて、普通はありえんからな。」

フィニカの言う通り、普通クロムは自分自身の名前くらいで感情を

むき出したりしない。

だがクラスは、二人に『怒り』をむき出し、睨み付けたのだ。

「・・・不良品だからでしょうか？」

「・・・分かんが、普通じゃないのは確かだ。」

「・・・不良品なら、さつさと処分した方がよいのでは？私はステイアセイヴもブレスレットもない、欠陥だらけ・・・あなた方の汚点では？」

クラスが少し怒りのこもった声で言った。

(やはり何かが違う・・・ステイアセイヴがないからか？)

「ああ、お前が居れば関係のないフィニカ様まで汚名を着せられるかもしれないから早く処分してやりたいが・・・施設長からの命令なのだ、お前を殺さず捕獲しろというな。」

「私を・・・？」

クラスは戸惑った。

クラス自体、施設長と話したこともなければ見たことすらない。

それなのになぜ、施設長は私を捕獲したのだろう？私はクロムとして生まれ変わって数日で欠陥が・・・ステイアセイヴがないことが判明し処分されたのに・・・。

「それはキミが特別な存在だからたらだよ、N O 6 5 0 2 1 5 3 . . .
いや、今はクラスだっけ？」

フィニカとドールの背後から声が聞こえた。

三人は、一斉に声のした方を向く。

そこには一人、十四、十五歳くらいの見た目をした少年が立っていた。

「はじめまして、僕は『クロムN O . 6 5 0 2 1 5 4 』 . . . マスターからは『ナイト』って呼ばれてるんだ。」

「N O . 6 5 0 2 1 5 4 . . . 私の次に生まれ変わったクロム . . .
」。

「そつ、キミやそこにいる . . . えつと、ドールだっけ？キミたちよりは強いし、ヒトに近いんだよ僕。」

「 」。

ドールは黙り込む、怒りも感じない . . . ただ黙り込んでいる。

「新人クロムがドールにため口をきくな、ドールはN O . 4 7 9 0
0 8 4、お前よりもはるかに先輩なんだぞ。」

「フィニカ様……。」

フィニカの言葉に、ドールの表情がほんの少し緩む。

「ふ〜ん……フィニカだっけ？キミだつて半年前に入った新人なのにドールにため口じゃん。」

「それはフィニカ様が私のマスターだからだ……それにお前、クロムなら他人のマスターにも礼儀を忘れるなと教えられなかったのか？」

「教えられた気はするけど……僕にはコレがあるから関係ないんだ。」

そういうと、ナイトは首に巻いている黒く短いマフラーの下から何かを取り出した。

「「!!」」

「？」

クラスは、ナイトの取り出したバッチのようなものを見て首を傾げる。

フィニカとドールは、驚いた顔でナイトを見続ける。」

「それは・・・？」

クラスがナイトに聞く。

「これはね、施設長に仕えるクロムにしか与えられない特別なバッチだよ。つまり、僕はそこねの二人よりずっと格上の存在なんだよ。」

「・・・・・・・・・・。」

二人はただ、黙り込んでいた。

「さっ、僕はクラスに用があるんだ・・・そこをどいてよ」お二人さん』。

「・・・・・・・・はい。」

「・・・・・・・・・・。」

フィニカは返事を、ドールは無言で、クラスの前から体を動かした。

ナイトがゆっくりと、こちらに足を進めてくる。

「私に用とは？」

「はいっ、これ。」

差し出されたのは先ほどナイトがだしたバッチと同じ型のものだった。

「これはキミのだよ、クラス……。」

ナイトはクラスが受け取らないので、自分でクラスの胸元にバッチを付けてあげた。

「なぜ私がこれを……。」

「言ったでしょ？キミは特別な存在だからだよ。」

バッチを付けると、ナイトはヒトのようにクスツと笑った。

そして……

「……施設長はどうして僕にナイトって名付けたと思う？」

と聞いてきた。

「・・・夜にクロムになったからですか？」

「フツはずれ、理由は・・・僕より先にクロムになった『お姫様』を守るためだよ。」

「・・・?」

クラスは首を傾げる。

その姿に、ナイトはプツと笑うと、クラスに背を向けて歩きだした。

「だから大人しく待っててね、今からお姫様に付いた虫を退治しに行ってくるから。」

「虫・・・?」

「そっ・・・だから待っててね、お姫様。」

ナイトはクラスに一礼すると、三人のいる部屋を後にした。

「ほらっ、ここが俺の住まう町……つまり神の住まう町『神タウン』だ！」

「あの〜ここに『ミセツトタウン』って書いてありますけど……」

「ここに住む奴らは信仰熱心でな、朝昼晩っ、日に三度っ、俺を崇めているんだ！」

「ウエルトじゃなくて『神』をでしょ……」

「さっ、メシでも……おっと買い物するなら俺御用達の『神商店街』がオススメだ！ここはいいぞ……俺の求めるものは九割方揃う素晴らしいところだ！」

「あっ、入り口に『ミセツト商店街』って書いてある〜」

「そしてえ〜……ここが神である俺が食事を行うことが許されたありがたい食堂『神食堂』だ！……」

「すごく年期の入った、和風テイストあふれる渋いお店ですね……」

「まあ、食事できるならどこでも・・・。」

「へい親父イイ！『神そば』を頼む！！こっちの三人には『神力
星の神様』をくれてやれえ！！」

「ああっ！また来やがったな食い逃げ野郎が！！そんなに天ぷらそ
ば食いたけりやいい加減ツケ払えゴラア！！」

「うるせえ！俺が食してやろうと言ってるんだ、ありがたいことだ
ろう！？神へ供物を捧げるのはこの町の常識だろ！？あと、天ぷら
そばじゃねえ『神そば』だ！！」

「ヒト様の店の商品名を勝手に変えるんじゃないやねえ！それにちゃんと
代金払ったらいくらでもくれてやるよ！だからツケ払え！！・・・
あっ、そっちの三人はカレーでいいかい？」

「はっ、はいカレーをお願いします・・・おいくらですか？」

「カレーは一人三百・・・。」

「おい親父イ！？俺の熱狂的信者その一・その二・その三から金を
巻き上げるつてのか！？いくら親父でもそれは許せねえな！！」

「なんか私ら、無断飲食するようなヒトの信者にされてる！！」

「なに！？あんたらもウチの経営を追い込むつもりか！！」

「そんなつもりはありません！ホラ、三人分のカレー代です。」

「ああ、まいど・・・すぐに用意してやるから待ってる！！」

「おう、早めに頼むぜ・・・俺の『神そば』をな！！」

「あつてめえ、我が物顔でウチの椅子に腰掛けるんじゃないか！！」

「フッフッフ・・・考えてみる親父、俺が座った椅子だけ？安くてもツケがチャラになってお釣がくるような値はつくぜ！」

「んなわけねえだろ！そんなんは神になってからいいやがれ！！」

「なつてから？それは違うぜ親父イイ・・・俺は生まれた時から神になることを約束てんだ！親父には見えんのか、このあふれんばかりの『神オーラ』が！！」

こんな台詞ばかりのやりとりが、この後も長く続いた。

「あゝ美味しかった〜！」

四人は食堂を後にし、ミセツト商店街を歩いていた。

「うんっ、私は辛口派なんだけど……あの甘口カレーは絶品だったよ〜。」

「『甘口カレー』じゃない、『神カレー“星の神様”だ！』」

やり直しつとユニィに言つと、は〜いと言つて……

「あの『神カレー“星の神様”』は絶品だったよ〜。」

と、言い直した。

ウェルトは、満足そうな笑みを浮かべた。

（真面目な時と適当な時の差がここまで激しいヒト、初めてだよ……）

「よし、おまえららっつちこい〜」

そういうと、ウエルトは走りだした。

あわててフォルカ達もウエルトを追いかけた……が、ウエルトの脚力に子供である三人がついていける訳がなかった。

「はぁ……はぁ……、ウエルトさん……速すぎ……。」

「見失っちゃったよ……。」

「私たちのこと、もう少し考えてよね……。」

しばらく辺りを見回しウエルトを探していると、ある店から大きな（ユニイの半分位）袋を持って出てきた。

フォルカたちはウエルトの元へ行き、こうきいた。

「その袋……何ですか？」

「神たる俺が、貧しき民を救うためのもんだ。ホラ、ボウズはこれを持って！」

「うわぁ、重!?!」

ウェルトに渡されたのは、ウェルトが持っているのと同じくらいの大きさの袋だった。

「よくこんなもの持てますね……。」

「んっ？これが重いだど！？お前どんだけ華奢何だよ！よしっ後で特訓だ！覚悟しとけよボウズ！！」

「ひいっ！！」

フォルカの反応を見て、ウェルトは大声で笑った。

そして、笑いがおさまったところに……

「んじゃ、穰ちゃん達でこいつを頼むぜ！」

と言うと、自分の持っていた袋をエリアルとユニィに渡した。

「二人で持ったら軽いだろ？んで三人にはそれを持って行ってもらいたいところがある！」

「行ってもらいたいところ？」

「おう、ユニイ嬢ちゃん・・・クレヨンと紙貸してくれるか？」

「うん、いいよ・・・はいどうぞ！」

サンキューと言うと、ウェルトはサラサラと何か書き始めた。

しばらくして、フォルカに紙を差し出してきた。

フォルカは荷物を置き、紙を受け取る。

そこには、青のクレヨンで簡単な地図が描いてあった。

・・・下手で分かりにくいけど。

「・・・この何重にも丸してあるところに行けばいいんですか？」

「ああ、俺は少し用があるから先に行つてくれ。なぐに、俺の知り合いつて言えば丁重にもてなしてくれるから大丈夫だ！」

「あっ・・・はい。」

「ウェルトの用って・・・何なの？」

「たいしたことじゃねえよ、だから先に行ってる。」

「うんっわかった、ウエルト兄ちゃん！」

ユニイの言葉を聞くと、「またあとでな！」と行って走り去ってしまった。

「……行こうか、この場所に。」

「うん……。」

三人は重い袋を持って、ウエルトの描いた地図の示す場所へと歩きだした。

第16話 騎士と僧侶 2

「……ふう。」

「やっと……着いた……。」

「うう……ダルいよ……。」

フォルカ、エリアル、ユニイの三人は、ウエルトに渡された地図を頼りに一つの建物に着いた。

見た目からして教会だが、所々に青々としたツルが巻き付いていて、長い間整備されていない感じだった。

「……ったく、こんなところにウエルトは何運んでるのよ。」

「……中見ちゃう？」

ユニイの一言に、エリアルは興味あり気に首を縦に振り、袋のあけ口を縛っている紐をほどく。

「「「………。」」」

袋の中に入っていたのは……

「食べ物……だよね？」

「うん……それ以外に見える方がすごいと思うよ、フォルカお兄ちゃん。」

袋の中には、野菜や果物、魚、お肉、パン等が、これでもかというくらい敷き詰めてあった。

「何のためにこれを……。」

「……すいません、どちら様でしょうか？」

突然、声がした。

声のした方を向くと、そこには四十〜五十歳くらいの女性が、教会の入り口に立っていた。

「今・・・子供たちがやつとお昼寝をしてくれたので、お話をされるのであればもう少し静かにしていただけると、こちらも助かるのですが・・・。」

「あついえ、僕たちはウエルトさんに頼まれてここに来たんです。」

「ウエルトに・・・ですか？」

女性はかすかに微笑み、三人の方に歩みよった。

「ウエルトのお友達でしたら大歓迎ですよ。さっ・・・こちらへどうぞ。」

女性の誘導に三人は頷き、教会の入り口に向かって歩きだした。

「ウエルトはあんな性格ですが、根はとても優しい子なんです・・・子供たちにろくに食べさせてあげられてないことを言ったら、暇を見つけては子供たちの相手をしてくれたり、食べ物を持って来たりで・・・。」

「へえ・・・。」

彼女の話によると、ウエルトは僧侶になる前から袋で食べ物を持ち、子供たちと一緒に遊んだりしていたらしい。

子供たちに合わせるんじゃなく、子供たちと本気で向き合ってくれてるから、彼女はかなり助かっているという。

「・・・なんだかカッコいいな、ウエルトさん。」

「本当・・・見直しちゃった。」

「ウエルト兄ちゃんって・・・すごくいい人なんだね。」

三人は、ウエルトの事を改めて知れたような気がした。

その時だった。

「『すごくいい人』じゃねえ！『すごくいい神様』ゴッドだろ、ユニイ嬢ちゃん！！」

「うわぁっ、でたぁ！！」

ものすごい勢いで扉を蹴り開け、ウエルトが入って来た。

・・・また違う袋を背負って。

「相変わらず元気ですね、ウエルト・・・。」

「ようシスター！そっちも相変わらず元気そうじゃねえか！！」

「ええ・・・貴方のおかげで死ぬにも死ねませんよ・・・。」

ウエルトとシスターは、顔を見合せて笑った。

「ところでウエルトさん、その袋は？」

「ん？これはだな・・・。」

「子供たちへのオモチャ！？」

「・・・ちょっと違うなユニイ嬢ちゃん、これはここにいる子供たちへ神からの贈り物って奴だ！」

「フフツ・・・喜んでくれるといいね、ウエルト。」

おうつ、とウエルトがこちらへ笑いかけて来た。

なんだか、彼がとても神々しく見えてきた・・・。

その時、部屋の右側にある扉が勢いよく開き、十人くらい子供たちが入って来た。

「あゝっ、ウエルトが来てる！」

「今日はなに持って来たの!？」

「早く出してよゝ!！」

「相変わらず元気なガキどもだな!よゝし待ってるよゝ・・・今日は大都で今、大人気のオモチャ『レ・陰謀・アート』を持って来てやったぞ!」

「「「うわあゝゝゝゝい!！」」」

ウエルトの周りに、男女関係なく子供たちが集まる。

ウエルトは『レ・陰謀・アート』の使用法を子供たちに説明していた。

「ほらっ、七色の固形絵の具を、この先に十センチスポンジの付いた棒に水を付けて・・・絵の具をなぞれば・・・ほらっ、スポンジに色が付いたぞ！」

「わあ〜〜いつ、これでお絵かきするんだ〜〜!!」

「これさえあれば・・・乗り物(?)だってスウ〜ラスウラだ!!」

そういつて、ウエルトがスポンジを使って乗り物らしきものを書き上げた。

「すげえ〜〜!!けどなに描いてるかわかんねえ〜〜!!」

こんな感じで、ワイワイと子供たちと話している。

()うらやましいな・・・僕には友達がいなかったし・・・。()

「ウエルトく、この棒じゃ虹が描けないよ……色が五色しか付かないし。」

「そんなときにはこの『芽我棒』^{メガステイック}を使うんだ！こいつは七色同時に描くことが可能な優れものだ！！」

「ありがとウエルト！これで僕も、アーティストみたいな絵が描けるよ！！」

「おうつ、頑張りな……んっ？どうした。」

「……………」

女の子が一人、子供たちの集まっている場所から離れたところにいた。

「黙っていないで言ってみろよっ、俺は神だ！神様だ！^{カミ}神様だ！悩みなんて、あそこに突っ立ってるポウズを小指で倒すくらい簡単に解決してやるぜ！」

「ええっ！！？」

ウエルトとフォルカのやり取りに、クスツと笑い、口を開いてこう

いった。

「私……この服がお気に入りの、だから……絵の具で汚したくないの……。」

「なんだそんなことか……心配ご無用！」

そういうとウエルトは、女の子の前に『レ・陰謀・アート』を持ってきて、固形絵の具が入った容器を床に傾けた。

「ああ、絵の具が床に落ちて汚れちゃうよウエルト！……ってあれ？」

「そう、『レ・陰謀・アート』は色が垂れない、跳ねない、そしてえ……。」

ウエルトがサラッと棒で絵を描き、すぐさま右手で絵を撫でた。

その手を女の子に向けて、ウエルトはこういった。

「手に付かなあ……い……！」

「わあっ！これならお洋服も汚れないよ！」

「よしっ、これ使って楽しくお絵かきタイムだ！」

「うんっ！！」

女の子はウエルトが持っていた『レ・陰謀・アート』を受け取り、さっそくお絵かきを始めた。

「棒持っていないやつはこっちの『光棒』シャイニングスティックをくれてやるぜ！」

ウエルトが『光棒』シャイニングスティックでサラッと絵を描き、描いた所を手で覆った。

「・・・わあっ、描いた所が光った！」

「どうだ、これが『光棒』シャイニングスティックだ！」

歓声と共に、子供たちがウエルトの周りに、まるで蟻のように群がった。

「すごい人気だね、ウエルト兄ちゃん……。」

「うん……僕もあんな人になりたいな……。子供に優しくして、好かれる人に……。」

「よしガキども！今日のメインディッシュの登場だ！！」

ウエルトの一言に、子供たちの視線が集まる。

ウエルトは袋に手を突っ込んで、「そこそとそのメインディッシュとやらを探している。」

「ほらあつ、メインディッシュの『カクレ神人形（木彫りの手作り）』だ
！！」

「……。。。。。」

ウエルトの取り出した人形（木彫りでウエルト型）を見て、子供たちの刻が止まった。

数秒後……子供たちは動き出し……

「うわあああんっ！またそれかよ〜〜！！！」

「この前もそういつて、その人形出したじゃんか〜〜！！！」

「しかもこの前のは『歩行型』とかいつて、無理矢理手足を動かして折れたじゃんか！！！！！」

「大丈夫、今日のは『会話型』だ！ほらっ、背中にある突起物を押してみる！」

ウエルトはそういつと、一人の男の子に人形（木彫りウエルト型）を渡すと、背中のスイッチ（ウエルト曰く突起物）を押させた。

すると……

「……こんにちは俺は神様だ！」

と、人形の揺れに合わせて、必死にウエルトが腹話術をしていた。

「ウエルトが腹話術してるだけじゃんか〜!!」

「最近の子供を、そんなことで騙せると思つな!嘘つきい〜!!」

「俺たちの最高潮だったテンションを返せ!!このバカ〜!!」

その瞬間、ウエルトの顔が引きつった。

「今バカって言ったのは誰だ!俺のどこがバカだ!?おまえらの為だけに三日もかけて人形彫ってやってるんだぞ!!」

「そんなの頼んだ覚えはないよ〜!!」

「つつか、これ自分で彫ってたのかよ!変にこだわるなあ〜!!」

「こんなことしてる暇があったら真面目に働け〜!!このジヨブレス僧侶!!」

ウエルトから、ブチンツと何かが切れる音がした。

・・・嫌な予感が・・・。

「おまえらがキだからって何言っても許されると思うなよ!? そんな悪いガキ共には神が制裁をくわえてやる!! こっちこいガキ共、みんなまとめて尻が腫れあがるまでペンペンじゃ~~~~!!」

「うわあああんつ、幼児虐待い~~~~!!」

「虐待!? これは二度と神に悪口言えなくするための制裁だあああ~~~~!!」

大人気なく、ウェルトは子供たちを追い回す。

「・・・・・・・・。」

「フォルカ? 誰のようになりたいって?」

エアリアルの一言にフォルカは・・・

「・・・・・・・・追い求めている憧れの自分になりたいです・・・・・・・・。」

と、短く答えた。

「フフツ……やっぱりウエルトは、子供たちと仲良しね。」

シスターにはあの光景が、子供たちと遊んでいるように見えた。

薄暗く、どこまでも続きそうな廊下を、ナイトは一人歩いていた。

「……………フフツ。」

ナイトは薄く笑う。

「本当に可愛かったな……マスターの言ってた通り……いやっ、それ以上。」

一人、小声で呟き続ける。

「彼女を……クラスを守る騎士^{ナイト}、それが僕……マスター以外の誰にも彼女は渡さない。」

この前脳内データで見た、『クラス』という名をした花のことを、
ナイトは思い出した。

「……とても小さな花で、人目に入る前にほとんどが虫に喰われ
てしまう……。」

そう……虫に……。

「……そんなことさせない。」

聞いた話によると、虫は三匹……そのうち二匹は既にクラスと接
触している。

……しかし、森に入って行方不明になったとも聞いている。

「もし生きてるなら……あの『信仰』とか下らないこと言ってる
奴らのいるミセットタウンくらいには着いてるかもね……。」

ナイトは扉の前に着いた。

そして、扉にそつと手をそえる。

「とりあえず・・・そこに行ってみるか。」

そえた手に、グツと力を入れる。

ギイイイ・・・と鈍い音と共に、扉が開く。

開けた扉の間から、眩しいくらいの光が差し込んで来た。

「待ってなよ、虫共・・・一匹残らず駆除してあげる。」

ナイトは一步、外に向かって踏み出した。

第17話 騎士と僧侶 3 (前書き)

更新がかなり遅れてしまい、申し訳ないです。

第17話 騎士と僧侶 3

「「「……………」」」

三人は、啞然としていた。

「神様は子供の嫌がる事はしないってシスターが教えてくれたの、ウエルトが神様なら私たちの嫌がる事はしないよね？」

「おっ、おう……………なんだって俺は神様カミヤだからな……………そんな些細なことで子供に手を出したりは……………しないぞ。」

子供（しかも女の子）にいいように言いくるめられている、二十代後半の男を見て……………。

「でしょ？……………さっみんな、お絵描きの続きしよ〜！」

「「「おお〜〜〜！！！」」」

多分ウエルトを言いくるめた女の子は、この子たちのボス的存在だろっ。

フォルカは、ふと横を見る。

横では、ユニイが無言でプルプルと震えていた。

「・・・ユニイ？どうしたの。」

フォルカがユニイの肩に手を置こうとすると、ユニイはいきなり子供たちの方に歩きだした。

「ちょっとユニイ、どうしたのよ!？」

「・・・大丈夫、用があるのは『レ・陰謀・アート』ただ一つだから・・・。」

そういつて、子供たちが集まっているところに、無理矢理割って入った。

ユニイは子供たちなど目にも止めず、『レ・陰謀・アート』の前に立った。

次の瞬間・・・

「どじやあああ〜〜!!」

「」「うわあああ〜〜!!」「」

急に『レ・陰謀・アート』を掴み、おもいつき振りかぶってぶん投げた。

『レ・陰謀・アート』は、天井に叩き付けられた。

「ああああ〜!!俺の『レ・陰謀・アート』がああ〜!!」

「こんなものっ、脳によくないっ!子供の想像力が伸びないっ!クレヨンにしるああ〜!!」

ユニイの急激な変貌に、フォルカとエリアルはただ見ていることしか出来なかった。

「おっ、お姉ちゃんだ〜れ!?新しく来た人!？」

「じゃかしい！あんたらみたいにお絵描きするのにこんなもの使う奴らに名乗る名はなあ~~~~い！！」

あのボスの女の子も、変貌ユニイの威圧感に逆らえずにいた。

「いつガキ共！？クレヨンはねえ、あんたらの貧相な想像力を・
・私と比べて~~~~私の五億分の一まで引き上げてくれる伝説か
つ庶民派アイテムなんだよ！わかったか！！」

「「はっ~~~~はいいい！！」「」

ユニイの一喝に、子供たちが思わずビシッと気を付けをした。

「ちよつとまてええい！！」

「~~~~何、ウェルト兄ちゃん？私はこのガキ共の再教育で忙しい・
~~~~」

「ユニイ穰ちゃん、いやユニイ！！よくも俺の『レ・陰謀・アート  
を天井に叩き付けやがったな！？あれを扱ってる店はこの辺で『神  
商店街』しかないんだぞちくしょ~~~~い！！」

「ウエルト兄ちゃんが、こんなお絵描き界のルーキーを持ってくるのが悪いんでしょ！？しかもこのルーキーがレアいの！？うわぁ・・・どおりでこの町のガキ共がバカっぱいわけだぁ・・・。」

「うわぁぁぁぁぁんっ！シスターアアアのお姉ちゃんに町ごとバカにされたよ～～～！！」

変貌ユニイの、いちいちグサツとくるトゲのような暴言に、ついに子供たちの何人が泣き出してしまった。

「ユニイイ、てめえよくも未来の俺の信者たちを泣かせたな！！」

「うわぁぁんっ！シスターアアア、私たちなりたくもない奴の信者候補にされてるよ～～～！！」「」

ウエルトは気付いていないようだが、ユニイの暴言で精神的にズタボロにされた子供たちにとって、ウエルトの発言も子供たちの目に涙をつかばせるキーワードになっているのだ。

「あぁっ・・・ほら泣き止んで・・・。」

子供たちを泣き止ませようとしているシスターが、とても大変そうに見えた。

「あのく、僕たち二人に何か手伝えることはありますか？」

「手伝って頂けるのですか？でしたら・・・子供たちに何か違うオモチャを探してきてもらえませんか？」

そういつてシスターは、お金の入った小袋を差し出した。

フォルカとエリアルは、顔を見合らし頷いて、こういつた。

「お金はいいわよシスター、そのくらい私たちが払うから。」

「えっ・・・しかし・・・。」

「僕たちはやりたいからやってるんです、だから気にせずに。」

シスターは少しの間悩み、こう答えた。

「・・・すみません、ではお言葉甘えさせて貰います。」

「じゃあ、行ってきますね、行こっエリアル！」

「うんっフォルカ！」

二人は教会の扉を開き、商店街に向かって走り出した。

「ねえエリアル、これはどうかな？」

「ん〜．．．積み木は．．．もうあったからダメだと思う。」

「そっか．．．。」

フォルカとエリアルは、オモチャ屋の前で何を買つか悩んでいた。

「これなんてどう？超イカしてるわよ。」

「おまま」とセツトって．．．それはちょっと女の子すぎない？」

「そう？最近のおままごとは男の子も巻き込んで、大胆かつデリケートな家族関係を演じるから面白いよ？・・・何ならフォルカやってみる？」

「・・・遠慮しとくよ、そんなことされたら多分立ち直れなくなるから。」

そんなやりとりも含めて数十分、アレでもないコレでもない話し合い・・・出た結論は・・・

「・・・しょうがない、他の店に行こう。」

「そっね・・・行きましょ。」

そういつて振り返ったとき、エアリアル動きが止まった。

「・・・どうしたの、エアリアル？」

「・・・あれって・・・。」

エアリアルが指を指す方を見る。

「・・・・・・・・！！！！」

二人の視線の先には、ショートカットの緑髪で黒い服を着た人が、人混みの中に入って行くのが見えた。

「フォルカ……今のつて……。」

「……クラス、なのかな？」

確定は出来ない……だけど、あんなに鮮やかな緑髪をした人やク  
ロムは、クラス以外見たことが無かった。

「行ってみる？」

「行くしかないでしょ、私たちを捜してるのかもしれないし。」

二人は、クラスらしき人影の見えた方に走った。

人混みの中をかき分け、必死に捜した。

一人一人に、目の神経を集中させ……探し続けた。

「フォルカ！あそこ！！」

エリアルが指を差す。

その方向には、先程目撃した緑髪の人が歩いていった。

「クラスツ！クラスなの！？」

緑髪の方は、こちらの声が聞こえたらしく、ゆっくりと振り返る。

その姿は・・・

「残念・・・人違いだよ。」

緑髪のショートカット、黒色の服までは同じだったが、短めのマフラーと膝が隠れるくらいの丈をしたズボンを履いている、『クロム』の少年だった。

「あっ・・・ごめん、僕たち・・・君とある人を間違えちゃって・・・」



「うづん、気にしてないよ。」

クロムの少年は、こちらに向かってニコツと笑った。

「あれ？フォルカ・・・あのクロム笑って・・・。」

「フツ・・・そんなことよりもさ、僕は君たちにとても会いたかったんだよ。」

「僕たちに？なんでかな・・・。」

「だって君たち、クラスと一緒にいた奴らでしょ？」

「「!!」」

なんでその事を、この少年が知っているんだ!?

「・・・なんで僕がその事を知っているのかっていいいたそうな顔してるね。」

「えっ!?!」

「名前は確か・・・『フォルカ』と『エアリアル』、クラスから聞いたよ。」

この少年は、クラスのことを何か知っている・・・なら・・・。

「ねえキミ、クラスのこと知っているんだね!？」

「・・・うん。」

「クラスの様子はどうだった!?何か変なことされてなかった!？」

「そんなことする訳ないよ、クラスは大切な僕とマスターのお姫様だもの・・・。」

少年の一言に、何かひっかかった。

「お姫様?・・・クラスが?」

「そつ、お姫様・・・綺麗で、可愛くて、優しくて・・・まあそのせいで悪い虫が付いちちゃったけどね。」

「虫・・・?」

会話が止まる。

しばらくして、クロムの少年が口を開いた。

「・・・クラスは失敗作なんかじゃなかった、なのに勝手に失敗作として処分されて・・・。そしてあいつが・・・ライシエスの野郎が、マスターが助けようとしたクラスを、マスターより先に連れていきやがった!!虫のくせに・・・虫のくせにいい!!!!!!」

ライシエス!? エリアル・・・お父さん!?

「あんた、お父さんのことも知ってるの!?!?」

「お父さんだつて!?!?」

少年は黙り込む。

しばらくして、口を開いた。

「データ取得完了・・・なるほど、お前のフルネームは『エリアル・ライシエス』・・・あいつの娘か。全く親子は揃いに揃って・・・。」

少年の左手に、緑色の光が集まる。

「僕とマスターの邪魔ばかりしてさああ！！！！！！」

少年は光を、例えるなら光線のようにして、こちらに放った。

「っっ！！！！」

二人は、即座に光線の右側に回避。

ギリギリのところまで当たらなかった。

光線が通過したあとを見て、二人は息をのんだ。

地面が一直線にえぐれていたのだ。

・・・これをまともにくらったら・・・。

「エリアルツ、どつしよつ・・・。」

「とりあえず、人気のないところへ・・・。」

「人気のないところへ逃げるの？なら・・・。」

「「!!」」

いつの間にか少年は、こちらの正面にいた。

「手伝ってあげるよ!!」

少年の左手に、今度は赤い光が集まる。

「炎素スティア・・・収束。」

「させない！」

エリアルがナイフ型の素器を展開、少年に向かって一歩踏み出す。

「遅いんだよ！虫があああ！！！！！」

赤い光が炎に変わり、拳と共にエリアルを襲った。

「きゃあああああ！！！」

エリアルが一直線に飛ばされる。

植えられていた木を折り、一気に教会付近まで飛ばされた。

「エリアルツ！！！」

エリアルの方に、意識を集中させる。

今の技は以前、クラスがドールに対して使用した、炎素スティアを手に集め、攻撃する『炎打』えんだと似ていた。

しかし、威力が違った。

クラスの使う炎打は手数があった、しかしこの少年の使う炎打は一撃に特化されており、手数は少ないものの威力はクラスの何倍も上に感じた。

「他人の心配するよりさ……。」

フォルカは前をむきなおす。

少年は既に、青色の光を手にも収束させていた。

「自分の心配でもしてなよ!!!」

光がまだ集まり続けている……まだ止められる!

フォルカはエリアルと同じように素器を展開、おもいつきり振りかぶる。

「遅いつて……言ってるだろ!!」

青色の光は水に変わり、炎打と同じように拳と共に、今度はフォルカを襲う。

「『水打』!!」  
すいだ

「うわああああ!!」

フォルカの体は、いともたやすくエアリアル飛ばされたのと同じ方向に飛ばされた。

「くっ……あ……」

フォルカは何とか保たれている意識のなか、立ち上がるうとする。

しかし全身に痛みが走り、立ち上がることが出来ない。

「うっ……エアリアル。」

エアリアルの方を見る。



気を失っているのか、動かない。

「弱いね、君たち……。」

いつの間にか、少年は二人の前にいた。

「その程度の実力でクラスの側にいたなんて……呆れちゃうよ……」

「っ……。」

「クラスに君たちは必要無い……僕とマスターが居ればね、だからさ……消えてよ。」

少年は最初に使用したものと同じ、緑色の光を手に集め始めた。

先程よりも長く……時間をかけて。

「フツツ……なんならこの町の奴らみたいに神にでも祈ってみれば？ 苦しまず逝けますようにってねえ……！」

「……………」

光が強くなる。

(神……僕が知っている神……)

「さよなら……虫共。」

少年が手を構える。

(僕の知っている神は……!!)

「消え失せろおお!!」

少年が光を放とうとした時……

「おらああ!!」

「なっ!?!」

突如出現した脚・・・余りにも突然の蹴りに、少年は対処仕切れなかった。

蹴りが当たり、少年の体が宙を舞う。

フォルカたちの前に立っていたのは・・・

「・・・ウエルトさん。」

「カミユ神様・・・参上だ!!」

フォルカがよく知る、頼りになるカミユ神様だった。

## 第18話 騎士と僧侶 終

「・・・なにが神の登場だ、たまたま不意討ちが決まったからって・・・調子に乗りすぎだよキミ。」

少年は、体を起こしながら言った。

「キミのようなただのヒトが神ならさ・・・僕のマスターが絶対神で、僕はその神に仕える騎士だよ。」

その言葉に、ウェルトはピクツと反応した。

「おいつ、上が出てきたら上だつて言い返すって・・・どこのガキの発想だよ！？神おれの上はいねえ！それ以上言い返すなら雲の上からたたき落としてやる！！」

「ウェルトさんのほうも十分ガキの発想ですよ・・・。」

大人気ない・・・今の彼にピッタリの言葉だと、フォルカは思った。

その時……

「うおりゃあぁ〜!!」

急に扉を蹴り開け、ユニイが勢いよく出てきた。

「!!ユニイ、まだ動けたか!!」

「まだよっ、まだ私たちの闘いは終わってないわよ!さあ、クレヨンの良さを思い知れ!!」

「ウルセエ!クレヨンクレヨンって……一色しか持ってねえのに何がクレヨンのよさだ!!」

「一色しかないからこそイマジネーションが発達するのよ!!……どうしてそれがわかんないのよ〜!!」

また始まってしまった……僕たちじゃ止められない……。

「いい加減にしなよ……。」

少年の声が聞こえた。

フォルカとエリアルが少年の方を見ると、すでに少年の左手に緑色の光が収束していた。

そしてウェルトとユニイのいる方に、先程よりも何倍もの出力をした光線を放った。

「……っ!」

「うわぁっ!?!」

ウェルトは光線に対し、ユニイの体を片手で持ち上げ、地面をジャンプする様に蹴り、上空へ回避。

その後、着地してユニイをそつと地面に下ろす。

「悪いが、ケンカはまた後でな。」

「えっ!?!あつ……うん。」

ユニイの承諾を得た後、ウエルトは少年の方を向く。「

「その胸元の十字架・・・お前、僧侶か？僧侶にしては、よく避けた方だけど・・・次はそう上手く避けられないよ！！」

緑色の光が、今度は両足に収束する。

「僕のスピードについて来れない限りはねえ！！」

・・・ビュンッ！！

その音と同時に少年の姿が消える。

フォルカとエリアル、ユニイの三人はは辺りを見回す。

姿が消えた敵・・・いつどこからされるかわからない攻撃。

そんな状況に置かれていると思うだけで、恐怖心が込み上げてくる。

フォルカの頬を、汗がったう。

ゆっくりと・・・下に向かって汗が流れる。

頬から・・・汗が離れる。

・・・その時っ！

「遅いよ！...！」

少年は、ウエルトの背後に出現。

左手にはすでに緑光が収束していて、いつでも放てる状態になっていた。

「消えるおお！...！」

少年はゼロ距離で、緑光の光線を発射。

ウエルトに避ける暇はなかった。



……ドゴオオン!!

ものすごい爆音と共に、砂煙が上がった。

「ウエルトさんっ!!」

「ウエルトッ!!」

「ウエルト兄ちゃんっ!!」

三人が名前を呼ぶが、返事はない。

「あはははは!! 僕の邪魔をするからだよ!!」

少年が笑う。

三人の実力はあの僧侶以下……勝つのは確実に自分!!

・・・そう思い込んでいるから。

「さあ、キミたちも、僧侶と同じところへ行かせてや・・・。」

少年の動きが止まる。

「」「」「?」「?」「」

三人は、少年の動きが止まった理由が・・・すぐにわかった。

「それで終わりかよ？ガキ・・・。」

少年の背後には、先程しとめたと思われたウエルトが立っていた。

「くっ！」

少年は再び、左手に緑光を収束させる。

「遅せえよ！くそガキツ！！」

ウェルトの右手が輝く。

その右手は、少年が使用した『炎打』の如く、光と共に拳が少年の腹部を襲う。

「うわあああつ!!」

少年の体が、一気に上空へ飛ばされた。

とっさに、少年は緑光を集め、風を飛ばされている方とは逆に発生させ、体を止めた。

少年が着地した時、膝を地面に付く。

「くっ……あ……。」

体の内側に、響きわたる様な痛みが、治まらない。

その痛みをこらえて、何とか立ち上がるが、すでにウェルトが目の前に立っていた。

「うっ……なあ……。」

「いいか、くそガキツ!!!光線つてのはよお……。」

ウェルトの右手に、再び光が集まる。

「こつやるんだよ!!!」

右手を突き出し、少年と同様にゼロ距離で、白光の光線を発射。

少年の光線との威力の差は……歴然だった。

数秒の間、砂煙が上がる。

砂煙が止んだ時には、少年がその場に立っていた。

しかし、身体中がボロボロになっており、とても戦える状態ではなかった。

「くつ……お前、何者だよ!? ヒトのくせに……スティアを交換するなんてさ……。」

「いったる？俺は神だつてな！！」

そういうと、ウェルトは懐から何かを取り出した。

「なっ・・・何だそれは？」

「これはな・・・お前の様な悪ガキを再教育するにはもってこいの神具、『レ・陰謀・アート』だ！！これで遊ばせてお前のそのひんまがった根性をたたきなおしてやる！！」

「なっ！？だっ・・・誰がそんなもので遊ぶもんか！！」

「フッフッフ・・・口ではそういつてるが目が輝いてるぞお、  
本当は遊びたいんだろお。」

「そっ・・・そんな事！！」

先程までのシリアスな空気が、音を立てて崩れ始めた。

しかもあの少年が・・・あんな年相応の子供じみたことを言っ  
て・・・。

「ウエルトって・・・絶対に敵にまわしたくないタイプね・・・。」

「うん・・・。」

そんな二人を押し退けて、ユニイがウエルトの方に走りだした。

「そんなルーキーよりも、イマジネーションUP間違いなしのクレヨンを使いなさい!!」

「ユニイ! てめえ、またしても俺の邪魔をするつもりか!？」

「邪魔も何も、その子を私は一時間前から目を付けてたんですよ!!」

「何を! 俺はこいつが生まれた時から目え付けとったわ!! 何せ、神カミだからな!!」

二人がまた、ケンカを始めてしまった。

その隙にと言わんばかりに、少年はその場から離れていた。

そして、両足に緑光を収束させて・・・

「覚えてろよ僧侶！次はお前を原子レベルに分解してやるからな！」

と行って、一気に姿が消えた。

「あっ！あのガキ・・・にげやった！！！」

「ちよつと〜！帰って来てよ〜！！！」

二人が、少年が先程まで立っていたところを怒鳴っていた。

「・・・つたく、これだから物分かりの悪いクロムのガキは！！！」

「全くだね！！ブレスレット付けた奴出てこお〜〜い！！！」

そんな事を言っていると、教会の方から誰が出てきた。

見た目は、太り気味の男性で、何かと偉そうなヒトだった。

「ウエルトツ！お前また教会に傷を付けよって！！」

「げえっ！！司祭！！」

「・・・ウエルト、あの人が怖いのか？意外な弱点だね。」

「違えよ・・・司祭はな、説教がバカみたいに長いから嫌なんだよ・・・  
・・・それだけだ！！」

「自信満々に言うことじゃないですよ・・・。」

そんな事を言っていると、目の前に今にも血管がブチ切れそうな司祭が立っていた。

「確かにお前は強い、ミセツトタウンに来た魔物を一人で倒せるほどな・・・だがな！魔物と一緒にこの町を廃墟にするつもりか！修理費だけでいくらかかると思っとるんだ！！」

「すみませんでしたもういたしません司祭。」

句読点なし・・・つまり棒読みで、ウエルトは司祭に許し（？）をこった。



そんな時、ブチンツと何かが切れる音がした。

「もう我慢できん!! ウェルト・レクセル! お前をこの教会から追放する!!」

「ちょっと司祭……それは言い過ぎでは……。」

「シスターは黙つといてください!! これは決定事項です!!」

シスターの抑えも、今の司祭には全くの無意味だった。

「ごめんなさいウェルト……司祭を止められなくて。」

「いってシスター、適当にその辺をぶらついて、ほとぼりが冷めたら帰ってくるぞ。」

「ええ……では皆さん、ウェルトと仲良くしてやって下さいね。」

「「「えっ!?!」」」

今……シスターは何て言ったの?

「皆さんはウエルトのお友達なんですよ？でしたら少しの間だけ・  
・ウエルトのことをよろしく願います。」

シスターは、深々と頭を下げた。

そんな事されたら、断わる訳にはいかない。

「……よろしく願います、ウエルトさん。」

「おっっ、しっかり面倒見てやるから覚悟しとけよ!！」

「……はあ。」

僕の口からは、ため息しか出なかった。

「くう……。」

少年は、元居たクロム研究施設に帰って来たが、入り口に倒れ込んでしまう。

「何だよ……あいつは……。」

少年の傷が、徐々に塞がっていく。

「自然回復が追いつかないなんてね……ビックリしたよ。」

少年は、両手に力を込めた。

「だけど……次は確実に仕留めてやる……。」

少年の声が、廊下に響いた。

……近くにあった時計に目をやる。

時刻は午前四時……。

「……マスターに報告したら、ちょうど良い時間になるな。」

少年……ナイトは、体を起こして歩きだす。

「……クラス……。」

彼女の名前を呟き、ナイトは早足でマスターの元に向かった。

## 第19話 Story

「……………」

私はこの施設に来てから、ほとんど変わらない日々を過ごしています。

午前六時に起床、六時半から朝食……………」

えっ？クロムは食事をするのだった？

クロムは、『ステイアセイヴ』を身につけて身体能力を強化したヒトなので、食事は必要なのです。

……………話を戻します。

朝食終了後……………やる事はありません。

ぼくっとしているか、気分転換に体を動かすくらいしか出来ません。

少し前に、研究員が数人来ましたが、やる事やって帰ってしまいました。

・・・少しくらい、誰かとお話出来ないでしょうか？

出来れば、フォルカのお兄さんのフィニカさん辺りと・・・。

・・・その時です。

・・・コンコンッ。

扉を叩く音が聞こえました。

いったい、どちら様でしょうか？

「・・・失礼します。」

そういつて入って来たのは、フィニカさんでした。

・・・ナイスタイミングです、フィニカさん。

「あっ・・・フィニカさん。」

「おはようございます。」

そういつて彼は、軽く会釈してきました。

・・・どうやら、このバッチのせい見たいです。

「あの・・・この前みたいのため口で話してもらえませんか?」

じゃないと何だか、調子が狂います。

「・・・貴方が望むなら。」

そういつと、フィニカさんは一回咳払いをして、こつちを向きま  
した。

「・・・実は、お前に聞きたいことがあるんだが、いいか？」

と、フィニカさんが聞いてきました。

やっぱりこっちの方が話しやすいです。

「・・・はい、何でしょうか？」

「・・・まず、これを見てくれ。」

フィニカさんはそういうと、数枚の紙を取り出しました。

書かれていた内容は・・・

「・・・ああ、この前の検査結果ですか。」

先程話しましたが、数日前に数人の研究員が、私の元に来ました。



その時に行ったのが、私の身体検査でした。

調べたかったそうです、ステイアセイヴ無しでクロムとして存在できる私のことを……。

「そうだ、そのレポートに書いてある通り、お前はステイアセイヴ無しでもクロムとして存在している。欠陥……ではなかった、つまりステイアセイヴにも、ブレスレットにも縛られないクロム……それがお前だ、クラス。」

「縛られないクロム……。」

何だか……いい響きです。

「それに加えて、お前と同じくステイアセイヴとブレスレットに縛られないクロムが、もう一体いる事が判明した。」

「えっ？……誰ですか、そのクロムは？」

私と同じクロム……名前だけでも知っておきたいです。

フィニカさんは、ゆっくりと落ち着きのある声で答えてくれました。

「・・・No.6502154、ナイトだ。」

「ナイト・・・。」

私にバッチをくれたクロムです。

「あいつは、ステイアセイヴ無しでクロムとして存在している上、ヒトに限りなく近い感情を持ち合わせている。・・・しかもパワーだけならドールの遙か上をいつている。」

ナイトは、ドールよりも強いんですね。

あつ、なんかフィニカさんが軽く歯ぎしりをしています。

「・・・悔しいんですか？」

「ああ、ドールがあんな礼儀も知らない新人におくれをとっている

のは、他ならぬ俺の責任だ……。」

「……………」

私は、何にもしてあげられません。

何とって励ましてよいのか……。

「……すまない、話がそれてしまったな。」

「いいえ、お気になさらずに……。」

それは、ドールのことをきちんと考えていて出てしまった反応ですから。

私も、フィニカさんの様な優しいヒトをマスターにしたいです。

「……本題を聞いてもいいか？」

「はい……。」

一体どんな事を聞きたいのでしょうか？

「・・・クラス、お前は施設長とどんな関係なんだ？」

「えっ・・・。」

「施設長は・・・何というか、他人と滅多に会話をしない方で・・・指令のほとんどが紙に書かれたものがクロムを通じて渡されるんだ。そんな施設長にいきなり認められるなんて、家族の誰かが施設長と知り合いなのか？クロムになったとはいえ、家族の事みたいな個人情報覚えていると思うんだが・・・。」

「・・・。」

そんな事、こっちが聞きたいです。

だって・・・施設長とは会ったこともないんですよ？そんなヒトにいきなり捕獲されて・・・専属のクロムに任命されて・・・。

「・・・わかりません、施設長とは一度も面会していませんし、私

には家族がいませんので。」

「家族が・・・いないのか。」

「いない・・・というよりは、覚えていないのです。家族の構成、家族の顔や声、家のある場所・・・その他の個人情報もあやふやで・・・。」

「・・・辛くないか？家族の事を覚えていないのは・・・。」

フィニカさんは、どうやら私を心配してくれているようです。

・・・私の身勝手な解釈ですけど。

「・・・辛くはありません、家族の事を覚えていないのですから。」

「・・・覚えてなくても、少しくらいは辛いと思うぞ？ 少なくとも俺は辛い、家族の・・・フォルカの事を思い出せないなんて、考えただけで辛いからな。」

フィニカさんにとって、フォルカはかけがえのない存在だと感じました。

・・・フォルカは、こんなに優しいお兄さんがいて幸せ者ですね・  
。

・・・私にもいるでしょうか？      あんな感じの優しいお兄さんが  
・・・。

・・・あつ、フィニカさんが立ち上がりました。

「・・・質問に答えてくれて感謝する、それに・・・お前と色々話  
せてよかったよ。」

そういうと、フィニカさんは扉の方に歩きだしました。

「あつ・・・待ってください、もう少しお話しませんか？」

フィニカさんは、止まってこちらを向きました。

「……俺はこれから仕事何だがなあ……。」

そういつて、フィニカさんは考え込んでしまいました。

何というか……考える時に頭に軽く手を置く動作が、フォルカとそっくりです……さすが兄弟。

「……よし、俺はこれから仕事があつて行けないから、後でそっちにドールを行かせよう。」

「ドールを……ですか？」

ドールはなんだか……私のことを嫌っているらしく、私を見るときはいつも恐い顔をしています。

「ああ、冷たいように見えるがいい奴だ……きつと退屈はしないと思つぞ。」

「・・・わかりました。」

私がそういうと、フィニカさんは「じゃあな。」といって部屋から出ていきました。

・・・話して見ると、とてもいいヒトに思えました。

少しだけ・・・ドールが羨ましいです。

数分後・・・コンコンとノックの音がしました。

「・・・どうぞ、鍵は開いていますよ。」

そういうと、ゆっくりと扉が開き、ドールが入って来ました。



「・・・失礼する。」

ドールはこちらに早足で来て、私の前に座りました。

「・・・でっ、話とはなんだ？」

「えっ・・・？」

「フィニカ様が言われたのだ、お前が私と話をしたがっているとな。」

ああ・・・何だか私がドールとお話しがしたいみたいなお感じになつてますね。

これは・・・フィニカさんが説明不足なのか、ドールの理解力が少々欠落しているのか・・・。

・・・ドールに聞かれたら多分消されますね、私・・・。

「いえ・・・ただ何もする事がないので、誰かとお話したいとフイニカさんに言ったら、貴方が来たのですよ・・・ドール。」

「そうか・・・フイニカ様に指名されたならやるしかあるまい・・・  
・さあ、話してやるから私に話題を振れ。」

「・・・はっ？」

「『・・・はっ？』じゃない、話題を振れと言っているんだ。さっさとしろ、話せんだろう。」

・・・私が振らないと駄目なんですか？

何というか・・・ドールは相手が話題を振らないと、喋らないタイプのようです。

よしっ・・・頑張つて話題を振ってみましょう。

まずは、エリアルから教わった『ベタな話題の振り』をやってみましょう。

「・・・今日はいい天気で・・・。」

「今日はどう見ても曇りだろう？窓があるのだからそのくらい確認しろ。」

えっ！？窓があるんですか？

・・・あっ、本当に部屋の真上にありました。

なぜ私は、あそこから差し込む朝日などに気付かなかったのでしょうか？

エリアルには悪いですけど・・・全然駄目です、これ・・・。

なら・・・次は好きな物の話を。

「あの・・・ドールは犬が好きですか？ 私は好きなのですが・・・」

「私は猫派だ・・・。」

これも失敗です・・・でもドールの好きなものはわかりました。

なので、猫の話をしてみましょう。

「猫・・・可愛いですよね。」

「ああ・・・特に水に濡れているときの姿は、可愛さの破壊力が違う。」

水に濡れた猫・・・可愛さポイントの一つであるホワホワな毛が、

水のせいでもかわいそうなくらいホワホワ感が損なわれ・・・どちらかというところろしく見える姿です。

・・・ドールは変わっています、かなり・・・。

「……………」

「……………」

いけません、完全に会話が途切れてしまいました。

「……………」

あっ、ドールが少し表情を変えました。

・・・うわぁ、あの顔は絶対に怒ってます。

早く話題を振らないと・・・。

「あの・・・。」

「何だ・・・。」

多分、これを失敗すれば・・・チャンスはもうないでしょう。

なら・・・思い切って女の子が好むと言われている、『異性』の話  
をしてみましょう。

「・・・フィニカさんのこと、どう思いますか？」

「!?!?!?」

ドールが、また表情を変えました。

今度は・・・あれっ？頬がほんのり赤く染まり、目を見開いています。

これは・・・ぞくにいう『恥ずかしい』というやつでしょうか？

「なっ・・・なぜそこでフィニカ様の話になるんだ！？猫の話をしていただろう、猫のおお！！」

若干声がうわずっています・・・それに、必死に話を反らそうとしています。

なら、少し言い方を変えましょう。

「ドールは、フィニカさんのことが好きですか？」

「なあっ！！！？」

あっ……今の声、ドールから出たとは思えないくらい可愛らしい声です。

「おっ、お前は何故そのような事が普通に聞けるのだ！？」

「何でって言われましても……気になったから聞きたいんですけど。」

「~~~~~ッ！！！」

ドールの顔が、完熟トマトの様に赤いです。



そんなに言いにくい事なのでしょうが？

。マスターを好くのは、クロムとして当たり前だと思つのですが……

「……フィニカさんのこと、嫌いなのですか？」

「そんな事ない！！フィニカ様を嫌う理由なぞ、あるわけがない！  
！！」

「なら……好きなんですか？」

「……」

ドールが黙り込みました。

これは……私の勝利と考えて良いのでしょうか。

でしたら・・・

「どついつところが好きなんですか？」

もっと、知りたいです。

ドールは、はぁっ・・・とため息をつきました。

「話せばいいのだろう、話せば・・・。」

ついにドールが、観念しました。

これが、完全勝利というやつですね！

「・・・フィニカ様はお強くて、賢くて、優しいお方だ・・・。」

「はい……私もそう思います。」

強いのは……実際に戦っているのだからわかりますし、この施設に勤めているヒトは皆がエリートだと聞いているので、賢いというのもわかります。

それに優しいというのも、先程色々と話したのでわかります。

ですが……なんとなく寂しそうな顔を、時折していました。

「……フィニカさんは最近、何か嫌なことがあったのですか？」

きつと、何か理由があるはずですよ。

「嫌なこと？……ああ、あったな。」

「それは一体？」

フィニカさんを苦しめる、悪いもの……一体なんでしょうか？

「……フィニカ様を苦しめているのは、フィニカ様のただひとりの弟……フォルカ・テールだ。」

「えっ……。」

フォルカが……フィニカさんを！？

「……お前は気絶していて知らなかっただろうが、お前たちとの戦闘中にフォルカはフィニカ様に殴りかかり、拒絶した。その言葉が、フィニカ様の深い傷となっているのだ。」

「・・・・・・・・。」

その話に、私は口を開けませんでした。

第20話 僕の兄に愛を込めて

「・・・ぜえ、・・・ぜえ。」

出だしていきなり、息切れしててすいません。

でも・・・本当につらいんです、死にそうなんです。

「・・・大丈夫？フォルカ。」

「大・・・丈夫・・・だよ・・・エリ・・・ア・・・ル。」

「そんな消えかけた声で言われても、説得力がないわよ。」

でも・・・、エアールの言葉で少し元気がでて・・・。

「どうしたボウズツ！その程度で疲れたとか言うんじゃないやねえだろうな！？」

「体力なさすぎだよ！フォルカお兄ちゃんツ！！」

・・・身体中の活力が削ぎとられた。

何である二人は、あんなに元気なんだ。

理由はとても単純、彼らの荷物を僕一人が持たされているからだ。

「ぜえ・・・なんで・・・僕だけ・・・。」

「知らないのフォルカお兄ちゃん？男の人は常に『じえんとるまん』じゃないといけないんだよ、『じえんとるまん』は『れでいーふあ』

「すつと」を心がけてるから、女の子に重い物をもたせちゃいけないんだよ。」

「……レディファーストって……女の人に順番を先に譲るとか……そんなんじゃないっけ？……それに……ウエルトさんは……女性じゃないし……。」

ウエルトは、フォルカに指を差し、こういった。

「俺はっ、穰ちゃんらの荷物を持つと思った！だがなっ、ボウズの……インドア系もやしっ子ボデイを見てたら『俺がアウトドア系信者ボデイに鍛え、救済せねば』という神としての使命感が芽生えてしまった！なのでっ！今からボウズに体力をつけ、ボウズが倒れて今日一日（別名・第20話）が終わるなんていうベタなオチを回避する！ありきたりな一日の終わり（第20話の終わり）なんて神である俺に相応しくない、絶対にそんな事させるかあ！！」

「……なんか目的がずれてるような……。」

「うるせえボウズッ！！細けえこと気にしてたらハゲるぞっ！！」



「ええっ!?!」

フォルカは、咄嗟に頭を両手で押さえる。

その反応を見て、ウエルトは腹を抱えて笑った。

「あゝっははははあ!?!」

「ひっ……ひどい。」

「……フォルカ、あんたさあ……本っ当フィニカさんだっけ?・  
・あの人と真逆って感じね。」

「エッ……エリアル、兄さんの事は……。」

フォルカの顔には、焦りが満ちあふれていた。

次の瞬間、フォルカはこちらにフォルカなりの全力疾走で走ってきた。

そして、小声でエリアルに言った。

「どうしてここで兄さんが出てくるんだよ!?!?・・・絶対にあの二人にいじられるよ・・・。」

「あっ・・・じゅめん。」

エリアルは謝った・・・けど刻すでおそし!!

ウェルトとユニィの方を見ると、スツゴク気持ち悪く・・・何と違うか、まわりつくような視線でにやけ顔の二人がいた。

「フィニカってえ〜・・・確かフォルカお兄ちゃんのお兄さんの名前だよねえ〜。」

「ほお〜・・・ボウズには兄貴がいたのかあ〜、さぞかしボウズに似ていじりが・・・鍛えがいがあるんだろうなあ〜・・・。」

今、『いじりがいがある』っていいかけたよあの人！

「私イ・・・超気になるなあ〜、フォルカお兄ちゃんのお兄さんの事。」

「詳しく教えてもらおうか、ボウズウ〜。」

うづうづ・・・いつもよりも優しい口調なのに、いつもよりも怖いよ・・・。

「どうしたボウズ？早くお前の兄貴の事を教えろよ・・・。」

「教えてくれないなら・・・フッフ。」

笑って誤魔化したけど、あれに入る単語は、きっと僕を恐怖のどん底にたたき落とせるような単語に違いない。

・・・仕方ない、詳しくは無理だけど・・・あやふやにでも兄さんをイメージできるくらいアバウトな情報を教えよう。

「・・・えっと・・・賢くて、運動神経抜群で、とっても優しい兄さんだよ。」

「ありきたりで面白くない。」

「外見の情報をよこせ。」

「うわっ！？急に口調が冷たくなった!？」

・・・外見なら、伝えやすい言い方が・・・。

外見は、僕を大人びさせて、明るく強気にした感じですよ・・・。」

「何だよそれっ！兄弟そろって同じ様な面してんのか！？なんて面白みに欠ける兄弟なんだ！！」

「ちょっとウェルトさん、兄さんの悪口(?)を言わないで下さい！！」

「面白みに欠ける上、弟の方はブラコンかよ！？なんつうか・・・兄貴も大変だなあ。」

「兄さんを同情するような言い方しないでください！僕、何も悪い事してませんし・・・。」

ウェルトさんを相手にすると、後の疲労感が半端ないから・・・出来るだけ話をそらしたい。

「フッフフウ~~~~ン、ララルル~~~~ラァッ！」

急に、とてつもなくありきたりな鼻歌が聞こえきた。

鼻歌の主は、何とも楽しそうにお絵かきをしているユニイだった。

「~~~~つと、よしっ出来たあ〜！」

ユニイが掲げた絵は、珍しく青色のほかに、黒色と赤色と紫色の、合計四色で描かれていた。

何を描いたかというと……。

「……ユニイ。」

「なあ〜〜に？フォルカお兄ちゃん。」

「この・・・いかにもゲームとかでは魔王クラスはある、槍を持った上半身裸のムキムキな人はいつたい・・・？」

「それはねえ〜、フォルカお兄ちゃんのお兄さんだよ〜！」

・・・これが兄さんっ!？

確かに槍は持つてるけど・・・ユニイが描いた兄さん(?)は、槍なんかなくても相手をひねり潰しそうなくらい過剰な筋肉がリアルに描かれている。

「いつ・・・いつたいどう考えたらこんな恐ろしい事になるんだよ  
」!

「だってえ〜、フォルカお兄ちゃんの真逆って感じ何でしょ〜？」

「あくまで性格が逆なだけだよっ！ 見た目は僕を大人びさせた感じって言っただろう!？」

「ふう〜〜〜!！」

ユニイが、ほっぺたを膨らませ、明らかな不満を訴えてきた。

その時、ヒョイツとエリアルがユニイの絵を取った。

「ふう〜〜ん・・・これがフィニカさんか・・・、似てんじゃないの?」

「本当っ!?! エリアルお姉ちゃん!！」

「ちょっとエリアルッ!?! コレのどこが兄さん何だよ!?!」



「いやあ、正直言うとフィニカさんの事さ……はっきり覚えてないんだよねえ。全身にモザイクがかかっているというか……」

「モツ、モザイク!?!」

なんてことだ……二人の相手がただでさえ大変なのに、エリアルまでボケ(?)に回ってしまうなんて……。

「……ユニイ。」

「んっ?なに、フォルカお兄ちゃん。」

せめて、イラストを描くユニイには……兄さんの外見をきちんと理解してもらおう。

「兄さんはね、黒い服はそんなに着ないんだ……それに、兄さんは私服の上に白い……。」

「白い・・・バスローブ!？」

「バツ・・・バスローブ!？」

どういう発想をしてるんだこの子はあ！

私服の上に、バスローブ!? 兄さんは変態かつ!？

「ほお〜、ボウズの兄貴はバスローブを着て、槍をぶん回すような奴か・・・こりゃ一筋縄じゃあいきそうにないな。」

「えっ!?!? ちよっ・・・バスローブは決定事項何ですかウエルトさん!？」

そんな兄さん、僕も嫌だ!

「なんか燃えてきたぜ・・・この調子でボウズの兄貴を完成に近づけるぞ!!」

「おお~~~~!!」

「あつ、私は聞いとくだけでいいわ。あんたたちの発想にはついていけそうにないし・・・。」

「やつ・・・やめてえ〜!兄さんを汚さないでえ〜!!」

「.....」

どれくらい時間が過ぎただろうか……。

未だに三人（しゃべっているのは二人）は、兄さんの捏造に励んでいた。

あれから、『食事の時に槍は手放さない』とか、『風呂の時にバスローブを着たまま入浴』など、兄さん（彼らの想像内での）がどんどん変態の道をかけのぼって行ってる。

……僕が、止めないとっ!!

エリアルは、いつの間にか寝ちゃったし……もうあの二人を止めるのは、僕だけだ!

……そりゃ、あの二人は反則級に強い（ウエルトさんが圧倒的に）けど……大切な兄弟が変態にされてしまったんだから、一発はやってやらないと!!

(・・・力を貸して、兄さんっ!!)

心の中で、兄さんに力を借りた。

そっだよ、いくら強いつていつてもしょせんは生身・・・僕と(実力以外は多分)かわりないから、勝てないと決まった訳ではない。

僕は今、二人の後ろにいる。

先制攻撃を仕掛けるには、もってこいのシチュエーションだ。

・・・行きますっ!!

僕は、無我夢中に二人のいるほうに走った。

二人は話に夢中で、僕の存在を認知してない。

・・・普段、影が薄いからかな？　なんか悲しい。

でも今は、そんな事関係ない。

あのウエルトさんにも、僕の存在を認知されていないんだから。

僕は、懐から素器を取り出し、スイッチを入れて展開。

昔、兄さんが木の棒を使って使用していた技・・・今なら使える気がする。

ウエルトさんが、僕の存在に気付いたらしく、振り返る。

しかし、僕はもうウエルトさんを素器でとらえられる距離にいた。

・・・兄さんをバカにした事を後悔しろ、食らえっ兄弟の絆パワー  
！！

「うおりゃああっ！絆奥義っ！！」峰打ち「！！」

「なあっ！！？」

そういつて振りかぶった素器は、なんとウエルトさんの腹部にピツトした。

ウエルトさんが倒れる。

「えっ！？ウエルト兄ちゃん！！こっちに倒れてこない・・・ふみゆっ！！！」

ユニィは、倒れたウェルトさんの下敷きにされた。

「やった……やった、僕にも出来たんだっ……！」

僕は嬉しくて、つい叫んでしまった。

だって……あのウェルトさんとユニィを倒せたんだもの、嬉しいに決まっている。

231

「フォ……フォルカ、それ……。」

「……んっ？」

僕は、エアリアルが指を差しているのを不思議に思った。



「ぶじだったの？・Hリアル。」

「うっ……後ろ。」

「後ろ？……！！」

後ろを見ると、徐々に体を起こして、立ち上がるようにしているウエルトさんがいた。

「ひっ！？」

「ボオ……ウズウ……。」

めしつらう、ヤムコキコキめ。

今、ウェルトさんの目には優しさが微塵も存在していない。

「不意討ちたあやってくれるじゃねえか、少しは見直した・・・だがな、俺を気絶させられなかったのがためえの敗因だボウズウ!!」

ウェルトさんの右手に、白光が収束する・・・ヤバイッ!!

「さあ特訓だボウズ・・・内容はとってもシンプルに、俺の攻撃をひたすら避け続けてもらおうかつ!!」

「えっ!?!?そんな・・・急に言われてもっ!!」

「問答無用っ!!喋る余裕があるなら手足を動かせっ、いくぞっ!!」

そういつと、白光の光線をこちらに射出してきた。



「大丈夫ですか？フィニカ様。」

「ああ・・・だが、なぜ今日はこんなにもくしゃみが出るんだ？」

「風邪を引かれたか、何者かがフィニカ様の噂をしているのでは？」

寒気はしない・・・それに体も全くダルくない、風邪ではないから・・・ドールの言う通り、誰かが俺の噂をしているのだろうか？

235

「風邪だといけませんので、今日は温かくしましょう。何か羽織れそうなものを探して来ます。」

そういうと、ドールは部屋から出ていった。

・・・他人はドールは冷酷だというが、そこいらのクロムよりも気のきく、良い奴だと思っただがな。

ただ、彼女は戦闘向けのクロムだからな・・・家事などは少し苦手らしい。

でも、俺が教えてやったらすぐに覚える素直さがあるから、あいつはきつと・・・いやっ、絶対にいいクロムになる。

「・・・フィニカ様。」

「んっ、早かったな。」

彼女は、早足でこちらに来て、手に持っていたものを差し出してきた。

俺はそれを受け取り、ひろげる。

とてもきれいで、汚れ一つない、真っ白な……

「……バスローブ？」

「……すみません、羽織れそうなのはそれしかありませんでした。」

ドールがわざとこんなことをするわけがない……きっと、皆が揃いに揃って寒がりなんだろう。

俺は、ドールの善意に答えるために、今日一日バスローブを身につけて仕事をした。

第20話 僕の兄に愛を込めて (後書き)

書き始めて、早4ヶ月が経ちました。

小説の方も、二十話にいきました。

これからも、自分のペースで書き続けていきますので、読んでいただけたら嬉しい限りです。

読んでいただき、ありがとうございます。

## 第21話〜Reality〜

あたし、エリアル・ライシエス！！

父さんが連れてきたクロム『クラス』と一緒に、クラスを連れて行くこうとするクロム『ドール』から、毎日逃げる日々を送っていたの。

そして・・・まあいろいろあつて『フォルカ』って言うなんか頼りない男の子と、『ユニイ』って言うお絵描き好きなアルフィと、『ウエルト』って言うムチャクチャ強いけどバカっていうか・・・質が悪いというか・・・。

・・・と、まあこんな人たちと一緒に、さらわれたクラスを助け出す旅をしてるの！！

・・・んっ？



何で今さら自己紹介してるのかって？

それはね・・・

私が一応この話のヒロイン(?)なのにつ！全ツ然目立ってないのよっ！！

どっちかと言うとクラスの方がヒロインっぽいけど、私がヒロインなのっ！！本当だっつてっ！！

だから、私という存在を改めて紹介することによって、注目されようってわけ！！

だってさあ〜・・・フォルカよりも存在感がなくなったら、私・・・絶対立ち直れないよ・・・。

「……………はっ!？」

エリアルは、閉じていた目を見開き、体を勢いよく起こした。

「……………今の、夢?……………にしてはスツゴク現実味があっただけど……………」

241

乱れた呼吸を正しながら、寝ていたテントの中を見回した。

フォルカはまだスヤスヤと寝ているが、ユニィとウェルトの姿が見当たらなかった。

「……………?」



「あっ、エリアルお姉ちゃんは起きてたんだっ！なら早く外に出てねえ〜。ウェルト兄ちゃんがさっ、朝食作ってくれてたよ〜！！」

「えっ……ウェルトが朝食を？」

「うんっ！待たせると絶対怒るから先に行つてて！私はフォルカお兄ちゃんを起こしてすぐ行くから〜。」

「わかった、じゃあ後でねユニイ。」

エリアルは、テントに二人を残し、ウェルトの元へ向かった。

少しして、フォルカの悲鳴が聞こえてきたが、聞こえてないフリをしてその場から離れた。

「はいつてめえらっ!!手え合わせてええ・・・いただきますあ〜」  
「す!~!」

「いただきますあ〜す!~!」

「いつ・・・いただきます。」

「・・・グズツ、いた・・・だきま・・・す。」

テンションが低い二人を差し置いて、テンション最高潮のユニィとウェルトは、朝食を口いっぱいにはおぼっていた。

エリアルも朝食を口に運ぶ。

(ああ・・・このカツオだしの豊かな風味、この麺の歯ごたえとど越し、おいしい〜・・・って。)

「何で朝から天ぷらそばすすってんのよ〜っ!?!」

エリアルの絶叫に、三人は箸を止める。

「ど・ど・ど・どうしたのっ、エリアルお姉ちゃん!?!この天ぷらそばおいしいのに・・・。」

「確かにおいしいわよっ!?!絶品よっ!?!だけどねっ、朝から天ぷらそばなんて胃がもたれるわよっ!?!」

「胃がもたれるって、どんだけデリケートで繊細な胃してるんだエリアル穰ちゃん!?!」

「あんたらの胃が頑丈過ぎるだけよっ!?!あとっウエルト!?!ずっど突っ込もうと思っただけっ、穰ちゃんの『穰』の字が間違ってるわよっ!?!正しくは『嬢』よっ!?!わかった!?!」

エリアルの的確な突っ込みに、ウェルトは言葉を詰まらせる。

「ほらっ、フォルカも言っただけなさいよっ！！」

エリアルは、フォルカの肩を強めに叩く。

しかし……

「……食事の時くらい、静かに食べようよ……エリアル。」

「うわっ！？テンション低っ！！？」

フォルカの予想を上回るテンションの低さに、エリアルが驚いた。

「低くもなるさ……朝、いきなりユニイの勢いがある頭突きで起こされるし、ここ最近エリアルまでボケに回って突っ込む量が増え

るし……。」

フォルカから、次々とネガティブ思想が溢れだし、こちらまで呑まれそうになる。

(……どうにか話を変えなきゃ!!)

「えっと……そうだった！今日はどうするの、ウエルトオ？」

エリアルはわざとらしく、ウエルトに聞いてみた。

「今日はここにどどまるっ！ボウズとエリアル嬢ちゃんには、そろそろ戦闘慣れしてもらわんといけないからなあっ！！」

「。じ……。」



フォルカのテンションが、更に下がる。

・・・余計なことをっ！！

「・・・嫌ならやんなくてもいいんだぜボウズ？俺は神ゴッドであり鬼デーモンじゃねえ・・・。まあ・・・やらないんなら今と変わらんだけで俺には全くと言い切れるほど被害はないからなあ！！」

そういつてウエルトは、勢いよく指をさしてきた。

「そっ・・・そんなのは嫌ですっ！僕を強くして下さい、ウエルトさんっ！」

「よしっ！よく言ったボウズ！！それでこそ男だっ！！」

そういつてウエルトが、フォルカの背中を強く押す。

フォルカは、「痛いです。」と言いながらも顔に笑顔を作っていた。

(男って・・・こういうノリが好きなのかしら?)

「・・・っということ、ボウズとエリアル嬢ちゃんっ！頼んだぜっ！..!」

「期待してるよぉ〜..!」

そっいつてウエルトとユニィは、親指を立てて笑顔を作る。

「やったぜユニィ嬢ちゃん、今日はご馳走の可能性大だぞっ..!」

「うわぁ〜いつ!〜お肉っ!お肉っ!」

「……………」

なぜ二人がこんなにも喜び、フォルカとエリアルが黙り込んでいるのか？

……理由は簡単、『戦闘訓練』も兼ねて『お昼ご飯の調達』をすることが、初めての特訓内容になってしまったのだ。

「食える食えないは俺が見てやつから、適当に狩ってこいっ!〜!」

「大漁を願ってるよぉ〜!〜!」

二人は、嫌なくらい笑顔で手を振って、こちらを送り出してくれた。

フォルカとエリアルは、  
ため息混じりに歩き出した。

## 第21話〜Reader〜（後書き）

間が空いてしまって、すいませんでした。

言い訳をするなら、エリアルちゃんをメインに話を書いたのですが・  
・まあネタが浮かばないことっ！

・・・・クラスよりは、考えやすいと思ってたんですけど・・・今ま  
ででー・二を争うくらいアイデアが浮かびませんでした。

しかも、続きます。

本当、計画性がなくて申し訳ないです。

## 第22話〜現実〜

「・・・ふう。」

「これで・・・二匹目ね・・・。」

二人は思いのほかスムーズに、魔物（とはいっても見るからに弱そうな奴）を二匹狩ったところだった。

253

「思っていたより楽ね、ここの魔物を狩るの。」

「うんっ、でも油断は出来ないよ。」

「そーね・・・ところでさっ、肉ばっかじゃ体に悪いと思わない？  
野菜的なものも必要よね？」

「まあ……そうだよな。」

「でしょ！？そうと決まればさっそく採りに行きましょっ！ここにくる途中に食べられそうなのを見つけたのよねえ〜！」

そういうと、エリアルは来た道を走って帰り出した。

「あっ！？ちょっとエリアルッ！！この魔物たち、どうするのさ！？」

フォルカはエリアルを引き止めようとしたが、既にエリアルの姿は見えなかった。

「……持って帰らないと、あの二人……怒るよね。」

目からあふれそうになった涙を拭い、フォルカは倒した魔物たちの方へ歩きだした。

「えつとく・・・確かこのあたりにあつたとおもつただけだなあ  
く。」

エリアルは辺りを見回し、行きに見つけた『食べられそうな植物』  
を探す。

「おつかしいなあ・・・確かに見たんだけどなあ・・・あ  
っ！」

エリアルが目に見る、地面から少しはみ出ている、朱色の根・・・。

そう、エリアルが見つけた植物とは『ニンジン』だった。

「良かった、私の見間違えじゃなかったあ・・・んっ？」

エアリアルが目には、ニンジンとは違う、奇妙な物体が目的物の隣にあ



ることに気付いた。

白くて、何だかふさふさしてそうで……。

(……何、あの毛玉(？)(？)。(？)(？)。

次の瞬間、毛玉(？)(？)の形が変わる。

まるっこい形をしているのは変わりないが、誰もが見たことのある真っ白く立った耳と、口元から覗く二本の歯が、エリアル頭の生物を連想させた。

(……ウサギ？)

エアリアル思った通り、確かにあの生物はウサギの外見をしている。

しかし、ウサギと呼ぶにも何かが違った。

なにせ……あんなにも凶体が大きく（軽くエアリアルは二倍はあるように見える）、チャームポイントの前歯は完全に獲物を刺す凶器に変わっている。

これに、『キヤアッ、可愛い!!』と言って抱きつこうものなら、  
確実に殺られる。

(私って・・・ムチャクチャついてない。)

自分の運のなさを恨みつつも、エリアルはゆっくりと後方に逃げよ  
うと後退る。

すると、足元から・・・

- - - - パキッ。

「っ!!!?!」

足元から、乾いた音がした。

足元に目線を落とす。

・・・木の枝が折れていた。

(なっ、なんてベタなっ!)

次の瞬間、ウサギの方から言葉では表しきれないような雄叫びが聞こえた。

・・・こちらの存在が、完全にはれてしまったのだ。

「・・・やるしかないって訳ね。」

エリアルは、短パンのポケットから自分の素器を取り出し、展開した。

(大丈夫よ・・・さっきだって魔物を倒せたんだから・・・。)

エリアルは素器を構え、ウサギの方へ意識を集中させる。

ウサギは、こちらに向かって来ているようだが、動きは決して速くはない。

むしろ、遅いくらいだ。

(これくらいの移動速度なら・・・。)

「私一人でもやれるっ!」

そういつてエリアルは、ウサギの正面へ走った。

自ら自分の方に向かってくるエリアルは、いわばウサギの格好の的である。

好機と言わんばかりに、ウサギは前歯の狙いを定める。

そして、ウサギは前歯をエリアルに向かって振り下ろした。

エリアルは、待っていたと言わんばかりに笑みを浮かべ、前歯をすれすれで回避。

ウサギは突然のエリアルの回避行動に、バランスを崩して前方に倒れる。

エリアルはすぐさまブレーキをかけ、ウサギの方へ再び走った。

・・・今度はあいつを、ウサギを仕留めるために。

「どりゃあぁあっ！...！」

エリアルは、素器をウサギの腹部に突き刺し、力をおもいつきり込めて右側に切り払った。

ウサギから、断末魔が聞こえる。

「……っはあ……はあ。」

エリアルは、荒くなっていた呼吸を整える。

「なっ……なんだ、私も……強くなってるじゃない。」

ウサギの方を見る。

……動かない。

「……ふう。」

エリアルはホツとして、展開していた素器をしまつ。

……その刹那つ。

” ヴァギャジャアアアツ！！”

「っ！！！！？」

突如ウサギが動きだし、体を起こし、ウサギ特有の脚力で巨体を宙に浮かせた。

「なっ！？」

エリアルが気付いた時には、すでにウサギの体は落下を始めていた。

ウサギの体が地に落下した時、地震に似た強い振動が起きた。

「きゃっ！！？」

その振動に、エアリアルのは、先ほどのウサギとまでは行かないが宙に浮いた。

地面に右肩から落下し、強打する。

「っ！！！！」

エリアルは、痛みを顔をしかめた。

しかし、そんな事はお構い無しにウサギがエリアルの方に前歯を向ける。

「くっ……そ、まだ……動けたなんて……。」

エリアルはそういつて立ち上がろうと両腕に力を入れるが、右肩の痛みが思うように力を入れさせてくれない。

ウサギの前歯が、こちらに振り下ろされた。

回避は……間に合わない。

エリアルは、目を瞑る。

そして思う、『せめて痛くないように』と。

……その時。

「エリアル……ルッ……！」

フォルカの声が聞こえた。

(フォルカ・・・逃げて、私達じゃこいつは倒せない・・・。)

- - - キイイインッ!

エアルの耳に、何かがぶつかり合う音が聞こえた。

「・・・?」

エアリアルは目を開ける。

目の前に写ったのは・・・

「・・・フォルカ。」

「だっ、大丈夫?エアリアル。」

自分の素器で、ウサギの前歯を防いでいるフォルカの姿があった。

「このおおおっ!!--」



フォルカは、素器を振り上げて前歯ごとウサギを押し返す。

ウサギは、バランスを崩し頭から倒れる。

「エリアルには・・・指一本触れさせないっ！！」

・・・なんだろう、フォルカが主人公らしく見える。

そんな事を思っていたら、フォルカの素器が、白く光出した。

・・・フォルカの気持ちを感じ取ったかのように。

「うおおおっ！！」

フォルカが、光出した素器を構え、ウサギの方へ走る。

「くらえっ、「こうじんしよつ光刃衝！！」

光る素器を、ウサギの胸部に突き立てる。

そしてその突き立てた素器が放っていた光が、炸裂してウサギから

奇声が上がる。

ウサギは倒れ、今度こそピクリとも動かなくなった。

「・・・ふう、大丈夫？ エリアル。」

「えっ・・・うん・・・フォルカ、今のって何？」

「それが・・・よくわからないんだ、ただエリアルを守りたいって思ったら・・・素器が急に光出して、今の技の名前ややり方が浮かんできたんだ。」

「・・・そう。」

エリアルは、短く答えた。

そしてそのまま、自分の中に思いを張り巡らした。

（フォルカ・・・一緒に旅をし始めた時には剣を一苦勞だったのに、もう追い抜かれたの？ そんな・・・。）

クラスと二人でいたときには、はっきり言ってクラスに頼りきりだった。

だから、フォルカと一緒に旅をしたいって言った時には、叩いちゃったけど嬉しかった。

フォルカには悪いけど、自分より頼りない人が来たから・・・ずっと上でいたかったんだ。

でも・・・追い抜かれてしまった。

また、自分を甘やかしてしまった。

「・・・エリアル？」

「・・・えっ!？」

「大丈夫?くらい顔してるけど・・・。」

「・・・大丈夫、・・・ねえフォルカ。」

「なに?エリアル。」

私・・・もう自分を甘やかさない様に頑張るよ。

もうあんたを追い越す事は出来ないかもしれないけど・・・頑張つてあんたと肩を並べて戦える様になるから。

だから・・・

「負けないからねっ！」

「？・・・何に？」

「フフツ、ほら早く！ウエルトたちが待ってるっ！」

そういつてエリアルは、フォルカの倒したウサギの方へ走った。

・・・今日一番の笑顔を浮かべて。

クラスは黙って床に座っていた。

最近は、フィニカとドールが頻繁に会いに来てくれるので、退屈はしていないからだ。

「……そろそろ二人のどちらかが来る時間ですね……。」

「今日はどちらでしょうか?」と呟きながら、ずっと待っている。

しばらくして、コンコンツとノックする音が聞こえた。

「どうぞ……。」

ゆっくりと扉が開く。

入って来たのは……。

「久しぶり、クラス。」

「あっ……ナイト。」

「覚えてくれてて嬉しいよ。」

クラスと同じ、スティアセイヴを持たないクロム・『ナイト』だった。

「元氣そうで何よりだよ……。」

「ナイトこそ、最近見なかったの……元氣そうで何よりです。」

「ずいっと会いに行きたかったんだけど、仕事が忙しくってね……。」

そういつて、ナイトが少しはにかむ。

「……寂しくなかった？」

「大丈夫でしたよ、フィニカさんとドールが来てくれましたし……。」

「フィニカとドールが？」

ナイトが急に、クラスの肩を掴み、こういった。

「いいかいクラス、彼らに心を奪われてはダメだ。」

「えっ?・・・どういことですか?」

「彼らは君を・・・殺そうとしているんだ。」

「私を・・・殺す?」

フィニカの楽しそうに話す姿も、ドールが最近見せてくれるようになった微笑みも・・・私を殺すための嘘?

クラスは、しばらく何も喋れなかった。

第23話 檻の外へ羽ばたく者、とどまる者

私は・・・一人で部屋の隅に座っている。

ここは檻・・・閉じこめられてはいるけれど、言い方をかえれば危ない物から私を守ってくれる『盾』となる。

ここにいれば安全・・・そう思っていた。

・・・つい最近までは。

昨日、ナイトが二人の・・・フィニカとドールの『よからぬ考え』を教えてくれた。

『二人は君を・・・殺そうとしているんだ。』

話が本当なら二人は・・・。

ナイトが来てから、誰も会いに来なくなった。



・・・このまま、誰も来なければいい。

少女・・・クラスは、心にそう思った。

話を聞いてから、二日経った夜。

何も変わらない壁を、クラスはぼーっと見つめていた。

「・・・・・・・・。」

ただ時間だけが過ぎていく。

目線を扉を方へ向ける。

扉は、全く開く気配がない。

「・・・・・・・・。」

今日がやっと終わる。

そう思った時……。

……コッコッ。

廊下から、二人分の足音が聞こえた。

「……………」

恐る恐る耳を傾けると、足音がどんどん近づいてくるのがわかる。

(……………どうか、通り過ぎて下さい。)

クラスは強く願った。

しかし、近づいてくる足音は、自身の部屋の前でピタッと止まった。

ノックを二・三回してきたが、彼女は返事を返さずに就寝を装った。

だが、相手側はクラスが起きていようが寝ていようが関係ないらしく、返事がないとわかれば、ドアノブを回し、扉を開けてきた。

入って来た二人のうち、片方の男性が、

「……起きているんだろう、クラス。」

と言ってきた。

クラスは、ゆっくりと振り向き相手側の顔を確認した。

「フィニカさん、ドール……。」

二人は、思っていた通りの『今一番会いたくない』二人だった。

「……二日ぶりだな、元気にしていたか？」

ドールが、珍しく話を振ってくる。

……けれど、返事はしない。

「……どうした？」

「……別に、お二人こそこんな夜中に何の用ですか？」

素っ気なく答え、質問で返した。

「いや……少し聞きたい事があったな。」

フィニカが、短く答えた。

「手早く済ませたいから、さっそく聞か……いいか？」

彼は、二日前と変わらない優しい声と、暖かな笑顔で話しかけてきた。

「……この笑顔をしている人が、私を殺そうとしている人なんて……信じられないくらいなの、笑顔で……。」

「では一つ目の質問、これは今感じたことなんだが……。」

彼の優しい目付きが、急激にどことなく寂しさを秘めたものになった。

「なぜ俺達に殺気をだす？もうお前に危害を加えない事はわかってもらえたと思っただが。」

「・・・敵であることに変わりはありません。」

その言葉に、一瞬間が空く。

そしてすぐ・・・

「そうか・・・、では次の質問だ。」

と言った。

気のせいかも知れないが、彼が少し寂しそうに見えた。

「・・・お前は、ここから外に出たいか？」

「えっ・・・。」

クラスは、驚きが隠せなかった。

自分をここに連れて来た人が、ここから出たいかと言ってきたからだ。

「……出られるなら外に出たいですが、ここの警備は極めて難しいものですし……。」

「はつきりと言ってもらいたい……外に出たいのか、出たくないのか？」

……本音を言うと、外に出たい。

フォルカやエアリアルに……会いたい。

「外に……出たいです、しかし……ナイトのことも心配ですし……。」

ナイト……自分のことを気に掛けてくれるクロム。

彼は、いつもこちらに笑いかけてくれていた。

そんな彼を置いて……行けるわけがない。

「……。」

ドールが、クラスの目の前まで近づいてきた。

そして、ゆっくりと口を開き、思いもよらない一言を言った。

「そのナイトが先日……フォルカとエリアルを襲った。正確には、二人と仲間のアルフィと僧侶をだ。」

「!!!」

彼が……二人を、襲った!?

「そんな……。」

「信じられないのなら……これを見る。」

そういつてドールが、一枚の紙を取り出した。

「それは……奴の事を極秘に調べた時に、奴の部屋から見つけた

物だ。」

紙を受け取り、見てみる。

そこには、『ナイト・任務内容』と書いてあった。

さらに目を通して見ると、思わず息をのむ内容が記されていた。

『クロム研究施設長より、私のクロム・ナイトに任務を与える。私達の最重要機密・クラスと関わったものを全て排除せよ。』

「最重要機密……私が……。」

クラスはわからなくなってしまった。

何が真実で、何が嘘なのかが。

そして……自分が何者なのかが……。

「クラス……。」

フィニカの優しい声が聞こえる。



「……信じられないかも知れないが、そこに書かれている事は事実だ。」

「……………」

「事実だからこそ、お前をここに置いておくわけにはいかないんだ。だから……………」

クラスの目の前に、手が差し出される。

そして、彼はこういった。

「俺達と一緒に外に出よう、クラス……………」

「私は……………」

フィニカの方を見る。

彼は手を差し出したまま、こちらの返事を待っていた。

私の返事は……………」

「私は……………」外に出たいです。 フォルカ達とまた一緒にいたい。」

檻の外を選んだ。

彼の手に、そつと自分の手を重ねる。

すると、フィニカの顔には優しい笑顔が浮かび、手を離さぬ様に握ってきた。

クラスも、それに答える様に握り返した。

彼は、ドールの方を向き、こういった。

「ドール、クラスに作戦を。」

「はい、フィニカ様。」

彼の方を見て頷くと、ドールはこちらを向いて作戦を話してくれた。

「私達は今から、物資の補給の際用いられるエレベーターを目指す。そこは外に直接つながっているから、脱出はそれほど困難ではないだろう。」

「わかりました。」

彼女の返事に、ドールも軽く頷いた。

「よしつ、二人とも行くぞ！」

三人は気配を消し、廊下を移動する。

その時・・・廊下に設置されていたランプが、クラスが通り過ぎた途端に赤い光を発し、大きな音が鳴り始めた。

「っ!？」

「しまった、クラスのバッチかつ！」

そういうと、彼は目にも止まらぬ速さで、ナイトが彼女に渡したバッチを取る。

しかし、時既に遅し。

後方から、いくつもの足音が聞こえてくる。

「フィニカ様、急いでこの場を離れましょう。」

「わかってる、急ぐぞっ!!」

「はいっ。」

三人は再びエレベーターのある方へ走りだした。

しばらく走り続けていると、十組近くの研究員とクロムが進行方向上に出てきた。

「反逆者めっ、ここは通さんっ!」

「……緑髪以外……排除する……。」

そういつて、十体程のクロムがこちらに猛スピードで突撃してきた。

「フンッ、ろくに戦闘もした事ないヒヨツ子どもが……。」

ドールが二人の前に出る。

彼女の両手には、既に『水素スティア』を収束させていた。

「私達を止められると思うなっ!」

左手の蒼光が強くなる。

左手を、接近してくるクロム達に突き出した。

「『アクア・ウォール水壁』！！」

クロム達の体を、壁の様な水が包み込む。

思うように体を動かせない彼らに対し、彼女の右手はまだ輝き続けている。

「フリーズ凍結』！！」

そう叫んだ瞬間、水だった壁が氷柱へと変化し、クロム達の自由を奪う。

「『ヒート昇華』！！」

氷柱が一瞬で高温になり、蒸発。

その際にあがった水蒸気から、クロム達の姿が確認出来た。

彼らの体の所々に、焼け焦げた後がある。

「なっ!?!」

研究員達の顔に、驚きの表情が浮かぶ。

「ドールは水素ステイアの扱いはエキスパートだ、お前達では勝てんぞ。」

「すいませんが・・・通らせていただきます。」

「!?!?!」

いつの間にか二人が自分たちの近くにいたことに動揺し、護身用に持っていたナイフ型の素器を取り出す。

しかし、すでに技の構えをとっていた二人を、止められるはずがなかった。

クラスの両足に紅光が収束する。

「いきますっ、『えんきやく炎脚』!?!」

地面に両手をつけ、逆立ちの様になったと思うと、両足を勢いよく回転させる。  
しかも足には炎素スティアが収束しているため、一瞬で足が炎に包まれる。

「はあああっ!!」

炎の灯る足で、二人の研究員を蹴り飛ばした。

廊下の壁に激突した二人の胸部には、はっきりと火傷が残った。

一方ファイニカは、三人の研究員を相手にしていた。

左右から来た研究員を、槍を横にし相手の動きを一瞬止めて、右斜め上方向に回転して二人をほぼ同時に切り裂いた。

「ドールツ!!」

「はい、水素スティア放射っ!!」

ドールから放たれた蒼光が、彼の槍に宿り輝き始める。

「なにっ!?!」

「これが素器の使い方だっ！！覚えておけっ！！」

持っていた槍を、自分の前で回転させる。

「水素スティアツ、展開！！」

フィニカがそういった時、回していた槍から水が出現。

その水が渦となり、研究員を飲み込む。

渦の中心のわずかな隙間、そこに何かが見えた。

見えたのは……。

「ぐわあああつ！！！！」

槍を手にした青年だった。

「『水龍槍・鷹』すいりゅうそう・たか。」「



フィニカが通り抜けたときに水が止み、研究員が床に落ちた。

（・・・すごいです。）

「どうしたクラス、ぼーっとフィニカ様を見て。」

「いえ、私にもあのような事が出来るのかと思ひまして・・・。」

「まあ出来るだろう、脱出したら私が教えてやる。」

「はい。」

二人は、フィニカがいる方へ走りだす。

早くここから脱出するために・・・。

「はあああっ！」

槍を横に振る。

新たに来た増援の最後の一人を、たった今仕留めた。

「ふう……ここまで数が多いと、さすがに辛いな。」

「フィニカさんはヒトですから、あまり無理をしないでくださいね。」

クラスがそういって、こちらに気を遣ってくれた。

「フィニカ様、ありがとうございました。」

ドールが、小さな扉を指差す。

扉の側にスイッチがあるので、エレベーターで間違いないだろう。

「急いで入ってくれ、増援が来てしまう。」

「はい。」

始めにクラス、次にドールがエレベーターの中に入る。

「さあ、フィニカ様も早く。」

振り返り、自分のマスターへ手を差し出す。

しかし、彼はこちらに背を向けて立っただままでいた。

「何をしているのですかっ!?!お急ぎ下さい、増援が来ますっ!?!」

「ドール、このエレベーターの操作法を覚えているか?」

「もちろんです、外側にあるスイッチを・・・っ!?!」

「そっという事だ・・・。」

彼はこちらを向かず、話し出した。

「このエレベーターは物資を運ぶ為のもの、普通ヒトやクロムが乗るものではないから・・・外側にしか操作出来るところがないんだ・・・だから。」

「フィニカ様を残して行きませんっ!私と共に・・・いえっ、私が残ります!ですから早くこちらにっ!?!」

彼女は叫び続ける。

少しして、彼はこちらを向く。

ドールは、彼が来てくれると思い、ホッとする。

しかし・・・

「増援が来たようだ・・・ドール、クラスを頼む。」

「っ!!!?!」

フィニカは開閉スイッチを押し、再び背を向ける。

エレベーターの扉が、閉まり始める。

「フィニカさんっ!!」

クラスの叫びも、彼には届かない。

そんななか、扉の僅かな隙間から何かが入って来た。

「これは・・・私のブレスレット。」

それと同時に、フィニカの声が聞こえてきた。

「それをとられてしまったら・・・お前を巻き込んでしまつからな。」

「……………」

「ドール、最後の命令だ……………」

彼が、顔だけこちらに向けた。

「自分の意志で…………生きるんだっ！」

彼の不器用な笑顔が見えたのと同時に、エレベーターの扉が閉まった。

「…………行ったか。」

多くの足音が近づいてくる。

「俺の体は…………どれくらいもってくれるか……………」

足音が止まる。

そこには数十体のクロムと、マスターが立っていた。

フィニカは、振り返り槍を構える。

そして、彼らを睨み付けてこういった。

「……こいつ、お前達の相手は俺だ!!」

エレベーターがどんどん下降していく。

そのエレベーターの中に、クラスとドールは立っていた。

「……フィニカさん、どうか無事でいて下さい……。」

「フィニカ様が助かる可能性は……ゼロにひとしい……。」

「えっ!?!」

彼女の一言に、驚きが隠せなかった。

「あれだけのクロム相手に、ヒトであるフィニカ様が勝てるわけがない。」

「……………」

しばらくの間、静寂に包まれた。

しばらくして、ドールが口を開く。

「フィニカ様は私に『自分の意志で行動し、生きる』と言ってくれた……だから私は自分の意志で、フィニカ様の分までお前を守り抜こう。」

「ドール……………」

エレベーターが止まる。

「クラス……私に捕まれ、扉が開いた瞬間一気に突き抜ける。」

「はい……………」

クラスは、彼女の左腕に捕まる。

ドールの足元には、すでに蒼光が収束していた。

エレベーターの扉が・・・開くっ！

「・・・今だっ！！」

突如、ドールの足元から一直線にヒト一人歩けるくらいの氷の道が出来る。

その上を、ドールとクラスは猛スピードで滑っていく。

「敵がいませんね。」

「外にはまだ、詳しい情報が流れていないらしいな・・・。」

二人はどんどん加速し、施設から離れていく。

彼が・・・フィニカが助かるという、僅かな希望を願いながら・・・。





第24話 くだいま、さよなら

「はあああっ！」

「どうしたボウズツ、もう限界かあ!？」

「まだまだあ!！」

修業をするため、この場に留まり三日が経った。

ウエルトの教え方が上手なので、フォル力は少しずつだが確実に戦い方を身につけていった。

「ほらっ、振りが遅せえぞっ! しっかりしろボウズツ!！」

「~~~~~っ!！」

「お前のためにこの神カミさんが神木（という名のそこいらに生えていた木）を徹夜で削ってやったんだからなあ!！」

「とは言っても・・・この木刀、ムチャクチャ重いし・・・これを削る音が気味悪くて、全然寝れてないし・・・。」

そういいながら、剣先がだんだん下がっていく。

「くおらボウズツ、剣先を下げるなっ！振れえ！振って両腕にガツチガチの筋肉を装着するんだっ！！」

「きっ・・・筋肉は装着するものじゃないで・・・。」

「真面目に突っ込むなっ！そんな暇があつたら振るんだボオオオウズツ！！」

「ひっ、ひいっ！！」

ウエルトの恐ろしいオーラに、ビビりながらも剣を振り続けた。

「・・・よし、私達も始めましょユニイ。」

「はあく〜いつ！！」

ユニイが術式を展開して、スティアを変換し始める。

すると、体の周りに紅光が集まり、輝きを増す。

ユニイは両手に子供が『カウボーイごっこ』をする時などに使う、指鉄砲をつくる。

「いつくよお〜！『ユニイ・カノン』！！」

紅光が指に集まり、先端から弾丸サイズの火球を連続発射する。

威力と弾速は、あくまでも修業なので抑えてはいる。

しかし、弾速は普通のヒトには「速い」と感じるくらいの速度が出ている。

エアリアルは瞬時に素器を展開、素早い動きで数発の火球を切り裂く。

「・・・三十六、三十七・・・」

「はあ〜いつ、本日ラストの特大サイズだよお！！」

ユニイは両手を合わせてひとつの指鉄砲をつくる。

その先から今までの火球の中では一番大きなサイズをつくり、射出した。

「負けるかあ〜っ！！」

エアリアルは火球に向かって加速。

素器が輝きを放つ。

彼女は火球の横を、真横に素器を振り通過。

すれ違った次の瞬間、火球は細切れになった。

「こうれんじん光連刃……つてね！」

そういつてエリアルは、ユニイに親指を立てていった。

「やったねエリアルお姉ちゃん！今までで一番タイムが早かったよ  
！！」

「本当にっ！？やったっ！！」

エリアルは、ユニイとハイタッチをする。

笑い合っていた時、思わぬ一言が飛び出した。

「ところでさ……エリアルお姉ちゃんもウエルト兄ちゃんに実戦  
的な奴をやってもらえばいいのに、どうして私とやってくれるの？」

「それは……。」

エアリアルという言葉が詰まる。

彼女に下手なことは言えない……。

そんな気持ちだが、エリアルの中に渦巻いた。

「……エリアルお姉ちゃん？」

「えっ？」

「大丈夫？なんかぼーっとしてるけど……。」

ユニイが心配そうにこちらを見てくる。

そんな彼女の頭を軽く叩いて、笑顔をつくりこういった。

「大丈夫よ……後ウェルトと修業しない理由は、ユニイと修業した方が私には合ってると思ったからよ。」

「へえ〜、ちゃんと考えた上で私と修業してるんだあ〜っ!!！」

ユニイは、なんだか嬉しそうに微笑んだ。

その笑顔に、エアリアル顔には自然と笑顔が生まれた。

「……なんだか楽しそうですね。」

二人を見て、フォルカはそうおもった。

「ああ・・・だがっ！俺はお前をあんなビニールハウス栽培で育った野菜達の様に優しく、温かく修業するつもりはさらっさらねえ！肥料も水もろくに与えられねえ・・・ど根性系野菜も尻尾巻いて逃げ出すくらいの厳しさで、みっちりしごいてやるぜボウズッ！！」

「例えわかりづらっ！しかも、そんなことされたら僕まず無事に帰れないっ！！！！」

「そんな弱音を吐くなっ！仮にも俺の修業について来てるんだか・・・っ！？」

急にウエルトの無理理論が止まる。

「どうかしました？」

「・・・何かくるぞ。」

「何か？」

耳をすましてみると、何かが氷の上を滑る様な音が聞こえる。

「っ！」

いきなりウェルトが、フォルカの体を突き飛ばす。

何事かと思い顔を彼の方に向けると、自分が立っていたところに突如、氷の道が出現。

その上を、高速の何かが通る。

しかしその何かが、フォルカ達の目の前でピタッと止まる。

何かの正体は、フォルカが忘れようにも忘れられない存在だった。

「・・・ドールツ!!」

「・・・探したぞ、フォルカ。」

とつさに素器を構えるが、すぐに剣先が下がる。

何故ならドールの後ろにいたのが・・・

「・・・フォルカッ!」

「ク・・・ラス?」

フォルカとエアリアルの、一番会いたかったクロムだったから・・・。



そこには消えかけた電灯があった。

そこには灰色の壁があった。

その壁には赤い液体が付着していた。

その床には数十体のクロムが倒れていた。

その近くにはマスター達も倒れていた。

その中に一人だけ立っているものがいた。

「……くあ……はあ……。」

苦しさに満ちた声が、広い廊下に哀しく響く。

体の至るところには、生々しい傷ができており、見てるだけでも痛々しかった。

「うつ……フォ……ルカ……。」

彼は壁に寄りかかる。

彼の着ていた純白の服も、今では己の血と返り血で深紅に染まっている。

「ぐっ……」

徐々に視界がぼやけてくる。

それは、己の限界が近いことを物語っていた。

彼は震える手を伸ばす。

そこには何もないけれど……。

「父……さん……俺も……そろそろ、限界……みたい……だ。」

……約束、守れなくてごめん……

段々痛みを感じなくなってくる。

(……フォルカ、こんな駄目兄貴で……ごめんな……)

そうおもった時……

「残念だけど、まだ死なせないよ。」

誰かの声が聞こえた。

声の感じからして少年の様だが、もう誰なのかを判別する気力でさえ残っていないかった。

「君はね……彼女を再びこちらに引き入れる為の駒になって貰うんだからさ……。」

「……あつ……。」

その言葉と同時に、彼の……フィニカの意識は遮断された。

「……シェリナー、彼を運ぶの手伝ってよ。」

「ふふつ、重いものを運ぶのは男の仕事よ……ナイト。」

「……君って奴は。」

二つの影は、フィニカを見下ろし続けた。

新たな脅威が……動き始める。



## 第25話 ただ一つねがうのは

「クラスッ！無事でよかった！！」

「心配をおかけしてすみませんでした、エリアル。」

久しぶりにこの二人のツーショットを見た気がする、とフォルカは思った。

クラスが、助けに行く前に帰って来たのには、驚かされた。

・・・が、それよりも驚かされたことがある。

それは・・・彼女をさらったドールが、彼女を自分たちの元に連れてきた事だ。

「ドール・・・何のつもりだ。」

「・・・何の事だ？」

「どうしてクラスをさらった君がここにクラスを連れてきたんだよ！？ それは兄さんが君に命令したからか！？」

フォルカは思ったことを、全て彼女にぶつけた。

するとドールはゆっくりと口を開き、こういった。

「・・・私はフィニカ様に命令などされていない、これは私が自ら決めたことだ。」

「自らって・・・クロムの君がか!？」

「・・・ああ。」

ドールは頷いた。

他に何か言おうとしたら、フォルカの後ろからウェルトが口を開いた。

「ドールっていったか・・・お前マスターはどうした？ クロムならマスターは必要不可欠だろう？」

「それはっ・・・。」

彼女の反応が少し変わった。

ドールのマスターは、フォルカの実の兄・フィニカである。

フォルカ自体も、彼女の側にいるはずの兄がいないのに違和感を感じていた。

(ドールに初めて会った時にも兄さんはいなかったけど・・・あの

時とは何か違う様な気がするんだよな・・・。(

「我が主は・・・フィニカ様は・・・。」

彼女は少し震えている様な口調で、衝撃的な一言を口にした。

「おそらく・・・死んだ・・・。」

「「「!!」「」」

その言葉に、クラス以外表情が固まる。

「兄さんが・・・死んだ?・・・嘘だ、嘘だよ。」

「残念ながら、その可能性が高いです。」

クラスも、苦しそうな顔をして告げた。

「そんな・・・。」

フォルカの脳内に、兄との思い出が何回も流れる。

彼の笑顔、泣き顔、怒り顔がもう見れないと思うと、胸が締め付けられるように苦しくなった。

「フォルカお兄ちゃん・・・。」

ユニイが、彼に触れそうになった時・・・

「今の声はっ、ユニイちゃん!？」

草むらから、小さな影が飛び出してきた。

「うわぁっ!!!?!？」

「フォルカツ!!！」

「大丈夫ですか!？」

彼に頭突きをくらわした影の正体は、ユニイを指差してこういった。

「やっぱりユニイちゃんだあ〜っ! 久しぶりい〜っ!!！」

「セレンちゃん!!！」



セレンと呼ばれた、クリーム色のショートカットから一本のアホ毛が出ている少女は、ユニィに思いっきり抱きついた。

「わわっ！？セレンちゃんっ、こけちゃうよっ！っ！っ！」

「あっ、ごめんごめんっ！っ！」

そういつて彼女達は笑いだした。

「本当に会いたかったよ……二週間前にユニィちゃんが連れて行かれたって聞いたから……。」

「セレンちゃんだって、ちよくちよく村からいなくなってたじゃん！っ！」

「あれは……お仕事してたの！！ユニィちゃん家にお世話になつてばかりだし、恩返ししたかったの……。」

ケンカを始めたかと思うと、悲しそうな顔をしたり……この二人は本当に仲がいい友人なんだなあと思えた。

そんなとき、セレンの口から予想外の一言が漏れた。

「ユニィちゃん……一緒にアルフィの村へ帰る？アヤおばさんもきつと心配してるよ……。」

「あっ……うん、そだね……。」

ユニイの表情が曇る。

「ママが待ってるの……忘れてた。みんなといるのが楽しくって……。」

そんなユニイの前に、小さな手が差し出される。

「さっ、ユニイちゃん……行こ。」

「……うん。」

セレンの手に、自分の手を重ねようとしたとき……

「……まっっ。」

静止の声が上がった。

「……どこかしましたか、ドール？」

「お前の名前……どこかで聞いた事があると思ったが、ようやく思い出せた……。」

「……………」

「……セレンちゃん？」

ユニイは、彼女から少し離れる。

今までの彼女からは想像出来ないくらいの殺気を、感じてしまったからだ。

「お前は……」セレン・プリユヴィオールフォースナイツ。施設長を守る『  
四素騎士じゅっけん』の一人、重剣のセレンだ……。」

「嘘……セレンちゃんが……？」

ユニイの前にいるのは、もう『お友達』のセレンちゃんではなかった。

ドールを鋭く睨み付ける、重剣のセレンだった。

「……私もあなたのこと知ってるよ、シェリナーさんにクロムに  
してもらったお姉ちゃんでしょ？」

「シェリナー……そんな詐欺師も四素騎士にいたな……。」

「……………」

二人の間に、重々しい空気が漂う。

時間が過ぎれば過ぎるほど、二人の殺気は増していく。

しかし・・・

「・・・やゝめたっ！」

「!?!」

突然、セレンから殺気が消えた。

「今はユニイちゃんとの再会を喜びたいし、今回の仕事はクラスちやんの回収じゃないしね。」

「・・・どういふことだ？」

セレンは、ドールの方を睨んで話した。

「私の仕事は・・・四素騎士の最後の一人になる予定の人のテストを邪魔されない為の護衛だよ。」

「そんな事、僕達に話してもいいの？ 邪魔するかも知れないけど・・・。」

「別にいゝ・・・テスト始めてかなり時間経ってるし、知られたとしてもそんなに問題はないしね。」

そういつて彼女は笑みを浮かべる。

しかし、先ほどのような明るい笑顔ではなく、何か秘めた怪しい笑みだった。

「・・・でも、少ししゃべり過ぎよセレン。」

セレンの後ろから、声が響く。

「あっ・・・ごめんなさいシェリナーさん・・・。」

草むらから出てきたのは、金髪のロングヘアで、眼鏡と白衣を身につけた女性だった。

「次はないわよ?」

「はゝい・・・。」

そういつと、シェリナーはフォルカ達の方を向いた。

「ナイトが言ってた、クラスを奪った奴らって・・・貴方たち？」

「「ナイトツ!?!」」

「あのガキンチョか・・・。」

全員の脳内に、一人の少年クロムが浮かんだ。

「あんた達の方がクラスをさらったんでしょうがっ!!」

「それは違うわ。元々その子は私達の為に動く予定だったところ、ライシエス博士が盗み出したのよ。・・・私のものをね。」

「クラスはものじゃないっ!!私の大切な家族よっ!!」

「エリアル・・・。」

エリアルは両手を広げ、クラスを守るように囲った。

「なるほど・・・あなたが報告にあった、ライシエスの娘ね・・・。」

「

シエリナーは顎に手をあて、考え出したと思うと、急に鼻で笑いだした。

「フフツ・・・面白いじゃない。いいわ、実戦テストも兼ねて目障りなライシエスの娘を排除してもらいましょう・・・。」

彼女が空に手をかざす。

そしてその親指と中指をあわせ、弾いて鳴らした。

・・・パチンツ。

その音が響いた瞬間、シェリナーの横を高速な何かが通った。

高速な何かは、エリアルに猛スピードで近づいてくる。

「えっ、ちよっ!?!?」

エリアルはあわてて対処しようと素器を構えるが、一瞬で弾き落とされる。

そして棒の様なもので腹部を殴られ、体が宙に舞う。

「っ!?!?!」

声にもならない痛みに顔が歪みそうになるが、そんな暇は与えてくれない。

目の前に何かが出現。

棒の様なものを再びこちらにぶつけようとしてくる。

(ヤバッ!?)

思わず目を閉じそうになるが、驚きで目を見開いてしまう。

例えたとしたら相手が闇なら、こちらはまさに光と呼ぶにふさわしい人物だった。

「うおりゃあぁっ!!!!」

「っ!?!」

急に出現した光の攻撃に、闇は瞬時に防御態勢に切り替え防ぐ。互いに反発し、徐々に落下していく。

光は宙に舞っているエアリアルの体を抱え込み、衝撃のないように地に足を着ける。

そして、ゆっくりと彼女の体を地面に置いた。

「・・・あんがと、ウェルト。」

「おっっ、そこで休んどけっ!」

そういつて、シェリナーの方へ視線を向ける。



彼女の隣には、見馴れない人物が立っていた。

「紹介するわ、彼は四素騎士の一人『瞬槍しゅんそうのニグレド』よ。」

「……初めて聞く名だ、そいつが例の新人かシェリナー？」

「ええそうよ、出来損ないのお人形さんっ。」

「貴様っ……。」

ドールはシェリナーを睨み付け、新人の方を向く。

見た感じ二十歳くらいで、体を覆う黒衣と雪の様に白い髪との色合いが綺麗だった。

しかし鼻下まで隠す闇色の仮面が、彼の顔を隠している。

(……あれっ？ 僕……この人を知ってる気がする。)

(こいつ……どこかで見た様な……。)

突如、フォルカとドールの中に、仮面の青年に対する何かが胸の中に生まれる。

「シェリナー、時間だ。」

ニグレドの口から、シェリナーに告げられる。

( (今の声はっ!?) )

二人は、彼の声に覚えがあった。

その声は・・・今、一番聞きたかった声だから。

・・・フィニカ・テイル。

フォルカの実の兄であり、ドールのマスター。

人の為に泣き、怒り、笑う・・・とても優しい人物。

そんな彼と、目の前にいるニグレドは似すぎているのだ。

「あらそう、じゃあ帰りましょうか。」

「施設長怒ったら恐いもんね。」

そういうと、セレンの足元に緑光が集まり始める。

「待ってっ!?!」

フォルカが叫ぶ。

「ニグレド……あなたは、フィニカ兄さんじゃないのかいっ!？」

「……………」

彼は答えない。

「フィニカ様っ!私です、ドールですっ!!!」

ドールは、ニグレドに叫ぶ。

ブレスレットを握りしめながら……。

少しして、彼の口が開く。

「……俺がその『フィニカ』という奴だとしても、今の俺はニグレド……瞬槍のニグレドだ。」

「……………」

彼とは思えないくらい、冷たい反応だった。

その時彼の足元に、見たことのない黒い光が収束し始めた。

「さっ、行きましょう・・・ニグレド。」

そういつてシエリナーは、彼の首元に手を添える。

「・・・シエリナー、近すぎやしないか？」

「いいじゃない、見せつけてやりましょう・・・あの子達に。」

シエリナーは、フォルカ達の方を向く。

そして、勝ち誇った顔でこちらを見てきた。

その行動が、彼をフィニカだと裏付けているように思えた。

「フィニカ様から離れろっ!!このゲスがあっ!!!!」

「あらっ、口の聞き方になってないわね。私のニグレドとは大違  
いだわ。」

そっいいながら、彼の輪郭にそって指をなぞらせる。

「・・・シエリナー。」

「フフッ、わかってるわよ・・・さあ、行きましょ。」

二人を黒光が包み込み、一瞬にして消失。

「じゃあねユニイちゃん・・・必ず助けたいから。」

「セレンちゃんっ!」

セレンも、緑光が足を包み、その場から一瞬にして消えた。

・・・願っていたのはあなたの無事だった。

帰って来て、このブレスレットをはめて欲しかった。  
また、笑いかけて欲しかった。

しかし、あなたは思わぬ形で私の前に現れた。

『ニグレド』

あなたがどうして己を偽っているかはわからないけれど・・・

私の知ってる笑顔で、

私の知ってるあなたで、

どうか私達の元へ帰って来てください。

それが私の・・・ただ一つの願いです。

## 第26話〜ヒトスジの可能性〜

クロム研究施設の入り口に、小さい円状の影が出現する。

その影が右方向に渦を巻いたと思った次の瞬間、その影より二人の人が現れた。

「ありがとう、ニグレド。」

「ああ……。」

シエリナーが、彼から離れる。

「こんな短時間でその力をそこまで操れるなんて……さすがね。」

「そうか……。」

ニグレドは、そっぽむく。

そんな子供じみた態度に、シエリナーはクスツと笑いを吹き出す。

「おまたせえ〜〜っ!」

突如、突風と共にセレンが勢い良く現れた。

「・・・遅れてない？」

「問題ないわ、私達とたいして時間は変わらないしね・・・。」

「よかつた〜・・・ニグレドお兄ちゃん、移動速度も扱い方を覚えるのも早すぎだよ〜。」

「まあな・・・。」

セレンがこちらに笑いかけてくる。

その笑顔に、ぎこちなく笑い返す。

仮面のせいで、口元くらいしか見えていないが・・・。

「さっ、早く施設長の所へ行きましょう。」

「はあ〜いっ！」

そういうと、女二人は施設の中へと入って行く。

「・・・・・・・・・・。」

しかし、ニグレドの足はその場に止まる。



脳内に、先程の自分の実戦テスト途中に接触した、少年と女性クロムが浮かぶ。

「・・・フィニカ、か・・・。」

ボソツと呟いた、本当の名前。

あの少年とクロムは・・・その名を知っていた。

「どうして・・・俺のことを・・・。」

その事を考えれば、考えただけ頭の中がごちゃごちゃするだけで・・・  
・気分が悪い。

（あいつらが俺を知っていることと、俺が施設内で傷だらけで倒れていたこと・・・何か関係があるのかもな。）

彼は『フィニカ』だったときに、全身傷だらけで倒れていたところ、ナイトとシェリナーに助けられた・・・と聞いている。

傷は、シェリナーが光素ステイアで癒してくれた。

「傷は・・・癒えたのにな・・・。」

ニグレドは胸に手を置く。

胸の奥にひっかかる様な何かがあり、モヤモヤする。

「・・・ニグレド、何をしているの？早くしなさい。」

「・・・ああ。」

我に帰り、シエリナー達の方に歩きだした。

あの時に会った二人の顔は頭の中に残したままで・・・。

「はあ～・・・。」

「うう～・・・。」

「ふう～・・・。」

三人分のため息が漏れる。

「・・・大丈夫なの？あの三人。」

「わかりません・・・ですが、ショックは大きいものと考えていいかと。」

エリアルは、クラスと一緒に距離をとって話している。

「ウエルト、どうにか三人を励ましてよ。」

「励ますか・・・よしっ、アレでいくか!..!」

そういつてウエルトは地面に座り込み、鼻歌混じりに何かをし始めた。

「・・・アレとはなんでしょうか?」

「・・・さあ?」

少々嫌な予感もするが、今は彼くらいしかこの状況を打破出来なさそうなので、二人は静かにウエルトを見守った。

しばらくして、彼が手招きで二人を呼び、アレの内容を話す。

クラスは、「わかりました。」と首を縦に振る。

エリアルも、「いいじゃない。」といつて首を縦に振った。

(・・・兄さん、だったんだよなあの人。声も・・・髪の色も、

兄さんにそっくりだったし……。

（フィニカ様……何故です？あんなにも奴らのやり方は間違いと  
言っておられたのに……。）

（セレンちゃん……私を助けるって言った。 私は皆にもう助  
けてもらったのに、どうしてだよ。）

再び三人はため息を漏らす。

フォルカは隣のドールを見て、

「ドール……なんだか元気がないね、大丈夫？」

と言った。

「私は大丈夫だ……それよりも、お前の方が元気がなさそうだぞ  
？」

彼女にしては珍しく、こちらの心配をしてくれた。

「僕も大丈夫だよ……。」

「・・・私が見るにさ・・・二人共・・・元気なさそうだよ・・・。」

誰よりも小さい声で言ってきたのは・・・ユニイだった。

「一番元気がないお前には言われなくなかったぞ。」

「そうだね、一番『・・・』の数も多いし・・・。」

「よくわかったね・・・『・・・』の数なんて・・・。」

その一言で、また三人は沈黙する。

「・・・はあ・・・。」

三回目のため息が漏れる。

実の兄が、自分のマスターが、大親友が・・・敵側の四素騎士だと誰が思うだろうか？

「はあ・・・んっ?」

フォルカは視線を感じ、顔を上げる。

すると、目の前でクラスが正座してこちらを凝視していた。

しかも・・・無表情で。

「どうしたの、クラス？」

「・・・・・・・・。」

クラスは答えない。

「・・・ドール、ユニイ、クラスが何だか変だよ。」

その言葉を聞いて、二人は彼女の方を見る。

「クラス、どうした？」

「どこか・・・痛いのか？」

「・・・・・・・・。」

やはりクラスは答えない。

三人が少しあわてていると、彼女は何かを取り出した。

「・・・？何それ。」

「紙……の様だが。」

「……何するの？」

クラスはその紙をゆっくりとひっくり返す。

そこには……

「……??？ これは……猫？」

「いや……猫はもう少し愛くるしい、だからこれは……犬だな。」

「犬も違うと思うよ？ あれは……虎かな？」

色鮮やかな六色で描かれた……生物と思われる物体だった。

耳に足四本と尻尾……この四つから考えられるのは動物だろう。

三人が上げた動物も、百歩以上譲ってやっと面影が見えるくらいだ。

「……。。。」

クラスが、どこからかもう一枚紙を取り出す。

そこに書かれていたのは……、

「『馬』っ?!?!?」

予想とかなり違う動物の名前だった。

なにせこの馬、少し長めの首は完全に行方不明になってるし、なぜかリアルに描かれている口はニンジンよりも人を噛み砕きそうです。はつきり言ってるって怖い。

「……………」

急にクラスは立ち上がり、絵を持ったままゆっくりと前進してくる。

「えっ!? ちょっ!? クラス?!?!?」

「とっ、止まれクラスッ!?!」

「キャアアアッ!?!」

三人は後方へ逃げようと振り向くが……、

「……………」

「エリアルツ、ウエルトさんっ!?!?」



クラス同様、無表情の二人が紙を持ってスタンバっていた。

（（まさかつ！？）（））

ウェルトがゆっくりと上げた紙には、クラスと同じ六色の・・・生物と思われる物体が三つ描かれていた。

「「「!???」「」

さらにエリアルも、持っていた紙を上げる。

その紙には、こう書かれていた。

「・・・『フォルカ』!?!」

「『ドール』だと!?!」

「『ユニイ』だあってえ〜!?!」

三人は、先程まで元気がなかったとは思えないくらい大声で驚いた。

だってこの絵は・・・ひどいなんてものじゃない。

しいて言うなら『絵の具のこぼれたところが偶然絵に見えるよ』  
状態になっている。

「・・・・・・・・ぷっ！」

突然、無表情だったエリアルが吹き出す。

「あゝっはっはっはっ！もうだめっ、三人の顔が酷すぎて・・・  
笑うなっていう方がムリよー！！！」

エリアルをきっかけに、クラスも静かに笑いだす。

「・・・・・・・・フフツ、あのドールが・・・・・・・・クスススツ。」

「ツ！クラス、笑うならもっと盛大に笑ってくれ！！その笑われ  
方は何か嫌だ！！！」

「クスススツ・・・・・・・・。」

なんか・・・・・・・・声を殺して笑うクラスは、なんだか怖かった。

「俺的には・・・・・・・・ユニ嬢ちゃんが『レ・陰謀・アート』に食いつ  
かなかつたし・・・・・・・・すっげえ勝った感じがするぜえ・・・・・・・・。」

この人は・・・純粹に恐かった。

子供相手に勝ち誇った顔をしていいのか!? 二十七歳自称『神様』  
!!!

「よし、この勝利を記念に自画像でも描くって・・・うおっ!?  
赤色がなくなつてやがる!？」

ウエルトが辺りを見回すと、少し顔のにやけたユニイがいた。

「ユニイ嬢ちゃん・・・まさかっ!？」

「そのくらいで私に勝つたつもりなんて・・・甘栗よりも甘いね、  
ウエルト兄ちゃん。」

ユニイの手に握られていたのは、取り外し可能な『レ・陰謀・ア  
ト』の赤色固形絵の具だった。

「よりもよつて、子供達のフェイバリットカラーの赤色を取りや  
がって・・・許せんっ!!!」

「最近の子供達は青系統の色が好き何だよ!? そんなのもわか  
ないの〜!？」

なんだかんだ言っつて、ユニイの顔に笑顔が浮かぶ。

「ふう〜・・・やっぱウエルトにまかせて正解だったわね。」

笑い過ぎて乱れた呼吸を整え、エリアルが言った。

「どづいづこと、エリアル？」

「いやあ〜・・・あんた達三人がとてつもなく暗い雰囲気で色々やりずらかったのよ、だからウエルトに元気付けてって頼んだの。

そしたらちよ〜つとうるさいけどみんな元気になったじゃん！だから・・・頼んで正解だったなって思っただけ！！」

そういつて、フォルカの方を見て彼女は笑った。

何というか・・・とても眩しかった。

「それにウエルトが言うには、ミセットタウンで会ったシスターが何か分かるかもってさー！！」

「分かるってまさか・・・兄さんの事？」

「確定は出来ないっつてさ・・・どづするっ。」

その事が聞けただけでも、胸の奥に熱い何かが浮かんできた。

・・・返事は、もちろん決まっている。

「・・・早く引き返そう、ミセツトタウンに!」

「オツケーッ! じゃあみんなにその事をいいきましょう!」

「うんっ!」

フォルカはエリアルと共に、仲間の元へ走る。

ひとすじでも生まれた、可能性に向かって・・・。

第27話 Trick or... (前書き)

ハロウィン企画です。

本編と少しズレるので、気楽に読んで下さい。

## 第27話 Trick or・・・

今日のユニイは何だか変だった。

スキップしながら先頭にいたと思ったら、エリアルルの隣で鼻歌をしていた。

そして、暗くなったのでテントを張り、一晩を過ごそうとした矢先に事件は起こった。

「・・・ユニイは？」

なんと、ユニイは姿をくらましたのだ。

「そついえば・・・先程から見てもせんね」

「・・・しょうがない、私が近くを探して来よう」

そついつてドールがテントの外に出ようとした時・・・、

「問題でえゝす！今日は何月何日でしょうか？」

ユニイの声が、どこからともなく聞こえる。

辺りを見回しながら、ウエルトが答える。

「今日、確か10月31日じゃ……はっ!?!?」

そういつた瞬間、ウエルトは何かに気付く。

皆さんはわかっただろうか、今日10月31日に何があるのかに……。

「そうっ!今日は10月31日、つ・ま・りい……『トリック  
オアトリート』!!お菓子くれなきゃユニイファイアをお見舞いし  
ちやうぞ」

そういつて、勢い良くユニイがテントに入って来た。

……コウモリ型の羽を背中に装着して。

「……ユニイ、どうしたのそれ?」

「これはねえ……私が作ったんだよ」

ユニイはその場で2〜3回くるくる回り、お手製の羽を見せ付けてくる。

しかし、止まったかと思ったら、急に頬っぺたを大きく膨らませて



こうだった。

「でもショックウゝ・・・皆が揃いに揃って『ハロウィン』という神聖なる行事を忘れてるなんてさあゝ・・・」

「えと・・・ごめんねユニイ」

別に悪い訳ではないが、フォルカはユニイに謝った。

「まあいいけどね・・・んじゃあさっ!?!」

突然ユニイが開き直ったのか、高いテンションに戻る。

「せつかくなんだからさ・・・皆で仮装くらいはしようよっ!?!」

とてつもなく強引なアイディアを提案してきた。

「貴様はともかく・・・私達は衣装なぞ用意してないぞ?」

「大丈夫っ!こんなこともあろうかと、私が皆の分を作ったいたから!?!」

次の瞬間、どこからともなく巨大な袋を取り出した。

その袋の中には、様々な衣装がこれでもかというくらい詰まってい

た。

「ですが・・・私達に着れるでしょうか？」

クラスの疑問に、ユニイはすんなり答える。

「そこも大丈夫っ！腰や太ももがどれだけ太かろうが、すんなり着れちゃう様に作ったから！」

右手の親指をビシッと立て、誇らしげな顔をしてユニイが言った。

「・・・それが入らなかつたら、私達立ち直れないわよ・・・」

「はい・・・」

「ああ・・・」

女性陣は、少々乗り気ではなかった。

男二人はというと・・・。

「僕・・・ハロウィンはお菓子を食べるだけだと思ってたから、何か楽しそうかも・・・」

「ボウズツ！ハロウィンで楽しめねえ奴は負け組だ！！だからちやつちやと着替えてエンジョイしようぜ！！」

「はいっ！」

そういつて二人はユニイの元に、衣装を貰いに行った。

「は〜っ！いつ！そっちの三人も早く〜！！」

ユニイの手招きに、三人は仕方なく衣装を貰いに男性陣のいる方へ向かった。

「・・・おまたせ」

「フォルカお兄ちゃんっ、早かったね・・・って着てないし」

なぜかフォルカは、いつもの服装で帰ってきた。

「どうしたの？まさか・・・入らなかったの、服」

「違うよ・・・用意してある服のほとんどが女性ものだったよ。と

てもじゃないけれど、僕には着れないよ・・・」

フォルカの言い訳に、ユニイは優しい目をしてこういった。

「フォルカお兄ちゃん・・・長い人生の中、ほんの一日女装するくらいは時間で言うと一瞬でしかないんだよ。だから・・・Let's女装」

「うっっっ・・・」

今日のユニイは、本っ当にやりづらい。

お祭りの行事になると、一部の子供は凶悪になるといっつのは本当らしい。

「ユニイ、お待たせしました」

「あっ！クラスウ〜！！サイズは大丈夫だった？」

「はい、問題ありませんでした」

クラスが仮装したのは、大きな黒い帽子とローブ、手に持ったホウキが印象に残る『魔女』の格好だった。

「どうですか？」

クラスは、フォルカに似合っているかを聞いてきた。

正直言うと、黒い帽子から覗く鮮やかな緑色の髪がとても綺麗で・・・似合っている。

「とても似合って・・・」

「とくっても似合ってるよクラスッ!!」

予想外にユニイの声が大きく、驚きのあまり感想を言いそびれる。

「そうですか・・・ではエリアルも連れて来ますね」

そういつてクラスはテントに戻った。

数秒後、テントから叫び声が聞こえてきた。

「嫌よっ!!この格好は『エリアル』という人の形を完全になくしているじゃないっ!!」

「大丈夫です、どんな格好をしていても・・・声を聞けばエリアルだとわかってくれますよ!・・・多分」

「余計不安じゃあ〜いつ!!」

何というか・・・テントが原型を保てないくらい揺れている。

「フンツ、仮装が出来ないとは・・・エリアルはだらしがないな」

そういつて、いつの間にか隣にいたドールが鼻で笑った。

・・・猫耳をつけた状態で。

「・・・えっ？それは・・・仮装に入るのドール？」

「もちろんだ、『化け猫』を知らんのか。・・・ニヤ~~~~ツ~~~~ッ!~!」

「ニヤツ~~~~!~?」

本当に彼女はドールなのだろうか？

少なくともフォルカの知っているドールは『ニヤ~~~~ッ!』とは言わない。

「いやな・・・最初はこの『バンパイア』の格好をしようと思ったのだが・・・これをフィニカ様に脳内で着せてみたら、驚くほど似合っておられたのだ。だから私はフィニカ様の好きな猫（真っ白）の化け猫と化して、彼のお側に仕えようと・・・ブハッ!~!」

急に力説を始めたと思ったら、鼻血を吹き出した。

「うわああっ！！ドールツ、君ってそんなキャラだったの!？」

フォルカの問いに、鼻栓をしたドールが答えた。

「元は違ったが・・・フィニカ様のおかげでこんなにも人に近づく事が出来たのだ」

「・・・多分鼻血は関係ないと思うよ？」

「ああ・・・フィニカ様、思い出しただけでまた鼻血が・・・」

そういつて鼻にささったティッシュ栓を抜き、新しいものに変える。

(ドールは、妄想が行き過ぎた人なのかな?)

その時、急に後ろから足音が聞こえる。

靴が草を踏む様な感じではなく、素足で歩いている様な音が・・・。

(・・・どじいじこと?)

ゆっくりと後ろを見てみると、長身で白い着物を身につけ、頭部に白の三角形の布を括り付けた人がいた。

「ひっ!!!?!?」

昔、本で読んだことがある。

“女性の幽霊は、大抵白い着物を着て現れる”と・・・。

その人はゆっくりと近づいてくる。

口元に笑みを浮かべながら・・・。

「うわあああああっ!!!!」

「・・・つてな!」

着物の人が急に明るいう囀気で、しかもどこかで聞いたことのある男性の声でしゃべった。

「・・・へっ?」



「気付かねえか・・・これならわかるだろうっ!!」

そういうと、懐から十字架とメガネを取出し、身につけた。

「ウエルトさんっ!?!?メガネ掛けてたんですか!?!?」

「はあっ!?!?お前今さらすぎるだろうが!!結構一緒にいただろっ!?!?」

「だって・・・文章での説明がなかったし・・・」

「?????」

本当に今さらだが、ウエルトはメガネをしている。

単なるおしゃれのためか、目が悪いのかは謎ではあるが・・・。

「んで、エリアル嬢ちゃんは?」

「あっ!?!?そういえば」

テントの方を見ると、今だに死闘は続いており、次々とテントの形が変わっている。

しばらくして、クラスが何かを引きずりながら出てきた。

その何かとは……。

「ちょっとクラスッ!？」

「……何でしょうか」

「何でエリアルが包帯ぐるぐる巻きなのっ!？」

ミイラに仮装した(もしくはさせられた)エリアルだった。

「いえ……エリアルがあまりにも抵抗するもので、やっちまいました」

「やっちやっただ……」

フォルカは身を震わせながら、クラスにいった。

「はい、まあちょうど包帯があったので手当てのついでに仮装出来ましたし……よしとしましょう」

その一言に、皆の顔は一気に青ざめた。

ユニイの様に明るい人も、ドールの様にクールな人もっ!!

皆が仲良くなれる、一日限りの魔法の言葉。

『トリックオアトリート』

ほら、あなたのところにもやってきましたよ。

コウモリ型の羽をつけた、いたずらっ子達が・・・。

第27話〜Trick or...〜(後書き)

読んでいただきありがとうございます!!

ハロウィン企画は一回やりたかったんです!!

今回は本編に戻しますので、読んでいただけたらうれしいです!!

第28話 〽️デイスペア 前編

「ふう……着いたね、ミセツトタウンに」

フォルカは荷物を地面に下ろす。

ミセツトタウン……ウェルトと旅をするきつかけとなった町である。

「ん……」

「どうしたのユニィ？唸り声なんてだして」

突然ユニィが首を傾げる。

その反応にエリアルが気付き、顔を覗きこむ。

「なんかさ……この前と比べて空気が重くない……？ 活気も若干なくなってる気がするし……」

ユニィの一言に、ドールとウェルトは顔をしかめる。

「……ユニィの言う通り、町にしては活気がなさすぎるな……」

「ああ……お前らはここで待ってる、教会でちよっくら聞いてくる」

そういつて、ウエルトは走って行ってしまふ。

「あつ、ウエルトさんっ!!」

フォルカの呼び声は、もう彼には届かなかった。

「……行っちゃった」

「私達はどうしますか?」

クラスが皆に聞く。

「僕は……行くよ。いくら強いつて言っても、ウエルトさんもトだから、危ないと思う……」

「私、フォルカの意見に賛成」

エリアルが、彼の意見に賛成する。

「私もっつー!」

「……同じく賛同させてもらおう」

続いて、ユニイとドールも賛成する。

フォルカはクラスの方を見る。

クラスは頷き、

「私も、ウエルトさんが心配です。行きましよう」

と言った。

全員は頷き合い、ウエルトの後を追って走り出した。

しばらく走っていると、商店街の手前で見覚えのある人物と出会った。

前にウェルトが紹介を兼ねて、ごちそうしてくれた(？)お店の店主だ。

「あつ、あなたは確か・・・」

「・・・ああ、あんたらはウェルトと一緒にいた・・・」

向こうもこちらを覚えていたようだ。

しかし、店主の表情はとても暗かった。

「・・・この町で、何かあったんですか？」

クラスは、彼に尋ねる。

「・・・この町は、大都の所有地になっちまったんだ。司祭とシスターが頑張つて抗議してくれたが、ダメだった・・・」

「っ!!・・・なぜそのような事をしたか、わかりますか？」

驚きながらも、クラスは質問を続ける。



その様子を、皆は目をきららず見続けた。

「大都側の目的はわからないが・・・そのせいで、俺らは大都しか物質の供給が出来なくなっちゃまって・・・」

「そうですね・・・返答ありがとうございました」

そういつてクラスは店主に一礼して、フォルカ達の元へ帰ってきた。

「・・・予想以上に深刻な問題でした」

「ああ・・・大都からしか物質が供給出来ないのは、辛いだろう」

ドールはチラッと、森の方を見る。

「大都との境にある森は、魔物だらけだもんね」

ミセツトタウンと大都との境には、魔物の巣のような森がある。

フォルカ達はウェルトのおかげで奇跡的に森を抜けることが出来たが、普通の人にはまず抜けだす事はできない。

「早くこの事をウエルトに知らせ・・・キャッ!？」

急にエリアルが声を出して転けた。

どつやら、誰かとぶつかった様だ。

「ちょっと!どこ見て・・・!？」

エリアルは相手を怒鳴ろうとしたが、言葉が詰まる。

その相手が相手だったからだ。

「ウエ・・・ウエルト？」

その相手は・・・ウエルトにあまりにも似ている青年だった。

服装と少し幼い顔立ちくらいしか、違うところがないと言い切れるくらいだ。

「ウエルト?・・・誰だそれは」

青年は、冷たい視線でエリアルを見下ろす。

その視線に、エリアルは思わずゾツとした。

「あっ……いえ、あなたと知り合いがあまりにも似てて……」

「……そうか」

そういつて、青年は早足でその場を去った。

「……何、今の人」

エリアルは両手に力を込めて、必死に震えをこらえる。

「ウエルトさんに似ていたけど……性格は真反対だったね」

フォルカがエアリアルの自分の肩にかけ、彼女を立たせてあげた。

「でもさ……本当にそっくりだったね、ウエルト兄ちゃんに」

「はい、目の色も髪の色も……親族の方でしょうか？」

そんな推測を立てたその時……。

……ドゴンッ……!

「「「!?!?」」」

急に大きな爆発音が響いた。

町の人達のざわめきが聞こえる。

『何だ今の音は!?!?』

『教会の方から聞こえたぞ!?!?』

『行ってみるぞ!?!?』

その会話の中に、重要なキーワードが隠れていた。

『教会』・・・ウエルトが向かった方向だ。

フォルカの背筋に、冷たい物が流れるような寒気が走る。

ウエルトのことは心配しなくても大丈夫だろう。

しかし・・・先ほど会ったウエルト似の青年が妙に頭に残っていて、嫌な予感がするのだ。

「・・・みんな、行こう」

フォルカの言葉に、全員頷く。

そして人混みをくぐり抜け、教会へと向かった。

やっとの思いで、教会についたフォルカ達は思わず息を飲んだ。

目に映ったのは・・・入口の大破した教会、いつになく焦り気味の  
ウエルト、そして・・・。

「ウエ・・・ルト、来テタンダ。早く・・・皆ト遊ボウ・・・早・・・  
ク」

両目が赤く色づいた、教会にいた女の子だった。

「あの子・・・教会にいた・・・」

「目が赤いってことは、クロムなの？」

フォルカとエリアルは、見覚えのある女の子がクロムになっている  
ことに、驚きが隠せなかった。

ユニイも、声にならないくらい驚いていた。

「いや、クロムと呼ぶには・・・あの子は不安定だ」

「・・・どういうこと、ドール姉ちゃん？」

ドールの発言に、ユニィが疑問をぶつける。

ドールは口を開き、こういった。

「クロムとは、ヒトの体にスティアセイヴをつけることによってなる、対アルフィの存在だ。大体はクロムとなって生まれ変わるが、ごく一部稀に、スティアセイヴが体に合わず中途半端なクロムになったり、拒絶反応が生じることもある」

フォルカは女の子の方を見る。

確かにクロムと同様、赤目にはなっている。

しかし、発する言葉がかたことで、いまいち状況の把握が出来ていない様だ。

「エトツ、もう止めろっ！！ お前はこんなことする様な奴じゃねえだろうがっ！！」

ウェルトが叫ぶ。

多分『エト』というのは、あの女の子の名前だろう。

しかし、あの子には届いていない様で、エトはついにウエルトに戦闘を仕掛けてきた。

彼女の攻撃手段は、高速に繰り出される手刀だ。

しかし、高速でもウエルトの体をかすめることも出来ていない。

右、左、右、左と見せかけてまた右等のフェイントをするも彼は避け、はたまた双方にダメージがいかぬよう受け流す。

「すっ……すっい」

フォルカの口から思わず言葉が漏れる。

こんなことを言う状況ではないが、そういうるほどあの二人の動きは高度だった。

エトは手刀から、瞬時に拳に切り替え、ウエルトの顔面を打とうとする。

彼なら避けられないものではないはずが、ウエルトは避けず頬に彼女の一撃が入る。

エトがその手を彼の頬から離そうとした時、その小さな手を離すまといとウエルトが掴む。

「止まれっエト!!… これ以上こんなことすんなっ!!…」

「……コンナ、コト?」

エトの動きが止まる。

「ワタシ……ナニシ……テ」

急に拳が下がる。

やっと、届いたのだ。

エトに……ウェルトの思いが。

その嬉しさに、ウェルトの口元が思わず緩む。

しかし……。

「やはり、ヒトの世で生きたら貴様でさえ駄目になるか……」

「!?!?」

突如聞こえた、低い声。



その声と同時に、エトがこちらに倒れてきた。

小さな背中には、大きな切り傷がついていた。

「エトッ!?! しっかりしろっ、エトッ!?!」

「ウエ……ル……ト」

声がどんどん小さくなり、消えた。

どれだけ体を揺すっても、エトはもう喋らない。

「……ッ、エトオオオオオオッ!?!」

こんなにもエトのために叫んでも、ウェルトの目から涙が落ちることはなかった。

第29話〈デイスペア 後編〉

「・・・変わったな」

青年は口を開く。

「昔のお前は、他人の事などどうでもよかったが・・・」

「・・・るせえ」

ウェルトの口も開く。

しかし、発する言葉の一つ一つに確かな殺意が感じられる。

「お前に俺の何がわかるっていうんだよ？ 初めて面合わせたお前がよおっ！...！」

ウェルトの怒り声と共に、おぞましい程の殺気が溢れる。

ウェルトはその場にエトを下ろし、ゆっくりと立ち上がった。

「その上エトをクロムにして殺すだあ・・・？ 笑えねえよっ！！」

「!？」

次の瞬間、ウエルトの足元から大量の光素スティアが発生した。

「ウエルトさんっ!」

フォルカが彼を呼ぶが、全く届かない。

(ここは・・・危険だっ!)

フォルカは司祭とシスターの方を見る。

エリアル達は、一般の人達を安全な場所に避難させるため誘導に向かった。

自分はこの二人の誘導を任されており、ウエルトの守りたい存在に  
違いない彼らは確実に守らなければならない。

ならば、彼が安心出来る様に二人をこの場から逃がさなくては・・・。

そうおもい、司祭とシスターの手を取った。

「二人とも、早くこの場を離れましょう」

「だけどっ、ウエルトとエトが・・・」

シスターの言葉に、一瞬手が止まる。

残念だが、エトは出血量を見る限り助かる望みは薄いだろう。

ウエルトも頭に血が昇っているのか、こちらの声が全く届かない。

そんな二人を置いて逃げるのが、彼女らは嫌なのだろう。

「僕だつて・・・」

フォルカの口が動く。

「僕だつて・・・ウエルトさん達を置いて自分だけ逃げるなんて嫌です。でも・・・でもっ！今の僕らじゃウエルトさんの足手まといにかならないんですよ！なら・・・足手まといにならないように、この場から離れるしか・・・ないんです」

「フォルカ君・・・」

シスターの肩に、手が置かれる。

振り返ると、それは司祭の手だった。

「司祭……」

「……逃げよう、我々は戦えない」

「……はい」

ようやく二人は、フォルカの誘導について来てくる決心をした様だ。フォルカはホツとし、二人の誘導を開始した。

「スティアをそれなりに解放したか……だが」

青年の足元からも、光素スティア特有の白光が溢れだす。

「俺も……お前に追いつく努力はしたんだ、そう簡単に負けてはやれんぞ」

青年の右手に、光素スティアが収束する。

その光はブレード状に形成され、硬化する。

「ステイアブレード・・・行くぞ」

青年が瞬時に風素ステイアを収束させ、一步前進する際に高速でウエルトの方に接近し、ブレードでの斬撃を仕掛ける。

それをウエルトは、自分の前に両手を交差させ防いだ。

「・・・？なぜ切れない、素手で防いでいるなら切り傷くらいはつくはず」

そういつた瞬間、青年は気付いた。

ウエルトは、両手に薄い光素ステイアの障壁を展開していた。

「そんな事まで出来る様になったか・・・厄介なものだ」

「・・・」

ウエルトは答えない。

「なら・・・これでっ！」

青年は逆の手にもスティアブレードを形成。

連続で何度も障壁を斬り付ける。

手だけではなく、高速移動をして回り込み、頭や胴、足にも攻撃を仕掛ける。

しかし、どれも彼を掠める事はなかった。

避けられ、防がれ、流される。

「くっ……」

さすがの青年も、少し焦りの表情を浮かべていた。

早くこいつを倒さないと……。

そんな焦りが後押しして、次の一撃に力がこもる。

「ハアアアッ！」

右方向と左方向の両方向から、力のこもった一撃が繰り出される。

ウェルトはそれのブレード部を、素手で止めた。

「っ!?!」

その時に浮かべていた顔は・・・確実に青年を殺すと物語っていた。

「次は俺の番・・・だな」

彼は静かに言った。

その瞬間、青年の両手に展開していたステイアブレードが折れる。

「なっ!?!」

青年が驚いた瞬間、右頬に強烈な殴りが入る。

青年の体は、いとも簡単に地面から離れた。

「くっ!?!」

体をひねり、地面への着地を試みるが、ウェルトがそれを許さない。

着地する瞬間、ウェルトは右手に光素ステイアを展開していた。

青年の爪先が地につくのとほぼ同時、彼の右手が拳をつくり、青年



の頭を下方向に殴り、頭を地面へ叩きつける。

「……っ!!」

叩きつけられる痛み、青年は声にならない声をあげる。

立ち上がるかと試みるが、痛みで思うように立ち上がれない。

「く……そ……っ!!」

足音が近づく。

音を聞いた感じ、そこそそ早足で接近している。

「最後に聞こうか、なんでエトをクロムにした？」

ウェルトの質問に、青年は答える。

「俺のご主人は気まぐれでね……あの子をクロムにしたのも、なんとなくだと聞いている」

その解答に、ウェルトの顔が更に引きつる。

それと同時に、ウエルトの右手に高出力の光素ステイアが収束される。

それが無言で放たれようとした瞬間……。

「ウエ……ルト、ダメ……」

「エトツ!?!」

死んだと思われた少女が、彼の前に現れた。

少女は口を開く。

「ウエルト……コロシチャダメ。カミサマハ、ワルイコトヲシタヒトノコトハ……イキテツグナイヲサセルツテ、ウエルトガオシエテクレタンダヨ」

「……っ!」

次の瞬間、右手に収束されていた光素ステイアが空気中に拡散した。

自分が彼女らに教えたこと……それを自分が出来ていなかった。

ウェルトは、思い出させてくれたエトを、力強く抱き締めようとした。

しかし、寸前でガクツと力が一気に抜け、その場に倒れこんでしまった。

「……………」

青年は立ち上がっていた。

そして、エトを見つめている。

「なるほど…………お前らがあいつの生きる目標か」

「……………」

エトが首を傾げる。

そんなエトを見て、青年は薄く笑う。

「…………アナタツテ、ウェルトニソックリ。ワライカタモ、フンイキモ」

そうやってエトは、青年の方に近づいた。

「俺はこいつみたいに、命をかけて守るものなんてないさ・・・だから、こいつには勝てないんだろうな」

「・・・ソレガ、ウエルトトタタカッテルトキニ、ウゴキニマヨイガアツタリユウ？」

「・・・そうかもな」

青年は、ウエルトの方を見る。

彼は、ピクリとも動かない。

「少女、あいつはもうじき体内スティアが尽きてくたばる」

「ウエルトガ・・・シンジャウノ？ ソンナノイヤダヨ」

エトはうつむく。

「・・・助ける方法はある、しかしそれはお前が犠牲にならねばならない」

「ギセイ・・・モウダレニモアエナクナルノ？ ソンナノイヤダヨ」

青年はエトの肩を持ち、首を横に振る。

「そうじゃない、お前はあいつの体内スティアとしてあいつと一緒に生き続けるんだ」

「ウエルトト・・・イッショニ・・・。ウンツ、ソレデウエルトガタスカルナラ・・・」

エトの同意を得たところで、青年はエトの足元に白い光を放つ魔方阵を出現させる。

エトはウエルトの顔の近くに行つて、彼の顔にそつと小さな手を当てる。

『ウエルトトアソソダトキノコト、イマデモオボエテルヨ』

ウエルトからの反応はないが、エトは話し続ける。

『モウイッショニアソベナイケド、ウエルトノソバナズットイルヨ。ダカラ・・・』

少女の体はほとんど光になっていた。

それなのに、彼女の顔からはなぜ笑顔が溢れているのだろうか。

そんなエトは、最後にこういった。

『今までありがとう、ウエルト。大好きだよ』

そう言い残して、少女は完全に光となった。

その光は、ウエルトへと入っていく。

エトの暖かな光に、気を失っているはずのウエルトの目から、涙が零れていた。

青年の姿も、もう無かった。

数分後、フォルカ達は倒れているウエルトを見つけた。

彼の顔にあつた涙腺を見て、一同はウエルトに何があつたのかわからなかったが、苦しい思いをしたのだということがどことなく感じられた。

第29話〈ディスペア 後編〉（後書き）

青年は森の開けたところで足を止める。

「あの子クロムはどうだった？」

突如響く女性の声。

青年が見たのは、フォースナイト四素騎士のシエリナー・レリクシアの姿だった。

「貴女の思惑通り、僧侶を倒すまではいきませんでした」

「そう、やっぱりね」

シエリナーの顔に、笑みが浮かぶ。

「二十年前に放ったあの子と、こんな形で再開するなんてね。貴方も嬉しいでしょ、ディシア」

「……………」

ディシアと呼ばれた青年は、黙り込む。

「そうよね、兄弟といってもいいくらいの存在と死闘を繰り広げてきたんだから・・・辛かったんでしょう?」

「あいつは、こちらを覚えていませんでしたので平気です」

「そう・・・」

おさまらない笑みを、シェリナーは隠そうとしない。

そして、こつ咳いた。

「・・・必ず貴方を私の物に戻してあげるわ。ウエルト・・・いえつ、ウエルティオ」

シェリナーの含み笑いが、静かな森に響いた。



### 第30話 小さな変化

・・・」

フォルカは静かに、ウエルトを見守っていた。

数時間前に起きた戦闘で、ウエルトは致命傷は負ってないものの、倒れたまま起きる気配がないのだ。

・・・フォルカ、まだ起きてたんですね」

あっ、クラス」

部屋を僅かに照らすランプの光が、彼女の体を照らす。

時刻はおよそ朝方の二時。

普通の子供ならとっくに寝ている時間である。

クラスこそ、寝なくて平気？」

そう聞くと、クロムですから」と言っつて首を縦に振った。

フォルカこそ、普通のヒトなんですから、ちゃんと睡眠をとって下さい」

寝たいんだけど、ウェルトさんのことが気になって寝れなくて・・・」

フォルカは少しはにかんで見せると、クラスはやっぱりと口元を緩めた。

あっ・・・」

どうかしましたか、フォルカ？」

急に何かに気付いた様な声を出したフォルカに、何かあったのかと少し不安そうにクラスは近づいた。

クラス・・・今笑ったよね」

えっ・・・私が、笑った？」

クロムは感情を持たない。

そのはずなのに、彼女はやっぱりと笑って見せたのだ。

・・・フォルカ、隣に座っていいですか？」

うん、いいよ」

確認をとった後、クラスはゆっくりとフォルカの隣に腰を下ろした。

フォルカ、少しだけ・・・私の話を聞いてくれませんか？ 聞きたくないなら私の独り言にしてもらっても構いません」

嫌じゃないよ、だから・・・ちゃんと聞いているよ、クラスの話」

フォルカの言葉に少し安心して、クラスはゆっくりと口を開いた。

私・・・本当にクロムなんですか？」

・・・どっしてそう思うの？」

フォルカは、クラスの方にしっかり顔を向けた。

私達が捕まったとき、フィニカさんが生体検査の結果、私がクロ

ムであることは分かりました。 ですが・・・私はクロムとして知って当然のことを知りませんでした。 それに、私はクロムが使える技の基礎技しか使えない・・・更に持つ筈のない感情まで持つてしまっている。 だから・・・不安で」

そういつて、クラスは顔を下に向けた。

彼女の体が微かに震えているのが、フォルカの目にも映った。

クラス・・・」

・・・すいません、私が一方的に話してしまいました」

クラスの謝罪に、フォルカは そんなことないよ」といって首を横に振る。

僕がクラスの話の話を聞くなって言ったんだから、気にしないで」

その一言の後、少しの沈黙が続く。

しばらくして、先にフォルカが口を開いた。

僕もね・・・自分が本当に居ていい存在なのかなって思ったりするよ」

・・・？なぜです。フォルカにはエリアルやユニイ、ウエルトさんやドールも・・・フィニカさんだっているのに」

クラスはこちらを向いて、首を傾げた。

その仕草がまるで、なんでも疑問に思える子供の様で、少し笑いが込み上げた。

そんな彼女の疑問に、フォルカは答えた。

僕が・・・物心つく前に父さんは死んじゃって、顔もわからないんだ」

・・・寂しいですか？」

寂しい・・・かな。でも兄さんがずっと傍にいてくれてたし、守ってくれてたからそんなに寂しさは感じなかったよ。でも・・・」

フォルカの言葉が止まる。

クラスが不安気に、フォルカの顔を覗き込む。

「フォルカ？」

「ごめん、話してるのは僕なのに黙りこんじゃって」

そういつてフォルカは、一回深呼吸して話を再開し始めた。

「でもさ・・・時々思うんだ、なんで兄さんは僕なんかを守ってくれてたんだろうって。勉強が出来る訳でもないし、運動オンチだし・・・すぐに兄さんに頼ってたのに」

「・・・・・・・・」

クラスは静かに思った。

フォルカの言っていることは、何かひっかかる。

(何でしょう、この感じ。私も・・・フォルカのような思いを、した事がある?)

考えを深めようとした時、フォルカの言葉が聞こえてきたので、あわててそっちに耳を傾ける。

「でも・・・旅を始めてから、なんとなくわかった気がするんだ。兄さんはそう思ってたかは知らないけどね」

「フォルカなりの答え・・・ですか？」

「うん、そうなるね」

フォルカは目を閉じて、こういった。

「誰かを守りたい、助けたいって思うのは・・・強いからだよ」

「強いから・・・守りたい？」

「そう。確かに強くても何かを守るうって思わない人もいるけれど、本当の強さは他人への優しさの中にあるんだって・・・ウエルトさんと兄さんを重ねて見て、そう思った」

そういつてフォルカは、立ち上がる。

すると急に欠伸が出てきて、目元に涙が溜まる。

「・・・私もです、フォルカ」

「・・・何が？」

クラスの一言に、フォルカは反応をした。

彼女はこちらがちゃんと聞いている事を確認して、話を続けた。

「フォルカを見てると・・・自分を見てるみたいないな気分になります。似たような事で悩んだり、似たような事を思ったり・・・」

「うん・・・僕はクラスを守りたいし、エアリアルやユニィやドール、ウェルトさんの手助けもしたい。もちろん、兄さんも助けたい・・・」

二人の脳内に浮かぶ、一人の男。

どんな理由があるかは知らないが、彼は今クロム研究施設長を守り支える『四素騎士』の一人となっている。

「何か理由があるんだろうけど・・・兄さんがナイトやシエリナーの手助けをしてるなんて、考えたくないな」

「・・・・・・・・」

クラスは黙って聞いてくれていた。

すると、彼女も立ち上がり、フォルカの右手を掴んだ。

「クラス・・・？」

「少しだけ、思い出したんです。手を合わせて二人の誓いを言い合



い、共有すると誓った事をちゃんと実行できるそうです」

「へえ・・・なんだか不思議だね。でも、本当に実行出来そうな気がする」

そういつて、フォルカは笑う。

そして、クラスの手を握り返した。

「じゃあ僕から言うね。僕は・・・みんなの事を守りたい。力だけじゃなく、心の支えになりたい。・・・ちよつと実行は難しいけど、旅を始めて、皆と出会って・・・そう思った」

「私は・・・エリアルのお父様が言われた通り、ヒトになれるように頑張りたいです。さっき言った様に、不安ではありますが・・・フォルカやエリアルの様になってみたいという気持ちもあります」

二人は、握っている手に力を込める。

しばらくして、握り合っていた手を離した。

「・・・じゃあ、僕はもう寝るよ。さすがにこれ以上起きてたら、明日動けないし」

「はい、おやすみなさいフォルカ」

クラスは丁寧に頭を下げて、そういった。

「おやすみ、クラス」

そういつてフォルカは、寢床に戻った。

去っていく彼の背中を、クラスは柔らかな表情で見続けていた。

第31話〜記憶〜（前書き）

「おはよう、フォルカ」

「あつ、エリアル。おはよう」

朝7時頃、フォルカはエリアルと廊下で会った。

「ウエルトのどこに行くの？」

「うん、エリアルは？」

「クラス探しよ。私が寝てる間に、どこか行っちゃってね」

クラスとは、昨夜ウエルトのいる部屋で会った。

おそらく彼女のことだから、あのあとずっとウエルトのことを見  
ていた可能性があった。

「多分……ウエルトさんのところだよ、昨日の夜に会ったし」

「マジッ!? 本当クラスって心配性なんだから」

そういった後に、小さい声で「まっ、私も心配だけどね」と言った。

「あっ、エリアルにフォルカ」

背後から、エアリアルを探していた者の声がした。

「クラスツ、どこか行くならちゃんと言ってよね！」

「すみません、エリアル」

「クラス、ウエルトさんの様子はどう？」

フォルカの質問に、クラスは首を横に振る。

「フォルカ、エリアル、私はウエルトさんの食事を念のため取って来ますから、彼の様子を見ていて下さい」

「うん、わかった」

「まかせてっ」

その言葉を聞いて、クラスは厨房へ向かった。

フォルカ達も、ウエルトのいる部屋に向かった。

「やっぱり起きてないわね」

「うん」

目をつぶったままの彼を見て、クラスを取ってくる食事も無駄になるのかと、フォルカは思った。

そんな時、フォルカの腰元が光りだす。

「・・・？」

フォルカは腰元のポケットに入れていた、素器を取り出す。

素器から発していた光は、どんどん強くなる。

「わわっ、なんで!？」

「どうしたのフォルカ？」

エリアルの声が聞こえた瞬間、目の前が真っ白な光で包まれた。

「フォルカッ！！？」

エリアルの声は、もう彼には届いていなかった。

### 第31話〜記憶〜

「……んっ」

目を開けたフォルカのの前には、真っ黒な空間しかなかった。

「エリアルツ、ユニイツ」

声を出して名前を呼ぶが、返事は聞こえない。

「ドールツ、クラスツ」

名前を呼び続けるが、やはり返事はない。

「……何なんだよ、一体？」

立っている感覚がしない。

体が宙に浮いている様な、何とも不思議な感じが、フォルカの体を襲う。

「えっと・・・確か僕の素器が急に光りだして、気がついたらここにいて・・・」

状況を整理し始めるが、全く分からなかった。

「うう、全然わからないよ・・・っ？」

頭の中がごちゃごちゃになってパニック状態の中、目の前にいつの間にか扉が出現していた。

扉には、“Wellt-o”と書かれた木札が掛けられていた。

「扉・・・何で急に出来たんだろう。それにこれって“ウェルト”って書いてある」

フォルカは試しに、ドアノブを回して見る。

鍵はかかっておらず、スムーズに回る。

少し開けて中を覗いて見ると、フォルカのいる空間とは真逆の、真っ白い空間が広がっていた。



「ウエルトさん・・・いるんですか？」

フォルカが一步踏み出す。

しかし黒空間とは違い、体は浮かず急降下する。

「うわああああ〜っ！！！！」

下に落ち続けていると、床が見えた。

白の正方形が何個も連なつた、誰でも一回は見たことのある床だ。

フォルカはその床に、勢いよく頭から落ちた。

しかし、当たった時に音は一切出ず、フォルカ自体も全く痛くはなかつた。

“痛・・・くない、何で”

そういったとき、後ろから声が聞こえた。

フォルカが振り向くと、そこには薄茶色で短髪の子供がいた。

見た感じでは五、六歳くらいに見える。

子供は積み木をしていて、積み重ねては壊している。

「・・・違う、こんな形をつくりたいんじゃない」

声の低さからして、男の子だと言ったことがわかった。

「また積み木をしてるのか、ウエルティオ」

先ほどは何もいなかった背後から、聞き覚えのある声が聞こえた。

顔だけ声のした方に向けると、ウエルト似の青年が立っていた。

「うん、でもいいのが出来ない」

「そうか・・・」

青年は男の子の方に歩きだす。

そして男の子の隣に座り、長方形で赤色の積み木を手を取った。

「手伝ってやるうか？」

「・・・うん、ありがとうディシア」

二人は協力しながら、積み木を積み重ねていく。

あと少しで完成するという所で、ウエルティオと呼ばれた少年は右手を横に振り積み木を崩す。

「ウエルティオ……」

「ごめんデイシア、でも……俺の望んだ形じゃなかった」

そういつてウエルティオは立ち上がり、デイシアに背を向けた。

「何で俺はデイシアと違うんだろうな……同じ人から生み出されたのに」

「……お前は“強さ”を求め、その強さにあつた人格へ成長するようにプログラムされている。俺は姿を変えず、細かいステイア制御を出来るようにつくられた」

デイシアは右手を顔の前くらいまで上げ、光素ステイアを集めて刃を形成する。

「だが……俺たちはヒトの兄弟と何ら変わりはない、そうだろう  
エルティオ」

「そうだねデイシア、だからこそ嫌なんだ……強さを求めてしま  
うこのプログラムが」

ウエルティオは両手を力一杯握り締める。

その仕草を見て、デイシアが呟く。

「お前は強さにあつた人格形成を行う際、早くその環境に慣れる為  
に過去の記憶を自動消去してしまうからな」

デイシアの一言に、ウエルティオは彼の方を向き、勢いよく抱きつ  
いた。

「俺……デイシアのこと忘れたくない」

「ウエルティオ……」

抱きついてきたウエルティオの頭を、デイシアは優しく左手で撫で  
る。

「もし……お前が俺のことを忘れてたら、俺が思い出させてやる。  
お前が俺に拳を向けるなら俺も刃を向け戦う。殺す為じゃない、思  
い出させる為いだ」

「ディアシア……」

ウェルティオはディアシアから離れる。

そして、微かに微笑みこういった。

「……絶対に思い出させるよ、兄貴」

気付いたら二人の姿はなく、フォルカだけ白い空間に立っていた。

“……今のつて、ウェルトさんの過去なのかな？”

だとしたら、ウェルトはディアシアと兄弟ということになる。

“最後にディアシアのこと兄貴って呼んでたから、ウェルトさんが弟だよね”

自分なりの考えを述べていると、再び声が聞こえて来た。

「本当に・・・この町は素敵なところですね。司祭の故郷ですし」

「シスターに気に入ってもらえてよかったよ。まあ・・・ホント何にもないところだな」

「そこがいいんですよ、にぎやか過ぎるのは苦手ですから」

風景と登場人物が急に変わり、フォルカは少し戸惑う。

“ なっ・・・ここは、ミセットタウン？それにあそこにいるのは・・・若いシスターと司祭だね？”

二人は楽しそうに、町の入り口付近を話しながら歩いていた。

「騒がしいのは苦手ですが・・・子供は授かりたいです」

「そうだな・・・」

道を共にして四年、普通なら子供を既に授かっけていてもおかしくない月日である。

しかし、二人の間にはまだ子供が授からないのだ。

「子供を授かったとしたら・・・司祭は男の子と女の子、どちらが

よろしいですか？」

「私は・・・男の子がいいな。元気に育ってもらいたいしな」

「フフフ・・・そうですね、お外で元気に走り回る姿が見たいですね」

こんな感じで話していると、シスターの足がピタッと止まる。

「・・・?どうしたシスター」

「いえ・・・あそこに子供が」

司祭は、シスターが指を差す方を見る。

そこには、確かに子供が立ってこちらをじっと見ていた。

「どうしたの、町の外は危ないからこっちに来なさい」

シスターの呼び掛けに、子供はゆっくりとこちらに近づいてくる。

近くに来た子供の服を見て、二人は息を飲んだ。

この子の服は、ひどく汚れているうえボロボロだった。

「君っ、何があつたんだ！？ 親に何かされたのか！？」

「・・・何のこと？」

子供は首を傾げる。

「だって貴方の服・・・ボロボロじゃないの。親に何か暴行されたんじゃない？」

シスターが子供の肩に手を置く。

「違う。これは俺が森を通った時に魔物と戦って、その時にボロボロになった」

「魔物だとっ！？」

司祭が大声を出す。

見た目五歳くらいの子供が魔物と戦って来たと言っただ。

「一人で魔物を倒すなんて・・・貴方、強いよね」

「俄かに信じ難いが・・・森を抜けて来たのだから本当なんだろう。」



「……まるで言い伝えのようだ」

「言い伝え……？」

司祭の一言に、子供は食い付いた。

シスターは肩に置いていた手を除け、説明を始めた。

「言い伝えはね……」  
『我らが神、子供の姿をして害をなすものを  
浄化す』  
「と言うものよ」

「神……？何それ」

再び頭の上に？マークを浮かべ、子供は首を傾げた。

「神と言うのは、簡単にいえば世界で一番強い存在だ。ただ強いだけではない、多くの人に愛され、多くの人を守るのが神だ」

「神……一番強い、人を守る……」

子供は目を閉じ、自分に暗示をかける様に司祭の言葉を繰り返した。

そして、目を開きこついった。

「俺・・・神になる！」

その言葉を聞いて、シスターは微笑みながらこういった。

「神様になるの、ならうちの教会に来ない？両親が許してくれたら  
だけど」

「親・・・覚えてない、どこから来たのかも」

その一言に、二人は驚いた。

「そつか、なら教会に来なさい。君の名前は？」

「えっと・・・ウエ、ウエル・・・ウエルツ、ウエルトだよ・・・  
・多分」

「そう、じゃあ今日からよろしくねウエルト」

シスターが差し出した手に、ウエルトは頷きながら手を伸ばした。

“ . . . . . ”

フォルカは、黙ってウエルトを見ていた。

知るはずのなかった他人の記憶。

それを自分は見てしまった、知ってしまったのだ。

“ 僕の素器って一体 . . . あっ、あれは ”

考えようとした時、景色は白に変わり、見覚えのある人物が現れた。

“ ウエルトさんっ!! ”

「 . . . ボウズツ、何でここに? 」

フォルカはウエルトに説明した。

自分の素器が光りだしたこと、気がついたらここにいたこと。

そして、ウエルトの記憶を見てしまったことを。

「 そうか . . . ボウズも見ちまったか、俺の記憶。なら . . . 俺の  
正体も分かっちゃったか 」

「えっ、そこは見てないです」

「・・・なら教えてやんよ、俺の正体」

ウェルトは一回深呼吸して、口を開いた。

「俺とディシアは、シェリナーによつて生み出された『プシユケ』  
と言う新型の種族らしい。スティアを制御出来るのは、アルフィの  
遺伝子と光素スティアを元にヒト型に形成したからだそうだ」

“うそ・・・シェリナーにつくられたんですか？ウェルトさんとデ  
ィシアは”

「そうだ」といってウェルトは頷いた。

フォルカは喋ろうにも言葉がでず、口だけ動き上手く話せない。

「言葉にならない・・・つてところか。無理もねえ、敵の幹部クラ  
スにつくられた奴と一緒に旅してたんだしな」

そういつて軽く笑うウェルトが、どこことなく寂しそうに見えた。

「なんつつか・・・いやな奴だな、俺。子供ん時から人様に甘えて

た・・・デイシアにしる、司祭達にしる、たくさん奴らに世話になってんに一人でデカくなった見たいなこと言つてよ」

“・・・あのっ”

フォルカはようやく言葉を口にする。

ウエルトはそれに、静かに耳を傾ける。

“それは・・・皆がウエルトさんのことを、心の底から好きだからじゃないですか？ 血の繋がりはなくても・・・本当の家族だっと思っていてからだど、僕は思います。嫌いなら、お世話なんてしないと思うし・・・”

「ボウズ・・・」

ウエルトが、フォルカに近づく。

そして頭に手を置き、髪の毛がグシャグシャになるくらい撫でた。

“わっ・・・”

「あんがとなボウズ、今ので大分気持ちの整理が出来た」

“今の子？”

「ボウズの言ったこと、なんつうか・・・励まされた。だから、あんながとな」

ウエルトの顔に、笑顔が浮かぶ。

久しぶりに見た彼の笑顔は、どことなく幼さがあった。

“・・・ウエルトさん、帰りましょう。エリアル達が心配してました”

「・・・そうだな、久々にあいつらの面が見てえしな」

視界が急激に白へ変わり始める。

フォルカは思わず目を閉じた。

そんな時、微かに声が聞こえた。

「じゃあ・・・また後でな、フォルカ」

“えっ・・・”

ウエルトに名前で呼ばれたことに動揺し、名前で呼んだ理由を聞くとした時、意識は途絶えた。



### 第32話〜始動〜

「・・・んっ」

フォルカは目を開く。

すると、すぐにエアリアル顔が視界に入る。

「エ・・・リアル？」

「フォルカツ！よかった、ちゃんと起きてくれたっ！！」

エアリアルが勢いよく抱きついてきて、フォルカは顔を真っ赤にした。

「わああっ！エアリアルッ！！？」

「あゝっ！フォルカお兄ちゃん、顔真っ赤だよ！」

ユニイの指摘で、改めて抱きつかれていることを認識してしまい、フォルカは更に顔を赤くする。

「フォルカの顔・・・トマトみたいです」



「フンツ、思春期真っ只中の若造が。フィニカ様なら軽くあしらっておられるところだ」

天然的感想を言うクラスと、鋭く突っ込んでいるようでフィニカの事を神聖視するドール。

双方の以外にもダメージがある言葉と、エリアルに抱きつかれているという事実で、違う意味でまた倒れそうになる。

「フォルカ君、倒れたって聞いたけど大丈夫？」

そんな時、シスターが救世主に匹敵するタイミングで部屋に入ってきた。

「あっはい、もう大丈夫です」

「それはよかったわ。・・・早くウェルトの口からも、その言葉を聞きたいわ」

シスターがチラツとウェルトの方を見る。

そして、悲しそうな表情を浮かべた。

「ウエルトさんなら、きつと・・・いえ、絶対に大丈夫です。だから、待ってあげて下さい」

「フォルカ君・・・ありがとう。そうね、私達が待ってあげないとね」

シスターが、自分に言い聞かせたその時・・・。

「・・・んっ」

「っっ!!」「っ」

ウエルトの方から、声が聞こえた。

全員が一斉に、彼の寝ていた方へ振り向く。

目に入ったのは、数時間ぶりに起きた、子供らしさの残る青年の姿だった。

この瞬間を、どれほど心待ちにしていた事か・・・。

「ウエルトッ!!」

エアリアルが近くに駆け寄る。

そんな彼女の方に顔を向けて、ウェルトはゆっくりと目を開いた。

「・・・エリアル嬢ちゃんか、相変わらず元気そうだな」

「私も元気にしてたよっ!!」

そついいながら、ユニイが頭からウェルトに特攻を仕掛けた。

彼女の頭は、見事にウェルトの腹部を捕えた。

「ぐふうっ!!・・・ユニイ嬢ちゃんは、もう少しその有り余った元気を抑えるよ・・・」

「無理っ!この日の為に、力を温存してたんだから暴れたいのっ!!」

急に、騒がしくなる。

しかし、そんな騒がしさがなんとなく落ち着きを与えた。

「全く・・・騒がしい奴らだな」

口では冷たく言っているドールだが、どこことなく楽しそうだった。

「フォルカ・・・ウエルトさんも起きたことだし、そろそろこの町を出発しませんか？」

「あっ・・・うん、そうだね」

そういつてフォルカは、シスターの方へ近づいた。

「シスター、何か知っていることはありませんか？クロムのも、アルフィのことも、なんでも構いません」

「そうね・・・素石そせきのことは知ってるかしら？」

シスターの言葉に、首を横に振る。

するとシスターは、素石のことを話してくれた。

「素石・・・スティアが石に蓄積され、スティアによって色や性質が変わる宝石の様なものね。素石は色でスティアの属性を判別し、その色と同じスティアをある程度制御出来るようにするものよ」

そういつてシスターは、フォルカの素器を指差した。

「素器にも素石は使用されているわ。フォルカ君のは・・・あら珍しい、光素石ひかりせきが使われているわね」

「……僕の素器は珍しいんですか？」

ええ、とシスターは言って説明してくれた。

「光素石自体は珍しくないのだけど、素器には使われることが滅多にないのよ。火素スティアや水素スティアの方が、物理的なダメージが与えられるから」

「へえ……」

改めてフォルカは、自分の素器を見る。

そして、力強く握りしめた。

「……そうだわ、素石のことを詳しく知りたいならアルフィの村に行くといいわ。あそこには、素石に詳しいエプロズィークさんがいるし……」

「エプロズィークツ!？」

フォルカはユニィの方を見る。

忘れている人もいるだろうが、ユニィのフルネームは『ユニィ・エプロズィーク』である。

「ユニイツ！」

「なあ〜に？フォルカお兄ちゃん」

ユニイはウエルトから離れて、フォルカの方へ近づいた。

「ユニイ、お母さんの名前は何ていうの！？」

「ママの名前？アヤ・エブロズィークだけど、それがどうしたの？」

ユニイの言葉を聞いて、シスターがこういった。

「あらあら貴女、エブロズィークさんの娘さんだったの？どつりで秀囲気が似てる訳だわ」

フォルカは、ユニイに必死に頼み込む。

「ユニイお願いっ！アルフィの村に案内して！！いろいろな事が分かるかもしれないんだ」

「いいよ〜、特に面白くはないけどね」

ユニイの承諾を得て、フォルカはホツとした。

そして、旅の仲間たちにこういった。

「みんな、目的地はアルフィの村でいいかな？」

「いいんじゃない？行きましょ」

「了解しました」

「・・・私に断る理由はない」

三人からは了承を得ることが出来た。

フォルカはウエルトの方を向く。

「ウエルトさんはどうしますか？この町に残ってもいい・・・」

「行くに決まってるだろうが、今更連れてかねえなんてなしだぞ」

そういつてウエルトは、シスターに近づく。

「・・・ちよつくら、兄弟の面拜んでくるわ」

「家族の事、思い出したのねウエルト」

「ああ」

短い返事の後、小声でシスターに何か話していた。

少しして、シスターはウエルトの胸元にそっと手を置いた。

「そう・・・そこにいるのねエト。・・・ウエルトのこと、守ってあげてね」

そういつてシスターは、ウエルトから手を離す。

そしてその手を自分の胸元の前で握りしめ、祈りながらこういった。

「司祭の分まで祈ります、貴方たちに神のご加護があらんことを・・・」

「おうつ、じゃあ行ってくる」

ウエルトはシスターに背を向ける。

そしてフォルカたちの方へ歩みより・・・



「行くぞ、ボウズ」

とだけ言った。

フォルカは頷き、ウエルトと並んで教会の出口まで歩きだした。

その後に、残りのメンバーも続いて歩きだした。

廊下に響く、乾いた音。

音の主は、黒衣に身を包んだ四素騎士の一人、ニグレドだった。

「来たわね、ニグレド」

「何だシエリナー、用事と言うのは？」

廊下の壁にのさがっているのは、こちらも四素騎士の一人、しんのう神脳のシエリナーであった。

「ちょっと実験に使う素石が切れそうなの。だから、アルフィの村に行つて素石を取つて来て欲しいの。案内役にセレンを同行させる

わ

「・・・了解した」

そういつて、ニグレドはシェリナーに背を向け歩き出した。

しばらくの間、廊下を歩く靴の音だけ響く。

外へと出られる扉付近に、見覚えのあるクリーム色の髪の毛が見えた。

「あつ、ニグレドお兄ちゃん」

「セレン、任務がでた。アルフィの村までの案内を頼む」

「知ってるよ。だからここで待ってたの」

そういつて、セレンは自分の身長以上の大きさの大剣を、風素ステイアを使用して体の横に浮かせる。

「だが・・・大都の研究者に、素石を渡してくれるのか？」

「大丈夫つ、私はシェリナーさんのお使いで何回も取りに行ってるし、素石の扱いが上手なアルフィは私の知り合いだよ」

「・・・そうか」

ニグレドは、外へと続く扉に手で触れ、力を込める。

扉は、キィ……と静かに音を立て開いた。

「任務開始だ、行くぞセレン」

「うんっ！」

セレンの足元には風素スティアが、ニグレドの足元には闇素スティアあんそが展開される。

次の瞬間、二人の姿はすでになくなっていった。

「……二人は行ったよ、マスター」

「……そうか」

研究施設の頂上付近の部屋の窓から、ナイトが二人の出撃を見て言った。

部屋の奥では、一人の男性が書類に目を通していた。

男性は綺麗な黒髪のショートヘアで、オールバックになっているのが特徴的だった。

「計画は順調なの？」

「ああ・・・二人が素石を持って帰れば、かなり完成形に近づく」

「そうなんだ、楽しみだな・・・」

そういつてナイトは、部屋にある見るからに値が張りそうなソファーに座る。

「あつちは成功すると考えて、残すはクラスのみだ」

男性は書類を机に置き、ナイトに目を向ける。

そして、自分のクロムであるナイトにこういった。

「ナイト・・・お前は再びクラスの奪還にあたれ」

「了解です・・・」

その言葉を待っていたと言わんばかりに、ナイトは勢い良く立ち上がった。

そして、部屋の扉を開け出るといふ時に、

「じゃあ行ってきます、マスター『ヴィステル・バスターア』」

と言って、部屋を出た。

ヴィステルと呼ばれた男性は、ナイトが部屋を出たのと同時に、再び書類に目を通し始めた。

### 第33話 道中

「……ふわあ〜っ」

メンバーの一人が、大きなあくびをする。

あくびをしたのは、フォルカ達の中で最年長のウエルトだった。

「珍しいわね、ウエルトがあくびするなんて」

「確かに……初めて見た気が」

エリアルの一言に、そういえばとフォルカが反応する。

「たかがあくびだろ？そんなの、俺じゃなくてもするだろうが」

そういつてウエルトは、首をゆっくり左右に傾ける。

曲げた時に、何かが折れるような音が響く。

「あっはははは！ー！ジジイ臭いよ、ウエルト兄ちゃん！ー！」

「それに比べて、ユニイはすごく元気ですね」

クラスの一言に、ユニイはその場で両手を勢い良く上下に振った。

「ふう〜ふふんっ　今ならウエルト兄ちゃんにも勝てそうな気がするわぁ〜ん」

「いや・・・さすがにそれは無理だろう」

ドールの言葉に、「やってみなきゃわかんないもんっ!」とユニイが抗議する。

「ドール嬢ちゃん、そういつてやるな。確かに今の俺じゃあ、ユニイ嬢ちゃんに勝てねえかもな〜」

「・・・どっついうことだ?」

ドールがウエルトの方を向く。

それを合図に、ウエルトは全員に話した。

ディシアのこと、自分のこと、そして　エトのことも・・・。

「・・・エトは、ウエルトのスティアになっただってこと？」

「更に、ウエルトさんはあの青年 ディシアの弟だと・・・」

「ああ・・・」

ウエルトの目に、強い意志を感じる。

その目は、嘘は言っていないと物語っている様に見えた。

「まだ完全にエトのスティアと一体化出来てねえから、光素スティアを扱えねえんだ。だから悪いが少しの間、俺は非戦闘要員だ」

「・・・わかりました、ウエルトさんの分まで僕が頑張ります！」

フォルカが、ウエルトに宣言する。

「フォルカじゃ頼りないから、私が二人分頑張るわっ！！」

「エリアルツ！？」

エリアルにあっさり宣言を撤回されたフォルカは、驚きが隠せなかった。

そんなフォルカを見て、してやったりと言わんばかりの笑みを、エ



リアルは浮かべた。

「二人がいた所でそんなに足しにならないよっ！だ・か・らあゝ、私のファイアで敵をみくんな黒焦げにするんだからあゝゝゝ！！」

「「ユニイツ！！？」」

二人を押し退けて、ユニイが手足をジタバタさせながらエアリアル  
の発言を撤回する。

「ちょっとユニイツ、フォルカはともかく・・・私はちゃんと戦えるわっ！！」

「とか言って・・・散々魔物に絡まれてやられそうになったのは、どこのだれかなあゝゝん？」

「うっっっ」

本当のことを言われ、グサアツと聞こえてきそうなくらい、精神的にダメージを負う。

その様子を暖かい目で見る者と、冷たい視線を送る者がいた。

「エアリアル達・・・楽しそうですね」

「急ぐと言っていたのに・・・呑気な奴等だ」

ドールがため息をつくとき、クラスはクスツと笑う。

「・・・？何が可笑しいんだクラス」

「いえっ・・・余程フィニカさんを元に戻したいんだなと思って」

「クロムとして当たり前のことだろう？」

「そう・・・ですね。クロムなら当たり前なんですよね」

笑っていたクラスの、表情が変わる。

その表情を見て、ドールはハツと何かに気付く。

「あっ・・・いや、お前のことを悪く言ったつもりは・・・」

「分かっています。ドールはそんな事言うクロムではありませんから・・・」

そういつてクラスは微笑もうとするが、上手く表情がつかれない。

ドールの不安が、徐々に大きくなる。

「ドール、そんな不安そうな顔をしないでください。本当に大丈夫ですから……」

そういつて、ドールに対して手を伸ばそうとした。

しかし……、手はドールに触れる事はなかった。

触れるより前に、見覚えのある少年に握られていたのだ。

「駄目だなあ、ドールは……クラスに気を使わせるなんてさ」

「っ!!」

「貴様はっ!!」

ドールが咄嗟に水素スティアを収束させるが、相手側は既に収束が完了していた。

「『プラスト・ストーム』っ!!」

緑色の光線が、ドールめがけて放たれる。

ドールは、瞬時に収束した水素スティアを術式に変換。

『アクア・ウォール』を発動させ、凝固フリーズさせると、見事に氷の壁が完成した。

光線が壁に衝突する。

その瞬間、壁は砕け、光線は風となった。

「クラスツ、ドールツ！」

フォルカを筆頭に、残りのメンバーが集まる。

彼らの目に映ったのは、クラスの手をとる少年の姿だった。

フォルカ達は知っていた。

この少年は……。

「……ナイトツ……！」

「久しぶりだね……まあ、君たちみたいな害虫に覚えて貰ってても嬉しくないけど」

四素騎士の一人、『狂嵐キヤウランのナイト』だった。

彼の顔は、恐ろしいほど満面の笑みを浮かべていた。

「クラスは渡さんっ！」

そういつてドールは、いつの間にやら収束していた水素ステリアを  
変換。

するとドールの足元に、まるで影の様な水溜まりが出現する。

その水溜まりを利用し、ナイトのいる方向へ猛スピードで接近する。

ナイトはそれを、クラスを抱えたまま後方へジャンプし、距離をと  
る。

着地した時、ピチャツという音が聞こえた。

いつの間にか足元に、ドールの水溜まりが伸びていた事に気付いた  
時には、もう遅かった。

「『フリース凝固』!!」

ドールの声に反応するかの様に、水溜まりは一気に凍り付く。

ナイトは足首までを凍り付けにされ、自由を奪われる。

その一瞬の隙に、ドールは一気に距離を詰め、ナイトの腕を蹴りあげる。

その時、ナイトから離れたクラスの体をしっかりと捕まえ、無事救出する。

「じのっー!!」

ナイトは空いた両手より、風素スティアを圧縮したものを、数発打ち出す。

それを水素スティアでつくった壁で防いだり、避けたりして、ドールはクラスと共に無傷のまま着地した。

「まだまだ修業が足らんよ・・・青二才が」

そういつてドールは、フォルカ達の方へ移動し、ゆっくりとクラスを下ろす。

「お前なんか・・・この僕が負けるものかあゝゝゝっ!!」

ナイトがそう叫んだ瞬間、彼の自由を奪っていた氷が碎ける。

「ちいつ、『昇華』!!」

ドールの声と共に、凍っていた氷が、全て水蒸気に変化した。

「急げっ、長くはもたんぞっ!」

「うんっ・・・ユニイ、アルフィの村はどっちに行くの!?!」

「・・・こっち!!!」

ユニイの指差す方向に、一同は走り出した。

「くそっ!目眩まし程度で・・・っ!!」

ナイトは、風素ステイアを利用して、辺り一面の水蒸気を払う。

そこには既に、フォルカ達の姿はなかった。

ナイトは目を閉じ、静寂を生み出す。

すると、微かに足音が聞こえた。

「そつちかつ・・・」

ナイトは風素スティアを使い、高速で移動した。



### 第34話〜ライシエス〜

大地を、勢い良く駆け抜ける音が複数聞こえる。

「はあ・・・はあ、ナイトは？」

「姿は見えないけど・・・追って来てると思う」

フォルカの問題に、エリアルが答える。

エアリアルの言う通り、ナイトは風素スティアの使い手なので、高速移動なんかは得意分野なのだ。

「みんな頑張つて！！もう少しでアルフィの村だから・・・きゃあつ！！！」

ユニイから、声があがる。

足を止めて振り向けば、ナイトがユニイを持ち上げていた。

「アルフィの村ねえ・・・また面倒な所に行こうとしてるね。あんなちゃんけな所に、クラスを連れていかせる訳にはいかないよ」

「・・・っ！ワタシの故郷を馬鹿にするな！！」

ナイトの一言に、ユニイは怒りが爆発した。

そんな彼女を黙らせるかの様に、ユニイを掴んでいる手に力を入れる。

力を入れるにつれ、ユニイの首が絞められる。

「あっ・・・うう・・・」

「ユニイ嬢ちゃん！！」

ウェルトがナイトに近寄る。

そしてナイトに対し、何発も拳を放つ。

それをナイトは、ユニイを盾にすることも無く、いとも簡単に避けた。

「・・・なんか、この前戦った時と違うね。手加減のつもりかい、僧侶？」

避けながら、ナイトが呟く。

「シエリナーから聞いたよ、君・・・彼女に造られたんだってね」

「何言ってるんだよクソガキ・・・俺は神だぜ？ヒトを造る事はあっても、造られるなんてこたあねえよ！！」

「減らず口をつー！！」

会話を遮るかの様に、ナイトはウェルトにユニイを投げつける。

ウェルトは、ユニイを抱き抱える様にして受け止める。

しかし、予想以上に一撃が重く、力が完全に戻っていないウェルトの体は、ユニイごと地面から離れた。

そのまま二人は、後ろに立っていた木に激突した。

「・・・ユニイ嬢ちゃん、大丈夫か？」

「うん、ウェルト兄ちゃんが抱えててくれたから・・・平気だよ」

木に当たる際、ウェルトはユニイのクッション代わりになり、ユニイへのダメージを軽減させていた。

「さあ、僧侶・・・この前の仕返しをさせて貰おう」

いつの間にか、ナイトは二人の目の前にいた。

ユニイを蹴り除け、ウェルトの前に立ち、風素ステイアの変換を開始。

使おうとしているのは、光線状の風。

ミセツトタウンの地面に、跡をつくる程の威力の風である。

「やめろおーっ!!」

ナイトの背後の方から、フォルカとエリアルが素器を構え、走ってくる。

それを見て、ナイトは表情を曇らせる。

「虫があ・・・僕の邪魔をするなあーっ!!」

変換の終わった風素ステイアを、フォルカ達の方に放つ。

「『ブラスト・ストーム』ッ!!」

放たれた光線状の風を、フォルカ達は左右に分散して回避。

すぐに二人は、ナイト目がけて走る。

「ハアアアッ!!」

先に足の速いエリアルが仕掛けた。

エアリアルは素器はナイフ型、距離を積めて斬撃を繰り返す。

「くっ……虫のくせに」

予想外のエアリアルは斬撃に、ナイトは少しうろたえる。

「フォルカッ!!」

「うんっ!!」

次の瞬間、エアリアルは斬撃の嵐から、フォルカの斬撃にバトンタッチされた。

エアリアルの時ほどの手数はないが、今までのひ弱だったフォルカとは思えない程の鋭い斬撃が繰り返されていた。

パターン化してナイトに避けられない様に、フェイントも自分なりに加える。

「くっ・・・少しはやるようになったじゃないか」

ナイトの言葉に、フォルカは反応を示さない。

今集中力を切らすと、必ず流れを止められると分かっているからだ。

暫くの間、素器の風を斬る音が響く。

すると、フォルカの素器が突如光りだす。

「っ!?!」

突然の輝きに、ナイトは思わず目を反らす。

フォルカはその際に、素器の振りを少し大きくし、勢い良くナイトの腹部を斬り付けた。

「ぐああっ!!」

ナイトは、その場に片膝を付く。

そして、フォル力を睨み付けながら、こういった。

「……やるじゃないか、だけど……この程度じゃあ僕を倒せな  
……っ！？」

そういったと同時に、ナイトの周囲に、赤と青の二色を発する、半円状の障壁が出現する。

ナイトは『ブラスト・ストーム』をぶつけてみたが、すぐに緑光と  
なって、散るだけだった。

「かいそじゅつ解素術を使えないお前には、一生出ることには出来んよ」

「……ドールッ！！」

ナイトは、彼女の名前を恨めしそうに叫ぶ。

そんな子供じみた行動に、ドールは鼻で笑ってやった。

「ぶっ……いくら凄んでも、何も出来ないなら恐ろしくないな」

「くそおおおおっ！！」

心の底から悔しそうな声が響く。

そんなナイトの前に、クラスは立った。

「クラス……」

「ナイト……すいませんが、私はまだ貴方の所に行く訳にはいきません。……本当にごめんなさい」

そういって、クラスはフォルカ達の方へ走って行く。

「あつ……あああつ、クラス……行かないで。君は……君はっ！」

障壁の外に、緑光が出現し集まる。

「なんだ……あれは」

ウェルトが立ち上がりながら言う。

「何だか、ものすごいスティアを感じるんだけど」



ユニイは、後退りしながら言った。

「みんなっ、走れ!!」

ドールが大声で叫んだ。

その声は、珍しく焦りを帯びていた。

一同はドールの言った通り、アルフィの村方向へ走り出した。

一方、ナイトの障壁周囲には、恐ろしい程のステイアが集まっていた。

その緑光は風となり、圧縮されていく。

「君はっ！僕とマスターのモノなんだああああっ!!!!」

彼の叫びと共に、圧縮された風が打ち出された。

風は銃弾の如く、木を貫通して穴を開けた。

「なっ……何なのよアレはあゝっ!!」

走りながら、エリアルが叫んだ。

「感情に流され、力を暴走させたんだっ！ムチャクチャな事をする！」

ドールは解説しながら、水素ステイアを圧縮し、風に対して射出していた。

エリアルは頷くと、走る事に意識を集中させた。

「みんなっ、左の道に行くよ！真っ直ぐいったら崖だから間違えないでね！！」

ユニイの言葉に、みんなは分かれ道を左に入る。

フォルカも曲がろうとした瞬間。

「フォルカツ！！！！」

名前を呼ばれると同時に、エリアルに体を突き飛ばされた。

その刹那、エリアルの左肩を圧縮された風が射ぬく。

「エリアルツ!!」

エリアルは体は、崖の方へ向かい、落下する。

その前に、フォルカはエアリアルの手首を掴んだ。

「エリアルツ・・・!!」

「フォルカ・・・痛っ!!」

エアリアルは左肩から、出血していた。

早く引き上げて手当てしないと・・・。

そんな気持ちで、フォルカを焦らせた。

「ううっ・・・」

エアリアルは出血口を押さえている。

苦しそうな声も、聞こえてきた。

「エリアルツ、捕まって!!」

フォルカは左手を差し出した。

エリアルは、痛みを堪えながら、右手を伸ばした。

そして、フォルカの手首を右手でギュツと握った。

フォルカは、あとは引き上げるだけだと思った・・・次の瞬間。

「えっ・・・」

フォルカの手から、エリアルの手が滑り落ちる。

一瞬にして、手にあった安堵の温もりが・・・消えてしまったのだ。

「エリアルウウー……ッ!!」

フォルカの叫びは、響くだけで、エリアルは既に見えなくなっていた。

「ボウズッ!」

ウエルトが駆け寄り、フォルカの体を引っ張る。

彼の体は、まるで車輪付きの荷台を引くかの様に、いとも簡単に動いた。

ウエルトは、そのままフォルカを引っ張り、皆の待っている方向へ走った。

「っ……、……」

フォルカは、自分の左手を見つめ続けていた。

肌色の皮膚に、絵の具をこぼしたかの様についている、エアールの血。

「エアール……、僕は……っ」

繰り返し頭の中に浮かび上がる、彼女の顔。

誰よりも優しく、負けず嫌いで……自分を支えてくれていた存在。

いつまでも消えない喪失感が、フォルカの胸の奥を締め付け続けた。



### 第35話〜アルフィの村〜

一体、どのくらい走っていたらろう。

何秒、何分、何十分、人によって体感速度は違うが、かなり走り続けたのは確かだった。

「みんなお疲れえ〜、ここがアルフィの村だよ」

ユニイは、胸を張って言った。

この前ユニイが言った通り、あるのは家と店だけで、来た人を目で楽しませるようなものは何もない。

「・・・ユニイ嬢ちゃんが言った通り、すっげえシンプルなところだな」

「わあ〜・・・家が半円状です」

半円状の家も十数件しかなく、住んでいる者の少なさがうかがえる。

「家なんて住めればいいじゃん！形なんて不要っ！・・・っていう

考えの結果、この形状になったんだよ」

ユニイは、何とも雑な理由を並べて、指でVサインをつくる。

「・・・家の壁に炎素石えんそせきを何個か埋め込んであるな」

ドールの質問に、ユニイは「待ってましたっ！」と言わんばかりの笑みを浮かべて、説明した。

「それはねえ〜・・・昔からやってる呪いまじなで、火事を防ぐって感じのヤツだよ〜っ!」

「へえ〜・・・面白いですね、フォルカ」

クラスが、フォルカに話題を振る。

しかし、フォルカは無反応だった。

「・・・・・・・・」

「・・・フォルカ？」



クラスは、下を向いているフォルカの顔を覗き込む。

フォルカの顔は・・・何とも酷い顔をしていた。

目は泣き過ぎたのか赤く腫れていて、目は覗き込んだクラスを見ようともしなかった。

それに・・・何ともいえない脱力感のある顔だった。

「・・・フォルカ」

「・・・っ、ユニ嬢ちゃん、嬢ちゃん家はどこだ？」

フォルカを見るなり軽く舌打ちをして、ウェルトはユニに聞いた。

「今から案内するよ、ついて来てっ！」

ユニが、勢いよく走り始める。

その後を、残りのメンバーは慌ててついていった。

少しして、一件の家の前にユニは止まった。

そして、扉を二・三回ノックする。

すると扉は開き、中から誰かが出てきた。

「はあ〜いっ！ようこそいらっしやいました 素石の依頼ですか・  
・ってえっ！！」

「セツ、セレンちゃんっ！！？」

扉を開けて出てきたのは、ユニィの母ではなく、セレンだった。

「どうしてママの家にセレンちゃんがいるの！？」

「アヤさんに素石を貰いに来たの。そしたら、ついでお手伝いしてって言われて・・・アヤさんのお願いを断る訳にはいかないから、手伝ってるの」

「そうだったんだ、セレンちゃん・・・ママは今家に居る？」

ユニィの質問に、セレンは微笑みながら答えた。

「アヤさんは今、素石を採りに行ってるよ。もうすぐ帰ってくると思っけど・・・」

セレンがそういった次の瞬間、扉の近くに漆黒の陣が出現する。

陣より黒光が溢れ、柱の様に陣から黒光は放たれ続ける。

そしてその黒光の柱は、一瞬にして拡散した。

その中には、二人の人がいた。

その片方は……。

「ママッ!」

ユニイは片方の人に、おもいつきり抱きついた。

「あらあらっ、何処かで見たことある可愛らしい女の子だと思ったら、ユニイだったのねえ」

ユニイの母親は、ハキハキと喋るユニイと逆で、何ともおっとりした口調で温かさを感じた。

「ママ……ずっと家に帰らなくてごめんなさいっ!」

「確かに手紙とか来なかったから心配だったけど、セレンちゃんが事情を話してくれたから、今は無事帰って来たことを言わせてもらっわあ」

「ママッ……」

「でも、次からは出かける時にはちゃんと私に言うこと……いいわねえ」

ユニイは元気一杯に返事をし、再び母親のアヤに抱きついた。

すると、アヤと共に現れた、もう片方が人が口を開いた。

「……アヤさん、これは家の中に置いておいていい物か？」

「それは……このまま外に置いて、この土地のスティアを取り込ませるわぁ」

アヤと会話している人物を見て、ドールとフォルカは大声で叫ぶ様に言った。

「フィニカ様っ!!」

「兄さんっ!!」

二人の言葉に、呼ばれた人物は振り返る。

雪の様に白い髪、それと対象的な黒衣。

そして、彼の顔を隠してしまっている、黒い仮面。

「またお前達か・・・」

フィニカと呼ばれたが、今や自分はニグレドだと、彼は冷たくいい放った。

「あらあ、セレンちゃんだけじゃなく、ニツ君とも知り合いだったのねえ」

緊迫した空気の中、アヤのおっとり口調と天然混じりのセリフを聞いて、一同は一気に肩の力が抜け落ちた。

「・・・ふう、ここね」

声の主、シェリナーは辺りを見回す。

すると、赤と青の交じり合った障壁の中に、座り込んだナイトがいた。

「シェリナーか・・・早かったね」

「貴方の素術が暴走したのを機械が感知したから、呼ばれる前から此方に向かっていたの」

「さすが・・・だね」

シェリナーは右手に炎素スティア、左手に水素スティアを収束させる。

少しして、障壁の周りに両手のスティアを拡散させる。

シェリナーのスティアは障壁と接触すると、その接触した部位を、まるでパズルの様に崩していった。

そして一分も経たない内に、ナイトを苦しめた障壁は全て崩れた。

「・・・解素術くらい、覚えておきなさい」

「そうしとくよ」

そういうと、ナイトは立ち上がった。

「スティアを補充しに、一旦施設に戻れ・・・とのことよ」

「・・・わかった」

施設の方向に歩き出したシェリナーの後を、ナイトは黙ってついていった。

(・・・マスターに、何て言われるだろう)

そんなことを考えながら、帰り道を渋々と歩き続けた。

### 第36話 休戦 1

「はいはい皆、どお〜んどん食べてねえ」

「はあ〜い、いただきまあ〜すっ!」

ユニイが元気良く返事をして、食事を始める。

しかし、この食卓には今、もの凄く気まずい空気が漂っている。

第一に、フォルカはエリアル消失によってテンションが恐ろしく低い。

そんなフォルカの目の前では、ニツ君ことニグレドが黙々と食事している。

「ちょっと、そんなにじろじろ見ないですよ。食べずらいじゃん」

「お前の様なちんちくりん、誰が見るか。私が見ているのは、お前の隣にいるフィニカ様だ。この自意識過剰娘が」

「ニグレドお兄ちゃん見てたの? キモッ・・・やめてよね、オバサン」

「黙れっ、私はまだ20歳だ・・・断じてオバサンではない。分か



「ったか、このまな板娘」

セレンとドールは、口が開くたびに、互いの心をえぐり取る様な罵り合いを繰り返していた。

「・・・ウエルトさん」

「んっ？何だ、クラス嬢ちゃん」

クラスが、ウエルトに話しかける。

「何というかその、私・・・食事は楽しくするものだとずっと思っていました」

「まあ・・・普通はそんなもんだらう」

「ですが・・・現状は、重苦しい空気が支配してしまっています。はっきり言って、もの凄く食べにくいです」

クラスの意見に、「確かにな」と言ってウエルトは同意した。

そして、ウエルトはフォルカの方を見て、顔をしかめさせてこっぴつた。

「俺的には、ボウズがいつまでもウジウジしてるのが・・・イライラするぜ」

「ウエルトさん・・・」

そう言うと、ウエルトは立ち上がり部屋から出ていった。

「・・・」

クラスは、フォルカ達の方を向いた。

彼女の的には、やはりエリアルのことと傷ついているフォルカが心配だった。

しかし、今の彼にどんな言葉を言えばいいのか・・・クラスはしらなかつた。

（だれか・・・知らないでしょうか？今のフォルカを励ませる方法を）

そんな事を考えていると、ニグレドが立ち上がった。

その時、クラスは何かを思いついた。

クラスは、今にも部屋から出ようとしているニグレドに駆け寄った。

「あのっ・・・少しだけ、お話しませんか？」

「話？・・・どうしてだ」

「えっと・・・貴方なら、分かるんじゃないかと思って・・・」

しばらく、ニグレドは黙り込む。

そして、セレンの方を見て、こういった。

「セレン、少しクラスと話をしてくる」

「うんっ、分かったあゝっ!!」

セレンは即答して、再びドールと言い合いを始める。

その返事と同時に、ニグレドは部屋から出た。

慌ててクラスも、彼の後を追った。

その様子をフォルカは見ていたが、すぐに俯き、エリアルを失った時の痛みを、胸に無理矢理しまいこんだ。

「……で、話とは何だ」

部屋を出たあと、話を聞かれない為に、クラスはニグレドと外に出た。

そして、ニグレドは冷たい声でクラスに聞いてきた。

「実は……傷ついたフォルカを励ますには、どうすればいいですか？」

クラスの質問に、ニグレドは小さくため息をはく。

「俺には関係ないことだ、聞く相手を間違えすぎだ」

「いいえ、間違いではないと思います。だって貴方は……フォルカのお兄さんですから」

クラスの返答に、ニグレドは唇を軽く噛む。

そして、少し強めの口調でクラスに言った。

「この前言ったはずだっ！仮に俺がアイツの兄だとしても、今の俺はニグレドだっ！！！」

「ですが・・・私達には、貴方がフィニカさん以外のものに見えないのです」

クラスの一言に、言葉が詰まる。

ニグレドからしたら「そんな奴は知らない」と否定したかったが、何故か口がそれを拒否した。

「お願いします、私に・・・フォルカを元気付ける為の助言を下さい」

クラスの頼みを聞いた時、頭の中に一つの情景が浮かんできた。

ぼやけてはいるが、少年が二人いるのとは分かった。

片方の少年が、自分より少し小さなもう一人の少年の両頬を引っ張る。

“わっ！いつ・・・痛いよ兄さん”

“お前がくよくよしてるからだろっ！ほらっ、くよくよしてないで笑えっ！”

そういつて少年は、摘んでいる両頬を、軽く上に持ち上げる。

すると、くよくよしていた少年が、まるで笑っている様に見える。

“いいかつ！苦しいから、悲しいからつてくよくよしてたら、強くなれないんだぞ！？だから笑えつ、笑えば苦しきなんてぶっ飛んじまうからさっ！！”

少年はそういつて、満面の笑みを浮かべた。

「……頬を」

「……頬を？」

ニグレドのいったことを、クラスは繰り返して言う。

「頬を……つねって、無理矢理にでも笑わせてみたらどうだ？」

「……それって、昔フォルカにやってた事ですか？」

「……何となく、思いついただけだ」

そういつと、ニグレドはクラスから顔を反らし「早く行け」とユニイの家を指差した。

「・・・助言、ありがとうございました」

クラスは、お辞儀をして家へと戻っていった。

「・・・」

ニグレドは、無言でその場から動かない。

「俺は・・・あのガキの・・・兄？」

自分という存在が分からないことに、少しだけ不安感を抱いた。

「はあっ！...」

ウェルトは、村から少し離れた場所で、魔物と交戦していた。

四方から、獣型の魔物が飛び付いてくる。

ウエルトはそれを身を低くして回避。

そのままの態勢から上空に両手を掲げる。

次の瞬間、ウエルトの上空にいる魔物達の腹部辺りに、白い魔方阵が出現。

その魔方阵から、白光の光線が撃ちだされる。

その光は、魔物達の腹部を貫通、そのまま地面へと落下した。

「……やっとエトのスティアが馴染んできたか」

そういつて立ち上がると、背後から気配を感じた。

振り返るとそこには、自分とよく似た青年が、木ののさがっていた。

「……よお、ディシア」

「俺のこと、思い出したんだな……ウエルティオ」

そういつてディシアは、軽く微笑む。



「ああ、やっと自分の事を思い出したぜ、バカ兄貴」

「ふっ……言ってくれる、だがそれもお前らしくていい」

そういつてディシアは、背を向けて歩きだした。

「もう行くのかよ？」

「俺の自由時間は、短いんだ。遅れたらシェリナーが色々とづるやいからな」

そういつて、ディシアは足元に光素スティアを展開。

移動準備を、ものの数秒で完了させた。

「……お前の無事が知れて、よかった」

「心配かけたな……」

次の瞬間、ディシアの姿はすでになかった。

「……さて、俺もそろそろ帰るか」

ウェルトは、ディシアが向いていた方向とは逆を向き、ユニィの家  
に向かって歩きだした。

第37話 休戦 2

フォルカは、一人食卓に残っていた。

彼の脳裏に浮かぶのは、黒髪の少女の姿。

笑顔が眩しく、情に熱く、誰にでも対等に優しく接する事が出来た彼女。

そんな彼女を、助けられなかった。

あの時、もっと自分に力があれば……。

そんな思いが、あの時からフォルカ自身を責め続けている。

「エリアル……」

彼女は、無事生きているのだろうか？

もし生きているのであれば、会いたい。

あの時の事を謝りたい。

そして……今度こそ彼女を守り抜きたい。

「・・・きつとエリアルは僕のことを、恨んでる」

しかし、彼女に拒絶されるのかと思うと、頭の中で逃げだしたくなる衝動が生まれてくる。

そんな時、部屋の扉が開く音がした。

「・・・・・・・・」

ゆっくりと、フォルカは音のした扉の方を向く。

そこにいたのは、緑色の髪色をした少女だった。

「クラス・・・」

「フォルカ、少しお話しませんか？」

彼女はぎこちなくだが、こちらに笑ってみせた。

「でさあ、ウエルト兄ちゃんがあゝ・・・」それは偶像崇拜だつ！  
「つていつて私の絵を紙飛行機にして思いっきり遠くに飛ばしちゃうのー!!」

「キャハハハツ、何それえゝゝ!!・・・つで、どうなったの？ユニイちゃんの絵は」

「それがさあ・・・」神様だけに紙飛行機にしてやったぜ、ユニイ嬢ちゃん!」つて、ウエルト兄ちゃんたら、どや顔してるんだよ!」

「自意識過剰すぎだよお!アツハハハハ!!」

ユニイとセレンは、ユニイの部屋の中で、色々な話をしては、笑っていた。

それはまるで、今まで会えなかった時間を取り戻すかの様にも見えた。

「私はねえ・・・この前ニグレドお兄ちゃんがくしゃみしてたの。風邪だったら大変つて思った私は、上着を持っていつてあげたの」

「わあゝ、セレンちゃんチョー善人!」

「そしたら・・・私つたら間違えてバスローブ持ってきちゃったのー!!」

「アハハハハツ、セレンちゃんチョードジだね!」

各々の話で、時間を忘れるくらい盛り上がった。

そんな中、セレンが少し淋しそうに口を開いた。

「私……ユニイちゃんどずっとずっと、こうして一緒にいたいよ」

「私だって、セレンちゃんと何時までもこうしていたいな」

ユニイの返事に、セレンは彼女の肩を持って、こういった。

「ユニイちゃん……一緒に施設長の所に行こ。そして、ユニイちゃんも私達の仲間に……」

「セレンちゃん、それは無理だよ。ナイトは私達のことを害虫としか思っていないから、いったところで何かされるのがオチだよ」

「でも……素術の威力や変換できるスティアの数は、ユニイちゃんの方が上でしょ。だから私よりずっといい扱いされるよ、だから……」

その言葉を聞いた時、ユニイは肩に乗っているセレンの手にそっと手を添えた。

そして、真っ直ぐセレンの目を力強く見つめた。

「それなら尚更、行くわけにはいかないよ。私のせいで、セレンちゃんに蔑ろにされるなんて・・・絶対に嫌だ」

「ユニイちゃん・・・」

ユニイの言葉に、セレンの目頭と胸の奥が熱くなった。

ここまで自分の事を本気で思ってくれていたなんて、セレンは想像もつかなかった。

セレンは、ユニイの肩から手を離れた。

そして、ユニイの方を真っ直ぐ見つめた。

先程のユニイくらい、力強いものを秘めた目で・・・。

「ユニイちゃん、私・・・ユニイちゃんから逃げないで待ってるから。だから・・・次会ったときには、私の思いを全部ぶつける」

「わかったよ、その時は・・・私もセレンちゃんに思いを全部ぶつけるね」

ほんの少しの間、互いの目を見つめ続ける。

そして、すぐに二人は笑顔になる。

まるで何事も無かったかの様に、再び二人は話を始めるのだった。

「・・・ふう」

ドールは、風に当てるために外に出ていた。

今日はいろいろと起こり過ぎたのだ。

変わり果てたマスターとの再会、セレンとの激しい口論などという  
いるだ。

「私とした事が、熱くなりすぎたな・・・」

セレンとの口論を思い出し、少し反省をする。

あの場は、ユニイがセレンを連れて行ったため、強制終了された。

ユニイが来なければ、まだ続いていたであろう。

仮にも成人している者が、子供と男の事で口喧嘩をしていたと思う



と、途端にむなしくなってきた。

「はぁ………んっ？」

ため息をついたドールの行き先である森の入り口に、見覚えのある男性の姿が見えた。

「あれは……フィニカ様っ！」

彼は、左手で頭を押さえ、俯いていた。

体調がすぐれないのかと不安に思ったドールは、ニグレドとなってしまう青年に近づこうとした。

しかし、何かの気配を感じ、咄嗟に近くの木の影に身を隠した。

ニグレドに近づいていた、気配の正体は……。

「よぉ、迷える子ウサギさん」

自分の仲間である、僧侶のウェルトだった。

「お前は確か……ウェルトだったか？」

「ご名答、流石は迷える子ウサギの中でも、優等生にランクインしてるだけはあるな」

「・・・訳の分からない事を言うな。あと、一般には迷っているのは子ウサギではなく、『子ひつじ』だ」

半分呆れた様な口調で、ニグレドは的確に突っ込んだ。

それを聞いて、「細かい事は気にするな」っと、ウエルトは笑い飛ばした。

「何か迷ってんのは図星何だろ？今なら、この神様が直々に悩みを聞いてやるっ！！」

ウエルトは、左手を腰に当て、右手の親指を立てて、どや顔で言った。

それを聞いて、ニグレドはゆっくりと口を開いた。

「正直・・・今俺は、迷っている。施設長達が正しいのか、お前達が正しいのか・・・分からないんだ」

その相談に、ウエルトはすぐに答える。

「なるほどなあ、俺が正しいっ！！……って言いたいが、そこは人によって価値観が違うからな」

珍しく自分を売りに出ないウェルトに、物陰でドールは驚いた。

「まあ……あれだ。悩んでる時には、体を動かすのが一番だ！！」

そういつてウェルトは、笑い出した。

それを見て、ニグレドの口元が一瞬、笑った様に見えた。

「体を動かすか……それもいいかもな。では……」

ニグレドは、両手を体の前に出す。

すると、手と手の間に影が伸び、一本の槍を形成した。

「少しお相手願いたい」

「喜んで受けてやるぜ、魔物じゃ肩慣らしにならなかったからよ」

ウェルトの足元に、白い光が出現する。

「行くぞっ!」

二人は、ほとんど同時に地面を蹴った。

第38話 休戦 3

(フィニカ様・・・)

ドールは、物陰から二人の様子を伺っていた。

いくら手合わせといっても、恐らくウェルトは手加減なんてしないだろう。

自分の元マスターも、どんな時でも相手に失礼のない様に、全力で行くことを大切にしていた。

それは、ニグレドになっても変わらないと、何故か確信できた。

「オラアッ!!!」

ウェルトが自分の周囲に光素スティアを収束、魔方陣を形成した。

その魔方陣の六カ所から、白光の光線が放たれる。

ニグレドは左側に体を動かして回避をしたが、光線は折れ曲がり、ニグレドの方へ再び向かって来た。

「ッ!？」

驚きながらも、ニグレドは一発も擦る事無く光線を避け続ける。

右、左、上、下。

数々の方向から、絶え間なく白光がニグレドを襲ってくる。

「・・・・・・・・」

ニグレドは無言で、ある一点で動きを止める。

そんな彼に、全ての白光が全方位から襲う。

あと少しで彼の体に当たる・・・そんなスレスレの距離で、ニグレドは動いた。

「はあっ!」

手にしていた槍を、勢い良く回転させ、振り回し始める。

槍によってつくられた白光を近づけさせない空間。

その空間は、何度も向かってくる白光を弾き、弾き、光素スティアへと拡散させた。

「ほお……、やるじゃねえか」

「貴様こそ、この前まではこんなに細やかなスティアの制御は出来てなかっただろう」

互いに、一回戦ったときより相手の実力が上がっていると確信した。

「さて、俺はこの辺で失礼させてもらおう」

そう言ってニグレドは、ウエルトに一礼してその場を去った。

そんな彼の姿を、ドールは影で見守っていた。

「さて……俺らも帰るぞ、ドール嬢ちゃん」

「……!?」

突然ウエルトに名前を呼ばれて、驚きながらもドールは影から出てきた。

「……気付いていたのか？」

「まあな」

「何時からだ？」

「始めからに決まってるだろう」

その言葉を聞いて、ドールは首をガクツと前に曲げた。

「・・・で、話って何？」

フォルカがクラスに問いかける。

するとクラスは、早歩きでフォルカとの距離を詰める。

そして、彼の両頬を思いつきりつねった。

「っ!!!？」

フォルカが急に起きた痛みにも、顔をしかめる。

そしてクラスは、その手を上方方向に持ち上げようとした時・・・。



「~~~~ツ!!」

「あっ・・・」

フォルカが、カ一杯腕を振り上げ、クラスの手を外した。

クラスは、抵抗は予測出来ていたが、まさか両手が外されるとは思っていないで驚きを隠せなかった。

「きつ、急に何するんだよクラスッ!」

フォルカが両頬を押さえて言った。

結構な力でつねったせいかな、彼の頬は赤くなっていた。

「すみません、フォルカを励ましたくて」

「励ましたって・・・それなら頬をつねらなくてもいいじゃないか」

フォルカの一言に、クラスは静かに答えた。

「フォルカが暗い顔をしている時に、頬をつねって無理矢理笑わせ

ていた……と聞きました。だから……」

「それって……」

フォルカの脳内に、一人の男の姿が浮かぶ。

フィニカ・テイル。

彼の兄だった。

幼い時のフィニカは、いつもくよくよしていたフォルカの頬つぺたを、思いつきりつねって無理矢理笑わせていた。

確かに痛かったけれど、その後はちゃんと笑えていた自分がいるのだった。

でもなぜ、クラスがその事を知っているのだろうか？

「……ねえクラス、その事、誰に聞いたの？」

「ニグレドさんです。ですが、思い出したというよりは、ふと頭を過った……という感じでした」

「そう……」

悲しいと思ったが、彼の口から自分の話が出ただけでも……嬉し

かった。

「フォルカ、確かにエリアル的事はとても悲しい事です。でもきつと・・・いえ、絶対に・・・エリアルは今のフォルカを見たくはないと思います」

「クラス・・・」

「ですから、暗い顔をしないでください。エリアルも、私も・・・残りの皆も、フォルカには笑顔でいてほしいと思っているはずです」

そう言つてクラスは、ぎこちなくだが微笑んだ。

そのぎこちなさに、今のフォルカには十分過ぎる励ましのメッセージがこもっていた。

「・・・クラス」

少しして、フォルカが口を開く。

「僕、少しずつでも頑張ってみる。もしもエリアルと再開した時に、自然と笑顔が出るくらいまで・・・」

「頑張ってくださいフォルカ、私も応援します」

フォルカの言葉に、先ほどよりは自然な笑顔で、クラスは微笑んだ。

「……んっ」

黒髪の少女・エリアルが、ゆっくりと目を開けた。

目の前には、真っ白な景色と、その中にあつた外の景色が見ることの出来るガラス張りの場所があつた。

少し体を起こして見た。

ナイトに射ぬかれた、左肩に痛みが走る。

痛みに、咄嗟に肩を押さえると、包帯を巻かれている事に気付いた。

「……一体誰が」

そんなことを考えていたら、漂ってくる匂いに反応する。

すると、その匂いに連動するかの様にグウ〜ツとお腹から古典的な

音が流れる。

エリアルは寝ていたベッドから降り、辺りを見回すと、下へ降りる階段を見つけた。

エリアルはそこに向かって、ゆっくりと歩き出した。

第39話 休戦 side エリアル

エリアルは、階段をゆっくりと降りていく。

下へ降りていくにつれて、何かが聞こえて来た。

(これって・・・歌?)

聞こえる声からして、男性であることは分かった。

エリアルは、耳を澄ます。

聞けば聞くほどに・・・。

(ヘツタクソだなあ・・・この人)

嗅覚を満たすとてもいい匂いと、聴覚を刺激する破滅級の歌声。

そのギャップに、胸焼けさえ感じた。

それでも足は止めず、下までおり続ける。

そして、かなり長く感じた階段の一番下に、ようやくたどり着いた。

目に入ったのは、四角い机に4つの椅子、部屋の端にある小さなキッチン。

そして、食事の準備をしている一人の男性の姿だった。

青色の短髪と、髪の色に負けじと青い目をしていた。

「……あつ、起きたんですね。体の具合はどうですか？」

「えっ……ま、まあ今のところは大丈夫」

「そうですね、それはよかったです。貴女のような可愛らしい女性に何かあつては、神も嘆かれるでしょうから」

「神……？」

聞いたことのあるフレーズが出てきた。

“神”、この世界でそんなこと言う人は、ほとんどが僧侶などの聖職者だ。

「貴方って、まさか僧侶ですか？」

「はい、そうですよ。この辺りで神に変わり、人々に救いの手を差し伸べさせてもらっております」

神を信じている感じから、ウエルトの様な変わり種では無いなと思  
った。

「あの、それがどうかしましたか？」

「いえっ、別に。ちょっと知り合いに、ウエルトって言う僧侶がい  
たっただけでしから」

エリアルが不意に出したウエルトの名前に、男性は意外な反応を示  
す。

「貴女っ、ウエルトの知り合いでしたか！何たる偶然！これは神の  
お導きに違いないっ！！」

そういつて男性は、床に膝をつき、天井に向かって己の信じる神に  
祈りを捧げた。

（なっ、何よコイツ！？）

急に天井に向かって祈りを捧げ始めた男を見て、エリアルは驚いた。

僧侶とは、コレが普通なのだろうか？



そんな疑問が浮かび上がって来ても、無理も無かった。

「ああ、申し遅れました。僕は、この付近で神の素晴らしさを人々に伝える役割を請け負っている僧侶、シスカと申します」

そういつてシスカと名乗った男性は、頭を下げる。

「えっと・・・私はエリアル、助けてくれてありがとうございます」

エリアルも、簡単に自己紹介とお礼を口にした。

「自己紹介もしたことですし、朝食をとりませんか？料理が冷めてしまいます」

「あつ、はい」

シスカはそつとエリアルの肩に手を置き、何時の間にやら引いていた椅子に座らせた。

すると、目の前には何ともバランスの取れたメニューが用意されていた。

主食、惣菜、汁物、果物などきちつとした品数と、赤・緑・黄の三色のバランスもかなりよくとれていることが、目視でもわかるほど

だった。

「わあ〜・・・すごい豪華な朝食ね」

「健康な体を維持するためには、朝・昼・夜の食事できつちりと栄養を摂取する事が大切ですからね」

そう言っつて、シスカはエリアルに水の入ったコップを渡した。

「さっ、いっぱい食べて下さい」

「うんっ、いただきまーすっ！」

シスカの言葉と同時に、エリアルは勢いよく食事を開始した。

そんな彼女を見て、シスカも向かい側の席に座る。

そして、胸の前で手と手を合わせて、祈りを捧げ始めた。

その様子を見て、エリアルは食事の手を止めた。

「あ〜・・・私も、お祈りした方がよかった感じかな？」

「ああ、気にしないで下さい。僕は職業的にやる事になっているだけですから、貴女に強制的にやらせる気はありませんよ」

そう言って、シスカは優しく微笑んだ。

食事をしながら、シスカが色々話してくれた。

私の上から落ちてきた事、時間は一日ほど経っている事、そしてシスカの住んでるこの家がアルフィの村に近い事等々。

私も、シスカに色々と話した。

旅の事、仲間の事、目的地がアルフィの村である事。

「……そうでしたか。貴女の目的地が、僕の家と近くて良かったですね。これも神の導きでしょう」

「こればかりは、神様に感謝するわ……」

そう言って、エリアルは苦笑いした。

「さてと、そろそろアルフィの村に行こうかな」

エリアルは、椅子から立ち上がる。

すると、ある事に気付いた。

「・・・あれ？私の素器は」

「ああ、忘れていました。貴女の素器は、大変なことになってしまいましたよ」

そういつて、シスカは戸棚から包みを取り出した。

その包みを広げると、色々な所に穴の空いたナイフ型の素器があった。

「ああーっ！！私の素器があーっ！！！！」

「直してみようとしたのですが、所々のパーツが無くて無理でした。こうなっては、専門家に頼むしかありません」

そういつと、シスカは真っ白のマントを羽織り、杖を手にした。

「んっ、どうしたのシスカ？」

「僕もアルフィの村に行きます。困っている人を助けしないで、何が

僧侶ですか」

そういつて彼は、こちらにやわらかな笑顔をした。

(これが・・・本当の僧侶)

ウェルトも一応僧侶だが、自分が神だとか、なんかズレた事を言うので、僧侶だと言うことを忘れかけていた。

「さあ、行きましょうエアリアル」

「・・・うんっ!」

エアリアルは、シスカに物凄く近づいてついていった。

## 第40話 再会

「……じゃあ、お世話になりました。アヤさん」

普通の人なら、まだ夢の世界にいる時間。

その時間に、セレンとニグレドはエブロズィークの家から出ようとしていた。

「もうちょっとゆっくり出来ないの？」

「シエリナーさん待たせてるし……ユニィちゃんの顔をみたら、大都会に帰るのが辛くなりそうだから」

そういつてセレンは、軽く笑って見せる。

その姿を見て、アヤも微笑む。

「そう……何時でも帰って来ていいからねえ。ここはセレンちゃんの家でもあるんだから」

「もちろをニグちゃんもよっ！」と言って、ニグレドに向けて指を

差した。

「ありがとうございます、じゃあ・・・行つて来ます」

「いつてらっしゃい、セレンちゃん・・・ニグちゃん」

そういつてアヤは、二人に手を振つた。

彼女に見送られながら、二人はアルフィの村を離れて行つた。

「・・・一言も喋つて無かつたけど、良かったの？」

「・・・ああ。俺の帰る場所は、大都の研究施設だけだ」

そうとだけ言つて、ニグレドの足元に闇素ステイアが集まり始める。

次の瞬間、ニグレドは自分の影に包まれ、消えた。

あわててセレンも、風素ステイアを収束、トツプスピードで大都に向かつた。

「おはようございます、アヤさん」

「あら、クラスちゃん。おはよう」

二階から、クラスが降りて来た。

クラスの目に映ったのは、朝食の準備をするアヤの姿だった。

「アヤさん、何か手伝う事はありませんか？」

「そうねえ〜・・・じゃあ入り口にある桶に水を汲んでおいてくれる？素石の加工に使うの。・・・あつ、家の裏に井戸があるから、そこで汲んでねえ」

「分かりました」

クラスは入り口に行き、桶を持ち上げる。

そして、入り口の扉を開き、家の裏の井戸に向かった。

家の裏には、古びた井戸があった。

「・・・よいしょっ」



普段は、こんなこと言わなくても軽々しく水など汲めるのだが、今日は何となく言ってみた。

(人らしく・・・ですか)

多くの人に言われた、『人らしく生きる』と言う一言。

まだ詳しくは分からないが、フォルカ達と旅をしていて、何となく分かり始めた気がする。

彼らはよく笑い、よく泣き、よく怒り、よく助け合う。

ナイトの元に居たときには感じなかった、温かな感じが彼らからは溢れている。

そのせいか、自分も微笑む事が多くなった気がした。

水を一杯に汲み終わったので、クラスは帰ろうとした。

その時・・・。

「クラスッ!!」

自分の名前を呼ぶ、ずっと聞けて無かった声が聞こえた。

「……っ、エリアルッ!!」

元気に走って、こちらに近づいて来るエリアル。

クラスは桶を地面に置き、飛び付いてきた彼女の体を抱き締めた。

「フォルカッ、フォルカッ!!」

部屋の扉を、力強く何度も叩く。

その音を聞いて、不機嫌そうにフォルカは体を起こした。

「……どうしたのクラス?こんな朝っぱらに」

「急いで支度をして下さいっ!私は他の人達も起こして来ます!」

そういうと、足音がどんどん遠ざかっていった。

クラスがあそこまで焦っているなんて、余程の事が起こったのだろ

う。

フォルカは体を起こし、急いで身支度をした。

「ええーっ!!?? セレンちゃん達がいなくなったと思ったら、エリアルお姉ちゃんが生き返ってるうーっ!!??」

「勝手に殺さないでよっ!!!」

ユニイは、エリアルを死者の様に言った。

それに対し、鋭く突っ込みを入れる。

「全く、静かになったと思ったら・・・また騒がしくなったな」

ドールが、心底呆れた物言いと言う。

しかし、口元には微かに笑みが浮かんでいる。

彼女もまた、旅を通じて変化し始めているのであろう。

「ウェルトツ、相変わらず自分の神を貫いているようですねっ!」

「よつつ、シスカ！テメエもそろそろ、俺を信仰する僧侶第一号になつてみるかっ！？」

「ハハハッ！僕の信仰する神は、まだまだ現役だよ」

こっちの二人は、知り合いらしく、楽しそうに話していた。

「いやあゝ・・・まさかテメエがエリアル嬢ちゃんを拾つてたとはな。まっ、エリアル嬢ちゃんには俺の加護があるから当然だろう！」

「君の加護もあるだろうけど、僕の信じる神も、ここまで導いて下さったんだよ。あつ・・・それって、半々の加護が彼女に宿っているってことじゃっ！」

「二人して話を広げんじやないわよっ！收拾つかなくなるでしょうがーっ！！」

エリアルの突っ込みで、大の大人僧侶二人は、笑い出した。

「ハハハッ！！本気な訳ないでしょエリアルッ！」

「大人のジョークが分かんねえんだなっ、エリアル嬢ちゃんはっ！！」

「~~~~~ッ！！！！」

完全に二人のペースに乗せられ、エリアルは顔を真っ赤に染め、僧侶達の頭を思いっきり殴った。

「フフフツ、エリアルちゃん・・・だっけ？あの子が来て、皆の表情が明るくなった気がするわぁ」

「エリアルが無事で、皆嬉しいからだと思います」

もちろん私も、と付け足して、クラスが微笑んで言った。

アヤも、微笑み返して来た。

その時、もの凄い勢いで階段を降りる音が響く。

「エリアルッ！！」

「フォルカッ！」

普段は絶対と言っていいほど出せないくらいの大声で、彼女の名前を呼ぶ。

「良かった、無事だったんだ！」

そういつてフォルカは、エリアルに抱きついた。

無論、余りの嬉しさの反動で……。

「ちょ……っ！フォルカツ！！」

エリアルは必死に、フォルカを引き剥がそうと両手に力を込める。

しかし、フォルカの体は全くと言っていいくらい動かなかった。

離れないくらい心配してくれていたと思うと、何となく彼を引き剥がす気が薄れる。

しかし、周囲から感じる視線がそれを上回るほど恥ずかしかった。

(……後で一発殴ってやるっ！)

心にそう誓い、エリアルは、今は久しぶりに感じる温もりを、素直に受け止める事にした。

## 第41話 聞きたかった本題

「・・・みんな揃ったことだし、アヤさんにあの事を聞いてみよっか」

赤くなった頬を撫でながら、フォルカが言った。

先ほど、エリアルが無事生存していた嬉しさに、彼女に抱きついてしまった。

それが恐らく原因で、エリアルに思いっきりぶたれたのだ。

「・・・そうねっ!」

エリアルが顔を赤らめそう言つと、残りのメンバーも頷いた。

「私に聞きたい事って何かしらあ?」

「実は、素石の事について、聞きたい事が・・・」

「・・・ニグちゃんが、フォルカ君のお兄ちゃんのフィニカ君、て事でいいのかしらあ？」

「はい、そうです」

「しかもお・・・みんなどころか、弟であるフォルカ君の事でさえ覚えていないって事？」

「はい・・・」

アヤの言葉に、重々しく口を動かして答えた。

他のメンバーも、黙って耳を傾けていた。

「ミセツトのシスターには、アヤさんなら分かるかもしれないと言われたので、僕達は貴女の元へ来ました」

「そう・・・」

そういって、アヤは少し黙り込んだ。

そして、しばらくして口を開いた。

「それは多分、スティアが関係あるわね」



「スティアが・・・ですか？」

フォルカの言葉に、アヤは頷いた。

「知らないなら教えてあげるわね。ユニィちゃん、クラスちゃん、ドールちゃん、こっちに」

「はあくいつ!!」

「わかりました」

「了解した・・・」

三人がアヤの近くで一列に並ぶ。

すると、アヤがヒソヒソと三人に何か話した。

「じゃあみんなには、スティアの性質について教えるわね」

そういつて、アヤは三人に合図した。

すると、ユニィが風素スティア、クラスが炎素スティア、ドールが水素スティアを掌の上で小規模に収束した。

「この三つのスティアは、素質や練習で扱えるスティアで、名前通りに火や水、風を操るわ」

そういつたら、三人に「もういいわよ」と言っただがらせた。

そして、今度はウエルトを呼んで、光素スティアを収束させた。

「そして、ウエルトさんが出している光素スティア。これと闇素スティアは、人として生まれた時にどちらがその人に合っているかが決まるわ」

そういつて、アヤは素石の入った袋から、闇素石を取り出した。

「この二つのスティアは他とは違って、制御する条件の様なものがある。ウエルトさんの扱う光素スティアは、『心の強さ』に応じて威力や使い方が変化するわ」

「心の強さ・・・ですか？」

フォルカの言葉に、アヤは頷いた。

「そうよ。ウエルトさんは自分の意志を貫いているわよね？彼の場合はその揺るがない思いが強さであり、光素スティアを扱える条件

ね

そういうと、アヤはウェルトにお礼を言って下がらせた。

「そしてニグちゃん・・・フィニカ君が扱っていた闇素スティアだけど、これはちょっと厄介なの」

「厄介？どういうことだ、早く教えろっ！」

ドールが焦りながら、アヤに聞く。

「闇素スティアは・・・『記憶』の在り方によって威力が変化したりするの。高濃度になると、使い手の記憶を食い物にしてしまう、危険なスティアよ。しかも・・・記憶を食らった次は、内側から身体を破壊し始める。少量なら人の体内にもあるスティアだから、問題ないのよ・・・少量ならね」

全員が、言葉を発せなかった。

特に、フォルカとドールは身体に震えさえ感じていた。

自分の兄、マスターがそんな恐ろしいものを使用している

考えるだけで、背筋に大量の氷が流し込まれた様な寒気が走った。

「まあ、フィニカ君の体質と闇素ステイアが適合してるから、あそこまで扱えているんだと思うんだけどね。そうじゃないと、高濃度の闇素ステイアに一瞬にして全て持って行かれてるだろうしね」

アヤはさらっと、冷たい風に言った。

今の彼女は、あくまで第三者の目線で話しているからかもしれない。

「ママ・・・フィニカお兄ちゃんを助ける事は出来ないの？」

「出来ない事はないわ。だけど・・・うまくいくか分からないの」

「・・・教えてくれ、フィニカ様を救う方法があるというのなら、試したい」

ドールの頼みに、アヤは頷き、口を開いた。

「方法は二つ。一つは、フィニカ君が闇素ステイアを無理矢理に制御させられている場合だけど、そういう場合は大抵闇素石が脳に近い辺りに装備されているはずよ。その破壊が一つ、外すだけじゃ駄目よ。強力な闇素石に普通の人が触れたら、フィニカ君みたいに、もしくはそれ以上に身体を侵食されてしまうから」

アヤの説明に、皆は静かに耳を傾けた。

失敗すれば、こちらの身にも危険がおよぶ可能性があるからだ。

「・・・二つ目の方法は何ですか？」

フォルカの問いに、アヤは少し表情を曇らせて言った。

「二つ目の方法は・・・実現の可能性が低いの」

「何で、出来ないと決まった訳じゃないんでしょ？」

エリアルル言葉に、アヤは首を横に振る。

「無理よ・・・なにせこの方法にはカルヴィドが造った特殊な素器、人の心と記憶に潜れる『フラシユート』と呼ばれる光素器が必要なんだもの」

「っつ！！！！！」

その言葉を聞いた瞬間、ウエルトがフォルカの方を向いた。

以前、フォルカはウエルトの記憶に潜ったことがあるのだ。

「おいボウズツ、もしかして・・・」

「多分・・・そうだと思います」

「どうしたのかしら？・・・まさか、フォルカ君が持っているのが」

アヤが目を見開き、フォルカに近づいて来た。

フォルカは自分の素器を取り出して、彼女の前に出した。

「恐らく、これがフラシユートだと思います。これが光りだして、僕はウエルトさんの記憶を見ました」

「まさか・・・本物を見ることが出来るなんて・・・でもこれなら、二つ目の方法を教えても大丈夫そうね」

アヤは、フォルカからフラシユートを受け取り、みんなの方を向いた。

「二つ目の方法は・・・フラシユートを使って、フィニカ君の記憶に潜ること。闇素スティアはその人の記憶に刻まれている心の傷に寄生する傾向があるから」

そういつてアヤは、フォルカに素器を返した。

「私が知ってる事はコレくらいよ。参考になったかしら？」

「ありがとうございます、とても参考になりました」

フォルカが頭を下げると、周りのみんなも次々とお辞儀をした。

するとアヤは、先ほどとは全くと言っていい程違う、やんわりとした暖かい笑顔を浮かべ、「どういたしましてえ」と言った。

## 第42話〜出発の時〜

「それじゃアヤさん、いろいろとお世話になりました」

「もう行っちゃうのね・・・ちょっと残念」

フォルカの言葉に、アヤは軽く冗談を言う。

そんなアヤに、ユニイは勢い良く抱きついた。

「ママ・・・私、セレンちゃんに私の思いをぶつけてくるね」

「そう・・・ちゃんと二人揃って帰って来て頂戴ねえ」

そういってアヤは、彼女の頭をぽんぽんと軽くたたいた。

するとユニイは満面の笑みを浮かべ、「うんっ！」と力強く返事をした。

「あつ、そうだ！エリアルちゃんの素器だけ・・・怪我することが多いって聞いたから、ナイフ型から違う型に変えておいたからねえ」



「違う型・・・?」

アヤに渡された彼女の素器は、ブーメランに持つところが付いた様な、何とも不思議な形をしていた。

「・・・これ、どうやって使っんですか?」

「えっとね・・・今までどおりに接近して戦ってもいいし、持つところにあるボタンを押しながら振りかぶると・・・」

「ボタンを押しながら振りかぶると・・・」

エリアルは、アヤに言われた通りにボタンを押しながら自分の素器をおもいつきり振りかぶった。

すると、ブーメランの形をした部分が離れ、本当のブーメランの様に弧を描いて飛んだ。

「わあっ、上の部分が離れたっ!?!」

「遠距離攻撃も出来るから、怪我は減るかなって思ったんだけど・・・よかったかしらあ?」

「うんっ、これ・・・カッコいいっ!?!」

エリアルは目を輝かせてアヤに返事をした。

その時、後ろからクラスの驚いた様な声が聞こえる。

何事かと振り返ると、先程エリアルが振りかぶって投げた素器のブーメラン部分が、クラスの近くにいたドールに危うく直撃するところだったのだ。

「ドールッ、大丈夫ですかっ!？」

「ああ・・・危うく頭部に直撃するところだった、なあエリアル？」

「うう・・・」

ドールから溢れる殺気に、エリアルは思わず後退りする。

そんな殺気だった彼女を、クラスが宥める。

「あと、コレも持って行ってねエリアルちゃん」

渡されたのは、赤青緑の三色の円盤状に研磨された素石だった。

「それをブーメラン部分のつなぎ目にある窪みにはめると、色ごと  
のスティアがブーメランにつくのお」

「へえ〜・・・ありがとうございますっ！」

エリアルはアヤに深くお辞儀をした。

「そんじゃ、またなシスカ」

「はい、貴方もお元気で」

僧侶の二人は、数時間前の騒ぎ様からは考えられないくらい静かに会話していた。

「今から向かうクロム研究施設に、貴方の兄弟がいるんですけどっけ？」

「ああ・・・兄貴に俺の神っぷりを見せ付けに行ってくるぜ」

「はははっ、君のお兄さんか・・・それは見せつけがいがあるねっ！」

そういって、二人は軽く笑った。

そしてすぐに、シスカは力強い瞳でウェルトを見つめた。

「帰ってくる時は、君とお兄さんの二人で・・・僕の家に来てくれよ。一杯」馳走するから」

「ああ、兄貴にもそう伝えとくよ」

そういつて二人は握手を交わす。

「みんなあーっ、そろそろ行くよーっ！！」

フォルカの声が響く。

その声と同時に、旅を共にしてきた仲間たちが集まる。

「よしっ、行こう！大都のクロム研究施設につ！！」

フォルカの掛け声に、みんなが頷く。

そして六人は歩きだした。

そんな彼らの背中に、アヤとシスカは姿が見えなくなるまで手を降り続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1872k/>

---

Cromu ~クロム~

2011年10月21日08時06分発行